

国 際 セ ン タ ー 年 報

第 1 8 号

平成 23(2011)年度

大阪教育大学国際センター

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	向 井 康 比 己	1
	(国際センター長)	
体験学習を通じて学ぶ日本		
一日研生のための授業「大阪の文化」を例として	長 谷 川 ユ リ	2
	(国際センター 国際教育部門)	
台湾における教育実習の法制と実態	城 地 茂	8
	(国際センター 国際事業部門)	
ビデオ通話システム（スカイプ）を利用した		
留学生の英語授業参加	若 生 正 和	15
	(国際センター 国際教育部門)	

第二部 学生便り

留学生の声

貴重な一年	ユヌソヴァ・ナルギス	27
	(日本語・日本文化研修留学生 タジキスタン)	
日本留学の1年半	Batgerel Batdorj	29
	(教員研修留学生 モンゴル)	
チェンジ&チャレンジ	リュウ コク タン 劉 克 端	31
	(大学院教育学研究科 総合基礎科学専攻 中国)	
大学生活を振り返って	ムン ユウ ビン 文 有 彬	34
	(教養学科 自然研究専攻 生命科学コース 韓国)	
大教大 ありがとう！	グ ル レ 格 日 楽	36
	(大学院教育学研究科 学校教育専攻 中国)	
My Study Life at Osaka Kyoiku University	Claudette Christina Rose Wilson	41
	(教員研修留学生 フィジー)	
夢のような一年	ヤン ユウ チン 楊 玉 菁	47
	(大学院交換留学生 台湾)	

日本人学生の声

ドイツ留学で得たもの	福井 佑那.....	49
(教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化コース)		
Good time in the US	西山 祐介.....	51
(中学校教員養成課程 理科専攻)		
台湾海外研修での貴重な出会いと経験.....	硯 阿哉子.....	56
(大学院教育学研究科 音楽教育専攻)		
Big Step in the U.S.	松江 志穂子.....	60
(教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化コース)		
「攻め」の姿勢を「守る」	金谷 佳明.....	65
(教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化コース)		

第三部 国際センター記録

平成 23 年度 国際教育部門活動報告	67
平成 23 年度 国際事業部門活動報告	77
平成 23 年度 国際センター行事	85

付 記

国際センター運営委員会名簿.....	109
留学生宿舎運営会議名簿	109
国際交流委員会委員名簿	110
留学生推薦選考会議名簿	110
留学生推薦選考会議語学評価委員名簿.....	111
私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿.....	111
国際交流委員会ダブル・ディグリー検討専門委員会委員名簿	111
編集後記	112

巻 頭 言

向 井 康 比 己

国際センター長

2011 年度は、私が国際センターの仕事をお引き受けして 4 年目であります。国際センターにおいて、留学生や国際交流に関する本来の業務に加えて多くの行事・プログラムを実施できたのは、国際センターの教職員はもとより国際センター運営委員および国際交流委員の皆様、各事業に協力していただいている先生のおかげであります。この間、協定校も増え、本学での留学生の減少傾向にも歯止めがかかりました。ここに感謝申し上げます。

本年度は、国際センター主催の第 2 回国際シンポジウム「留学で広がる可能性-大阪教育大学から世界へ飛び立つ-」が開催されました。協定校の北カロライナ大学ウィルミントン校のウォーカー先生や卒業生を含むゲストスピーカーの講演を聴いて、留学経験がどれほど有意義であるか改めて認識することができました。大阪教育大学と柏原市との共催による「第 6 回かしわら国際交流フェスティバル」が柏原キャンパスで神霜祭と同日に行われ、大変盛り上がりしました。今年度も、JASSO 主催による「日本留学フェア」に積極的に参加し、台湾、韓国、インドネシア、マレーシアの 4 か国 7 都市に出向き、日本留学を希望する学生に本学を PR してきました。

留学生の受入だけではなく、本学学生の海外派遣ももっと積極的に行わなければなりません。現在、派遣学生数は年間 20 名弱で伸び悩んでいます。それを解決するための手立てとして、本学の学生の海外留学を奨励し、派遣学生に対して経済的な負担を軽減するために授業料免除制度を新設しました。就職や大学院進学においても英語の能力が試されます。本学学生の英語力を高めるためには、教員の英語による講義も充実させる必要があります、各専攻において英語のみで行う講義が 1 つぐらいあってもよいのではないのでしょうか。現在、教研究生や日研究生向けの授業を日本人の学生にも受講できるように単位化を検討しています。また、海外の協定校での語学研修・文化研修のプログラムも 7 つに増え、派遣実績は 45 名と大きく伸びました。国際的視野をもつ教師や社会人の育成のためには、本学学生に対して卒業までに海外経験をさせることを真剣に考えてもよいのではないのでしょうか。

本学は現在 13 カ国・地域の 35 機関と交流協定を結んでいます。今後、アジアではインド、マレーシアおよびベトナム、さらに中南米のスペイン語圏、北米などの英語圏、ヨーロッパの各地域の大学と国際交流を広げていきたいと考えています。今後ますます国際交流を深め、その質を高めるために、より一層センターの構成員が知恵を出し合うことに加え、全学教職員の一丸となったご協力が必要です。ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

体験学習を通じて学ぶ日本

一日研究生のための授業「大阪の文化」を例として－

長谷川 ユリ

国際センター 国際教育部門

1. 日本語・日本文化研修プログラムについて

日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生）は、日本語や日本文化を専攻する学部生のための日本政府（文部科学省）奨学金留学生プログラムであり、高度な日本語や日本文化に関する知識を備えた専門家として、日本と諸外国との友好関係に貢献できるような人材を育成することを目的としている。大阪教育大学でも 1996 年にプログラムを開始し、これまで 16 年間に 25 ヶ国 75 名の学生を受入れている。日研究生は日本での 1 年間の研修のあと母国の大学に戻るが、大学卒業後は日本に帰ってくることも多く、本学の修了生も 3 分の 1 以上が進学や就職のために再来日している。母国で大学教員として日本語教育に従事、あるいは日本と関係のある仕事をするなど、様々な分野で活躍している者が多い。

このような将来の日本の専門家を育てるための魅力あるプログラム作りは、受入れ大学に求められる大きな課題の一つである。国際センターでは、カリキュラムの充実をはかるために日本語科目や日本社会・文化に関連する科目を増設、2005 年度には指導教員の指導のもと自ら選んだテーマで修了レポートを作成する必修科目「日本文化研究」を新設し、2008 年度には修了レポートをまとめて口頭発表する「修了レポート発表会」も開始し、その成果を「修了レポート集」として発行するようになった。そして、2011 年度には、新たに「大阪の文化」という授業を開講し、講義とフィールドワークを組み合わせた形で、大阪という地域の特性を生かし、日本について深く学ぶことができるようにした。本稿では、「大阪の文化」を例として、体験学習を組み入れた授業について報告するとともに、フィールドワークを通じた学習方法のあり方について考察する。

2. 「大阪の文化」概略

「大阪の文化」の目標と概要は以下の通りである（本学のシラバスより抜粋）。

目標：(1) 大阪の文化・社会・言語について理解を深める。

(2) 海外で一般的に知られている「日本文化」と大阪・関西地域の文化を比較し、日本文化の多様性を理解する。

概要：大阪は過去においても現在においても、日本文化の主要な流れに影響を与え続けている。大阪とその周辺地域の歴史・文化を学ぶことにより、日本に対する理解をより深めることができる。本講義では、担当教員が交代で大阪の文化・社会・

言語について提供するトピックを通して大阪文化に関する基礎的な知識を学習するとともに、教室で学んだ内容についてフィールドワークを通して実際に体験し、知識の定着をはかる。

日研究生は毎年 10 月に来日し、1 年間の研修を行う。2011 年度の前期と後期に開講することによって、それぞれ 2010 年度、2011 年度受入れの学生が履修できるようにした。前期と後期の授業内容は次の通りである。それぞれ、テーマごとに短いレポートを課し、授業への参加度とレポートをもとに成績評価が行われた。

2011 年度前期

日程	内 容
4 月 12 日	オリエンテーション
4 月 19 日	堺の歴史と文化 (1)
4 月 26 日	堺の歴史と文化 (2)
4 月 27 日	フィールドワーク (堺の史跡)
5 月 10 日	論吉と大阪と近代ことば (1)
5 月 17 日	論吉と大阪と近代ことば (2)
5 月 18 日	フィールドワーク (適塾と中之島)
5 月 31 日	大阪城再発見 (1)
6 月 7 日	フィールドワーク (大阪城)
6 月 14 日	大阪城再発見 (2)
7 月 6 日	高安能の講演と鑑賞

2011 年度後期

10 月 4 日	オリエンテーション
10 月 11 日	大阪の歴史概観
10 月 18 日	高安能について
10 月 21 日	高安能の講演と鑑賞
11 月 8 日	堺の歴史と文化
11 月 16 日	フィールドワーク (堺の史跡)
11 月 29 日	近世・近代の大阪の暮らし
11 月 30 日	フィールドワーク (大阪くらしの今昔館)
12 月 6 日	フィールドワーク (適塾・北船場)
12 月 20 日	論吉と大阪と近代ことば

3. 体験学習を組み入れた授業

「大阪の文化」は複数の教員によるオムニバス形式の授業である。筆者が担当した「大阪城再発見」（前期）と「近世・近代の大阪の暮らし」（後期）では、どちらも講義形式の学習と、現地での学芸員による説明および見学を組み合わせた。ここでは、体験学習を含む授業の内容や学生の反応を紹介する。

(1) 大阪城再発見

大阪のランドマークとも言える大阪城には観光客が数多く訪れ、本学の留学生も日本滞在中に必ず一度は行くところである。日研生であれば、授業でわざわざ取り上げなくても自ら足を運ぶはずだ。それにも関わらずテーマの一つに選んだのは、「城」と言えば昔の建造物を思い浮かべて見学したところ、中にエレベーターが設置された近代的なつくりになんば驚き半ば失望してしまい、その歴史的経緯や見どころに気づかない学生が多いことが以前から気になっていたためである。大阪城はたびたび激動の歴史の舞台となり、城内には特別史跡や重要文化財など見どころが豊富で、昭和時代に市民の寄付金によって再建された天守閣は博物館としての機能も果たしている。

フィールドワーク当日には大阪城天守閣の主任研究員に講義と案内を特別にお願いし、その前後に1回ずつ大学で授業を行った。日本語や日本文化専攻の学生であれば、日本の歴史は一通り習っているはずであるが、専門家に日本語で説明してもらう場合、知識不足や語彙不足などで完全に理解することは難しい。事前授業のねらいは、「大坂夏の陣」「大坂冬の陣」などの歴史上の出来事、「天守閣」「本丸」「二の丸」「大手門」「石垣」「櫓」「外堀」「内堀」等の用語に慣れることである。日本の城や大阪城の歴史について資料を用いながら勉強したあと、見学時に注目すべき点について皆で話し合った。



学芸員の説明を聞きながら見学する様子（大阪城）



学芸員の先生と一緒に記念撮影（大阪城）

見学の日、学生たちは専門家の話に目を輝かせて聞き入り、熱心に見て回った。1週間後の授業では、何を学んだか話し合った。ほとんどの学生が、以前（何度も）行ったことがあるが、自分だけで行った時に気づかなかったことを多く学んだと述べていた。事後学習の一環として学芸員にお礼の手紙を書かせたが、その中にも大阪城に対する認識が変わったこと、詳しく知ることができたことへの感謝のことばが書かれていた。

(2) 近世・近代の大阪の暮らし

後期には、大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」見学と、予備学習のための授業を行った。「大阪くらしの今昔館」は日本で最初の「住まいの歴史と文化」に関する専門ミュージアムである。1830年代の大坂の町が実物大に再現され、明治から昭和30年代の町や住まいの変化も分かりやすく展示されており、近世の大坂と近代の大阪の町を体験、体感できるように工夫されている。ここでも見学当日は学芸員に説明をお願いし、見学の前に行った授業では、元号としての「天保」、「町家」「路地」「呉服屋」「小間物屋」「しもたや」などの用語を中心に学習した。

すでに行ったことがある学生も若干名いたが、実際に現場へ行き専門家の解説を聞くと、まだ学ぶべきことは数多くあると実感したようだった。江戸時代における季節に合わせた生活の知恵、町家の暮らし、時代を経て変化した町の様子など、忠実に再現された店や路地を歩き、室内に上がってみて初めて分かることが多い。天井が思ったより低いこと、庶民の居住スペースが限られていたこと、町の人が皆助け合って暮らしていたことなど、説明を受けたことがすぐに確認できたため、効果的な学習ができたようだった。後期は事後の授業がなかったが、提出されたレポートを見ると、学生たちがそれぞれの観点から自分の興味に合わせて体験学習を自分のものにしていったことが分かった。



学芸員の説明を聞く様子（大阪くらしの今昔館）



フィールドワークを終えて（大阪くらしの今昔館）

「大阪の文化」全体を通じての感想は以下の通りである。

<前期>

- ・ 課外授業があつて、教室で本ばかり見て勉強するよりわかりやすく興味を持てた。
- ・ 大阪の色々なところが分かってよかった。
- ・ 大阪の特色があるところに行って楽しい授業だった。
- ・ 大阪の文化についてよく分かるようになった。
- ・ 授業で色々な情報を得たが、一番よかったのは見学だと思う。
- ・ 教室だけでなく、現場に行って実物を見ることがとてもいい。
- ・ 話を聞くだけよりわかりやすい。
- ・ 見学で実際の体験ができたのはいい点だと思う。
- ・ 大阪の文化だけでなく、日本の文化も分かるようになってよかった。
- ・ 実際に大阪の文化を体験することができて、印象的でおもしろい授業だった。
- ・ レポートが多かった。
- ・ 時々もらったプリントが多すぎた。

<後期>

- ・ 大阪の文化についていろいろと勉強になった。
- ・ 大阪の文化についてもっと深く理解できたと思う。
- ・ 本に書いてあることを習うだけでなく、研修を通して自分で感じるのは非常によい。
- ・ 事前講義で知識を得ておくとよい。
- ・ 大阪の色々なところに行くことができてよかった。
- ・ フィールドワークが楽しかった。
- ・ 実際の物を見ながら勉強するので、理解しやすいし、授業もおもしろくなった。
- ・ 実地体験は本当にいい勉強の方法だと思う。
- ・ 授業で勉強したテーマに関係ある課題についても、自分で調べられた。
- ・ 学生の意見も取り入れてほしい。
- ・ 教科書があればいいと思う。

まとめしてみると、実地での体験は話を聞くだけよりも分かりやすく、おもしろい勉強方法だということである。事前講義で知識を得ることについては肯定的な評価があったが、オムニバス形式の授業で統一した教科書がないため、教材については満足度が低い。一つ一つのテーマについてミニレポートを書かせたことについても、負担が大きいという声があった。フィールドワークそのものに興味を持つことは喜ばしいが、その前後の学習のあり方についてはまだ改善の余地がありそうである。

4. より効果的な体験学習のために

日研究生にとっては日本での生活そのものが全て貴重な経験であり、大学での授業以外にも自身の卒業研究のために資料を集めたり、クラブ活動に参加することによって日本人学生との交流を深めたりしている。しかし、プログラムとしての授業内容が充実していなければ、日本への留学の意義は薄れてしまう。日本について様々な角度から学ぶために来ている日研究生にとって、「大阪の文化」のようなフィールドワークを交えた形の授業は学習意欲をそそるものであり、このような学習方式を発展させることは今後ますます求められるであろう。ここでは、体験型の授業をより充実させるために何が必要か、改めて考えてみることにする。

まずは、一過性の「体験」に終わらせないということである。例えば、一回限りの茶道や生け花の体験ではなく、そこに至るまでの過程とそのあとの「ふりかえり」の連続性の中で、学習者が自ら学ぶ道筋をつけていかねばならない。そこで重要なことは、学芸員に講義を依頼するなど、「プロ」の手を借りることによって、より専門性を高めることである。そして、専門家との連携を成功させるためには、事前に十分に準備を整え、学習効果を上げなければならない。時には難解となり得る専門家の話についていくためには、事前講義が欠かせず、その内容も整えていく必要がある。

それぞれのテーマごとに学習者がどのように学んだかを確認する課程も、授業の中では大切な要素となる。学生にレポートを書かせる以外に、授業でディスカッションをして発表させる、学んだことをもとに他の人に説明させるなどの様々なやり方で学習者の「気づき」を引き出したい。体験型の学習で大きな課題となる評価の方法も、フィールドワークの前後の作業も含めて考えるべきであり、学外から講師を迎えての特別講義やフィールドワークで学んだことをいかに評価するかは、学習者、教師陣のそれぞれ異なる視点をふまえたものでなければならない。

以上、「大阪の文化」を例として体験学習を盛り込んだ授業について見てきたが、日研究生の授業以外にも応用できる点がある。本学では、全学の留学生を対象とした1～2泊の「日本文化研修旅行」を毎年1回、新入学生を対象とした「日本文化研修」を年に2回、それ以外にも文化研修を2回ほど開催している。これらの研修は授業として単位化されていないが、「大阪の文化」と同じように事前講義を行い、研修終了後にアンケートやレポートを課している。事前に学んでから研修に参加することについては分かりやすいと概ね好評である。しかし、一定の日本語能力がある日研究生と違って、日本語力不足の留学生のためには、日研究生向けの授業で得られた体験学習に関する知見を生かしながら、今後も工夫を加えていく必要があるだろう。

台湾における教育実習の法制と実態

城地 茂

国際センター 国際事業部門

1、緒論

台湾は、日本統治下の教育制度が色濃く残り、それに中国（中華民国）の制度が加わっている。さらに、アメリカの教育制度を取り入れたため、現在の日本との類似点がある反面、相違点も少なくない。台湾の師範教育では、日本統治時代の学校が数多く残っており、似過ぎているという先入観からか、日本では、台湾の教育制度が研究の対象とはなりにくかった¹。

国際化の第一歩は、相互に理解することであるが、アジアの近代化について、教育はいまさら論じる必要もないほど重要である。また、教育制度の充実、19世紀という科学勃興の時代と相まって、科学史の点からも重要である²。そこで、台湾の師範教育の法制と実態を科学史も含めた観点から報告したい。また、今回の報告では、日本学生支援機構の平成23（2011）年度・留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）プログラムにより、平成23年11月22日より30日まで国立台中教育大学を中心に海外教育実習を行った際の報告も含めたい。また、国立台北教育大学より師資培育暨就業輔導中心発行の『国立台北教育大学実習学生教育実習手冊』ほか資料を提供して頂いた。これらの資料も活用したい。

台湾の教育について、数少ない論考として、科学論の観点から、頭脳還流³の論考がある⁴。ここでは、1990年代後半から、還流する人材が急増し、アカデミックポスト難となる構造が分析されている。また、科学史の観点からは、西欧の近代科学技術パラダイムが、日本へ伝播するが、台湾ではさらに伝播したため、段階的であるべき科学パラダイムが台湾ではスキップし、「パラダイム・スキップ」を起こす過程が述べられた論考もある⁵が、科学の発展と教育制度との類似点は少なくない。

なお、台湾では、デジタル化の進捗は国家的に進められ、法律などは、『全国法規資料庫⁶』で閲覧が可能である。日本では、民間の『中野文庫⁷』がこれに匹敵する。本稿では、これらのデジタル化資料を用い、筆者の体験した実態も合わせて報告したい。

¹ 日本での研究では、ほとんどが日本統治時代のしかも日本語教育の研究が多く、戦後の台湾を扱ったものでは、たとえば、山崎直也（2001）「九年国民教育政策の研究—戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」などが数少ない研究である。また、日本統治時代の日本語教育以外の教育の論考には、城地 茂（2003）「台湾における日本統治時代の珠算教育」などがある。

² たとえば、司馬遼太郎（1986-1996）『この国のかたち』文芸春秋では、「18、19世紀の近代国家の設備としての条件は、大学と鉄道と郵便制度だろう。あるいはこれに病院をいれてもいい。」と述べ、大学を中心とした教育制度を近代国家の条件の筆頭に挙げ、交通・通信医学といった科学技術と同類として論じている。

³ 従来、アメリカなどに頭脳流出した人材が、アジアを中心に還流する現象。母国の経済状況が好転し、高待遇で迎えられようになった。

⁴ 城地茂（2001）「台湾の助理教授の法制と実態：アジアの頭脳環流を軸として」。

⁵ 城地茂・劉伯雯（2010）「日台の高速鉄道公共輸送の比較：パラダイムキャッチアップのタイムラグに見る公共性の差異」。

⁶ 『台湾法規データベース』 <http://law.moj.gov.tw/>

⁷ 『中野文庫』 <http://www.geocities.jp/nakanolib/index.html>

2、台湾の教員養成システム

台湾の教員養成教育は、師範大学と教育大学に大別される。高級中学（高等学校）、高級職業学校（実業高等学校）、国民中学（中学校）の教員は師範大学で、国民小学（小学校）教員は教育大学で行うように棲み分けがなされている。

師範大学は3校で、国立台湾師範大学⁸（台北市）、国立彰化師範大学⁹（彰化県彰化市）、国立高雄師範大学¹⁰（高雄市）である。教育大学は、日本統治時代の師範学校（戦争のため1943年が最後の募集）が、師範専科学校（1945年-1987年）を経て、師範学院（1987年-2005年、単科大学）となったものが多い。師範学院時代は、台北市立師範学院（旧台北第一師範学校（1895年¹¹創立）、台北市）、国立台北師範学院（旧台北第二師範学校（1927年¹²創立）、台北市）、国立新竹師範学院（1940年創立、新竹市）、国立台中師範学院（1927年¹³創立、台中市）、国立嘉義師範学院（1957年創立、嘉義市）、国立台南師範学院（1899年¹⁴創立、台南市）、国立屏東師範学院（1940年創立、屏東市）、国立花蓮師範学院（1947年創立、花蓮市）、国立台東師範学院（1948年¹⁵創立、台東市）の9校であった。筆者が初めて台湾で奉職した1995年は、この師範学院の時期で、まだ安定していた。

その後、2000年に国立嘉義師範学院は国立嘉義技術学院（旧嘉義農林学校）と合併し国立嘉義大学として総合大学となった。師範教育（中等教育司）隷下の大学と職業技術教育司隷下の大学が合併し、高等教育司隷下の大学となった例である。大学再編の先駆けとして、筆者が勤務した国立第一科技大学でも話題になった合併であった。

また、2003年には国立台東師範学院が、2004年には国立台南師範学院が師範教育体系から離脱し、それぞれ総合大学である国立台東大学、国立台南大学となった。

2005年には、残る師範学院も教育大学となり、このうち、2008年に国立花蓮教育大学は、国立東華大学と合併し、国立東華大学美崙キャンパスとなったため、2012年1月現在、教育大学は5校である。

こうした激変があったのは、1994年に『師資培育法』（1994年2月7日、華総(一)義字第0694号令公布）が公布され教員養成が一般の大学にも開放されたためである。また、同法施行以前は、師範体系の学生は公費で養成されていたが、同法第11条¹⁶に、「教員養成は自費を基本とし、公費および奨学金（ローン）などの方法で実施する。公費学生は教員不足の分野あるいは僻地教育を志願する学生を原則とする。」とあるように、基本的に自費となったのである。

「師資職前教育課程」を修了したもの¹⁷が、「実習教師資格者」となり、半年の教育実

⁸ 旧制の台北高等学校（1922年創立）の跡地にある。名目的には、旧制台北高等学校とは別の学校だが、図書館や人的影響は大きい。

⁹ 旧制の彰化青年師範学校（1943年創立）であるが、清代の白沙書院（1745年創立）からの伝統を有している。

¹⁰ 1954年創立の高雄女子師範学校が起源である。

¹¹ 1899年に台北師範学校となった。1895年創立の芝山巖学堂、1896年創立の国語学校まで遡ることができる。

¹² 1895年創立の芝山巖学堂、1896年創立の国語学校まで遡ることができる。

¹³ 1899年の彰化師範学校を創立年としている。

¹⁴ 1903年から1918年までは、廃校になっていた。

¹⁵ 1946年に台湾省立台東中学、台湾省立台東女子中学に簡易師範科が設立された。

¹⁶ 原文は「師資培育以自費為主，兼採公費及助學金等方式實施。公費生以就讀師資料科不足之學系或畢業後自願至偏遠或特殊地區學校服務學生為原則。」

¹⁷ 『師資培育法』第7条に規定がある。それによれば、一、師範校院大學部畢業且修畢規定

習を経て¹⁸、「教師資格検定考試¹⁹」に合格してはじめて「教師証書」が取得できる仕組みである。

表 1 教師資格検定試験の科目²⁰

免許種別	科目一	科目二	科目三	科目四
幼稚園	国語（中国語）	教育原理と制度	幼児の発達と指導	幼稚園課程と教学
特別支援教育学校	国語（中国語）	教育原理と制度	特別支援教育生徒の評価と指導	特別支援教育課程と教学
小学校	国語（中国語）	教育原理と制度	児童発達と指導	小学校課程と教学
中等学校	国語（中国語）	教育原理と制度	青少年の発達と指導	中等学校課程と教学

教育実習に関しては、『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』（教育部 94（2005）年 9 月 7 日台中（二）字第 0940122572 号）に規定がある。

大学の前期に当たる 8 月から翌年 1 月、もしくは後期に当たる 2 月から 7 月に行うが、検定試験が 3 月であるため、前期を選択する大学が多い。教員養成を行う大学では、師資培育センターもしくはそれに相当する全学共同利用センターが行うことが多い。大学の実習指導教員は、最大で 18 名の指導を行うことができる²¹。実習指導教員は、現場に 1 年以上以上の経験をもつ教員を優先的に選ぶ規定である²²。また、実習生 6 人につき授業時間 1 時間に換算する規定になっている²³。指導事項は、実習生の指導計画の策定、実習生と大学・受け入れ校の調整、実習校での指導（1 回以上）、実習生の大学での研究会を主催または参与、実習生の作業・報告の評価、教案指導、成績評価、その他の事項を指導する²⁴。

一方、実習受け入れ校では、1 名の指導教師が 1 名の実習生を受け持つ規定である²⁵。

教育學分者。二、大學校院教育院、系、所畢業且修畢規定教育學分者。三、大學校院畢業修滿教育學程者。四、大學校院或經教育部認可之國外大學校院畢業，修滿教育部規定之教育學分者。」となっている。台湾内外で大学や大学院を卒業し、教育コースを履修した者である。

¹⁸ 『師資培育法』第 8 条。

¹⁹ 『高級中等以下学校及幼稚園教師資格検定弁法』（2003 年 7 月 31 日発布、教育部台参字第 0920115095 号令）に規定がある。毎年 1 回、冬休み明けの 3 月に筆記試験方式で行われ、各科目平均 60 点以上が合格である。ただし、2 科目（以上）50 点未満があったり、1 科目でも 0 点があると不合格になる規定である（第 8 条）。

²⁰ 『高級中等以下学校及幼稚園教師資格検定弁法』第 5 条附表より抜粋。

²¹ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』（教育部 94（2005）年 9 月 7 日台中（二）字第 0940122572 号函）第 13 条。なお、『師資培育法施行細則』（2003 年 8 月 1 日公布、教育部台参字第 0920120568A）第 11 条で大学ごとに規定を定めるように規定されているため、国立台北教育大学では、『国立台北教育大学教育実習課程実施弁法』（2003 年 10 月 28 日全国師範校院研訂「教育実習課程実施弁法」会議通過）第 6 条。全国の教員養成系大学の研究会議の共通認識である。

²² 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 11 条。

²³ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 13 条。

²⁴ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 12 条。

²⁵ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 17 条。

受け入れ校の指導教師は、1 コマから 2 コマの授業相当分の勤務とみなされ²⁶、大学から指導教師の任命状もしくは感謝状を受け²⁷、半年以上指導すると褒賞の対象になる²⁸。実習生の実習計画の策定、授業・クラス担任実習の指導、学校事務・研修活動の補助、実習生の心理指導、実習生の作業・報告の評価、授業と総合評価、その他の事項、大学と教育主管機関（教育委員会に相当）の関連活動に参加する規定である²⁹。

実習校では、クラス担任は教室の後方に机が用意されており、教材などを置き、そこで生徒を指導したりもする。実習生もそれに準じて実習を行うしくみになっていた。

実習の評価は、大学側 50%実習校 50%で、60 点以上が合格点である³⁰。実習は少なくとも 1 度は実際に授業を持ちそれが全体の成績の 40%、クラス担任事務が 30%、学校事務が 20%、研習活動 10%の比率で採点することになっているが、ここで不合格になる者はあまりなく、検定試験が関門になっている。この合格率は、2010 年、全国平均で、63.86%であった。2012 年は、国立台北教育大学と国家教育研究院が教育部の委託で実施することになっている。

こうして教師証書を取得した者が、採用試験（甄試）³¹を受験し、教員になるのである。しかし、就職は極めて難しい状況である。これは、台湾が日本以上に少子高齢化が進み、教員の採用が極めて少ないためである。合格率が 1%に達しない場合もあるほど激烈な競争である³²。

今回訪問したのは、国立台中教育大学附属実験国民小学で、その構成は、校長以下、教務主任、學務主任、總務主任、研究主任、輔導主任、幼稚園園長、人事主任、會計主任、教師數 68、行政人員 5、工友 5、護士 1、臨時人員 2 合計 82 名である。これで、小学校 30 クラス、資源クラス（特修クラス） 5 クラス、幼稚園 3 クラスを持っている。

教頭はいないが、この職務に当たるのは、教務主任である。この他の組織は、大学と似ている。大学には、教務処、学生事務処、總務処、研究發展処、人事室、會計室がある事が多いが、それぞれに対応した部局であると言える。しかし、表 2 を見て分かるように、大学教員との待遇差が大きいと、大学教員が校長を兼務するということではなく、校長は、附属学校教員の選挙で選出されるということであった。

²⁶ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 22 条。

²⁷ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 23 条。

²⁸ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 24 条。

²⁹ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 21 条。

³⁰ 『師資培育之大学弁理教育実習作業原則』第 34 条。

³¹ 県レベルで採用試験があるため、複数の試験を受験するため全国を渡り歩く受験生が問題となっている。

³² 2010 年台北市の場合、普通科教師応募 3963 人採用 13 人、採用率 0.328%、英文科教師 837 人採用 11 人、採用率 1.134%、特別支援教育科教師 1095 人採用 24 人、採用率 2.192%、一般体育教師 276 人採用 3 人、採用率 1.087%、水泳教師 180 人採用 3 人、採用率 1.667%、システムエンジニア 237 人採用 10 人、採用率 4.219%、合計 6588 人採用 64 人、採用率 0.971%であった。人口 200 万人を越す大都市で一般教員の採用が 13 名という驚くべき数字である。英語教育、IT 教育や水泳教育には力を入れているが、それにしても 100 倍という競争率になっている。

表2 教育職の給与標準表

官等	等級 (教 育職)	薪 領 ³³ (教 育職)	職 等 ³⁴ (一 般職)	教 授	副 教 授	助 理 教 授	講 師	助教	中等学 校教師	小学幼稚 園教師	試験 ³⁵ 、 教育部 の主な 職	
(特任)		770		年 功 薪 ³⁶								
		740										
		710			年 功 薪							
簡任	1	680	14	本 薪	年 功 薪						次長 ³⁷	
	2	650	13			年 功 薪						
	3	625					年 功 薪			年 功 薪	年 功 薪	司長 ³⁸
	4	600	12		本薪							
	5	575										
	6	550	11									
	7	525										
	8	500	10		本薪							
	9	475										
薦任	10	450	9				本薪	年功薪	本薪	本薪	高等考 試 1 級 博士	
	11	430										
	12	410										

³³ 『教師法』(民国 84 (1995) 年 8 月 9 日總統華總(一)義字第 5890 号令公布、最終修正: 民国 92 (2003) 年 1 月 15 日總統華總一義字第 09200005420 号令) 第 19 条に、教師の「待遇」(給与)には、この「本薪(年功薪を含む)」以外に、職務や学術研究、地域などの「加給」および「獎金」(ボーナス)と規定されている。したがって、同じ等級であっても、教授と副教授・助理教授の学術研究加給は異なり、給与は異なってくる。

³⁴ 職等への換算は、『行政、教育、公営事業人員相互転任採計年資提叙官職等級弁法』(民国 79 (1990) 年 4 月 13 日考試院(七九)考台秘議字第 1022 号令訂定發布、最終修正: 民国 88 (1999) 年 11 月 25 日考試院 88 考台組貳一字第 7357 号令)「行政、教育及公営事業人員相互転任採計年資提叙官職等級対照表」による。但し、これには、6 職等までの規定しかないため、5 職等以下は、「現職公務人員改任官等職等対照表」(『現職公務人員改任弁法』(民国 76 (1987) 年 1 月 14 日考試院(76)考台秘議字第 0136 号令訂定發布、最終改正: 民国 79 (1990) 年 5 月 18 日考試院(79)考台秘議字第 1442 号令) 第 3 条附録)『公立学校教職員叙薪弁法』(1707140013) (行政院 62 (1973) 年 8 月 23 日台(六二)政式字第 26453 号函核定、教育部 62 年 9 月 13 日台(六二)参字第 23401 号令公布実施)によるが、例えば「警察人員」の俸給の領薪は「教育人員」と同じ体系だが、これでは、「警佐」(委任相当)は 4 階に分かれているなど、若干の差異がある。

³⁵ 『公務員任用法』(1733010001) (民国 38 (1949) 年 1 月 1 日總統令公布施行、最終修正: 民国 99 (2010) 年 7 月 28 日總統華總一義字第 09900189121 号令修正公布) 第 13 条。

³⁶ 年功薪とは、実際に支給されるが、待遇的には認められない範囲の給与の事。「助理教授」の場合、給与的には 13 職等 650 まで支給されるが、10 職等待遇という事になる。

³⁷ 日本の次官に相当する。政務次長 1 名、常務次長 2 名があり、いずれも 14 職等である(『教育部組織法』(1203060001) (民国 17 (1928) 年 12 月 8 日制定、最終修正: 民国 101 (2012) 年 2 月 3 日總統華總一義字第 10100022781 号令) 第 19 条)。国立大学学長(「校長」)経験者が次長に就任した例もある。

³⁸ 日本の局長に相当する(『教育部組織法』第 20 条)。「院長」(学部長)経験者が、「司長」に就任することもある。なお、副司長は、9-11 職等である。

	13	390	8								
	14	370									
	15	350									
	16	330	7					本薪			高等考 試 2 級 修士
	17	310									
	18	290									
	19	275	6								高等考 試 3 級 学士
	20	260									
	21	245									
委任	22	230	5								
	23	220									
	24	210									
	25	200	4								
	26	190									
	27	180									
	28	170	3					高校代用 ³⁹			普通 考試
	29	160									
	30	150						中学校代用 ⁴⁰			
	31	140	2								
	32	130									
	33	120						小学校代用 ⁴¹			
	34	110	1								初等考 試 (1 職等)
	35	100									
	36	90									
雇員											

3. まとめ

筆者らが、国立台中教育大学附属実験国民小学を訪問したのは 11 月末であったが、実習生にとって現場に立つ最終日ということであった。8 月から翌年の 1 月までが実習期間⁴²である。

従来は、1 年の教育実習であったが、半年に短縮された。しかし、その代わりとして筆記試験に合格する必要が出てきた。また、旧制度では、徴兵時の給与と同じレベル (8000 元) の給与があったが、新制度では無くなっている。むしろ学費として 4 単位相当程度の実習費を納めなければならなくなっている。

まもなく徴兵制が無くなると言われているが、現行では徴兵もしくは「替代役」(軍隊ではなく、警察なども含めた政府系機関で服務する制度)があり、半年の実習はもちろん、

³⁹ 『公立学校教職員叙薪標準表説明』(教育部 93.12.22 日台参字第 0930171496D 号函修正) 第 12 項に代用教員の給与規定がある。

⁴⁰ 『公立学校教職員叙薪標準表説明』第 12 項。

⁴¹ 『公立学校教職員叙薪標準表説明』第 12 項。

⁴² 『師資培育法施行細則』(2003 年 8 月 1 日公布、教育部台参字第 0920120568A) 第 5 条。2 月から 7 月までの後期も可能である (同第 5 条) が検定試験が 3 月にあるため前期が多い。

検定試験の受験も大変である。これらは、国防部、内政部と役務が異なるが、それぞれ配慮がある。実習に関しては、実習期間中は入営を猶予する規定がある⁴³。

このように台湾の教育実習制度は法制化が進んでいるが、上述のように採用試験が極めて難しく、非常勤になるしかないなどなどになるなど条件はよいとはいえない。しかし、現場の説明では、20 才前半で就職できれば、40 才台で年金受給資格を得られるため希望者がいる、という状態だそうである。儒教の影響で、教員の社会的地位が高いということもあるかもしれない。しかし、競争率が 100 倍以上というのはどう見ても異常であり、何らかの政策が必要であろう。

いずれにせよ、台湾の教育実習制度は、期間的にも日本よりはるかに長く、また標準化もされている。そして、日本から交換留学で海外へ行く際に、本学の場合、教育実習のために卒業延期になる懸念がある。特に、本学では教育実習期間が 1 週間と 3 週間⁴⁴に分離が検討されているので、そうなると 2 年卒業延期になる可能性もある。これが、交換留学に飛び立つ大きな足かせとなっているのも事実である。しかし、交換留学期間中に海外で 1 週間に相当する教育実習が履修可能であれば、問題の多くは解決されることになる。本学が国際化を進める上で、考慮すべき課題であろう。そのときに、台湾への交換留学が教育実習問題の解決に大きく関わってくるはずである。

参考文献

- 山崎 直也 (2001.5) 「九年国民教育政策の研究—戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」『日本台湾学会報』 3:50-69
- 城地 茂 (2001.3) 「台湾の助理教授の法制と実態：アジアの頭脳環流を軸として」『現代台湾研究』 21:149-158.
- 城地 茂 (2003.3) 「台湾における日本統治時代の珠算教育」『台湾応用日語研究』 1:1-24.
- 城地 茂 (2010.3) 「台湾の高等技術教育の法制と実態」『(大阪教育大学) 国際センター年報』 16:14-22.
- 劉 伯雯・城地 茂 (2001.6) 「科技大学における日本語・中国語および英語能力の相関について」『朝陽学報』⁴⁵6:113-128.
- 城地 茂・劉 伯雯 (2010.6) 「日台の高速鉄道公共輸送の比較：パラダイムキャッチアップのタイムラグに見る公共性の差異」、藤田弘夫 (編) 『グローバリゼーションと東アジアにおける公共性の変化』、慶応大学出版会.pp. 143-162 所収。

⁴³ 『応徴役男延期徴集入営事故表』(行政院 96 (2007) 年 4 月 24 日院台防字第 0008291 号令の第 12 類 (「正在政府機關或公營事業機構主辦或委辦為期一年以內之訓練班受訓中者」「政府機關あるいは公營事業機構の主催あるいは委託する 1 年以内の訓練を受けている者」) に該当する。

⁴⁴ 『大学設置基準』(昭和 31 (1956) 年 10 月 22 日文部省令第 28 号、最終改正:平成 22 (2010) 年 6 月 15 日文部科学省令第 15 号) 第 21 条第 2 項の規定によれば、実習 1 単位は 30 時間から 45 時間までの範囲で大学が定める時間となっている。そうすると、4 単位 (『教育職員免許法施行規則』(昭和 29 年 10 月 27 日文部省令第 26 号、最終改正:平成 22 年 3 月 31 日文部科学省令第 9 号) 第 6 条表第 5 欄および同備考第 8 項により高等学校教諭の教育実習は 2 単位 (2 週間程度)、その他の教諭は 4 単位になる) については 120 時間から 180 時間までの範囲になり、最短の 120 時間の場合、1 日 8 時間、週 5 日で 3 週間で可能となる計算になる。

⁴⁵ ISSN 1026-244X. THCI 台湾人文学引用文献資料庫(Taiwan Humanities Citation Index)登録雑誌。

ビデオ通話システム(スカイプ)を利用した留学生の

英語授業参加¹⁾

若 生 正 和

国際センター 国際教育部門

1. はじめに

留学生は慣れない国で苦勞しながら学んでいるという印象があり、また一面では事実でもあるため、国や地方自治体以外にも、様々な民間団体が支援の手をさしのべてくださる。その支援は奨学金などの経済的なものから、種々の交流機会の提供まで、多岐にわたる。

このように、留学生は日本の社会に支えられているという側面がある一方、彼らが日本・地域社会に貢献する場合も少なくない。その分かりやすい一例が、小・中・高校の児童・生徒たちとの交流であろう。大阪教育大学でも地域の学校や附属学校園から留学生派遣の依頼を受けることがある。そして学校からいただくお礼のお手紙や、留学生たちが学校での交流の様子を生き生きと語ってくれたりする様子から、学校への留学生派遣が多くの実を結んでいることを知ることができる。

2011 年 11 月、大阪教育大学附属平野中学校（以下、附属平野中）の富藤賢治教員から、留学生による英語の授業への協力を打診された。その方法は先に記したような学校への派遣ではなく、ビデオ通話(スカイプ)²⁾を介した授業への参加ということであった。

これまでの学校への留学生派遣では、総合的学習の時間などに留学生が自国文化を紹介したり、日本で生活する中で経験した葛藤などを話したりすることで児童・生徒たちに異文化理解・多文化共生について関心を持たせるというものが多かった。今回の依頼では、英語の授業への協力とビデオ通話を介してのコミュニケーションという、2つの点でこれまでの派遣とは異なる点がある。

本稿では附属平野中の授業に留学生が参加した様子を報告するとともに、今回の協力がどのような効果を上げたかについて、授業に参加した中学校の生徒たちへのアンケート調査を元に考察する。本稿での考察では、特に、留学生の授業参加がもたらす効果と、ビデオ通話システムを利用した交流の有効性に焦点を当ててきたい。

2. 先行研究

ビデオ会議・ビデオ通話の言語教育への導入・活用は 2000 年過ぎから、大学などの教育機関による事例報告が増えてくる。尹(2003)は日本語学習者のビデオ会議システムを介したコミュニケーションに、どのような問題が存在し、どのようなコミュニケーションストラ

テジーが用いられるかを考察している。尹(2004)は日本語母語話者と非母語話者との間の 1 対 1 の談話データについて、対面接触とビデオ会議システムを介した遠隔接触を比較しながら、turn-taking に注目しつつ談話分析の方法で分析している。砂岡・Yu(2008)では TV 会議の録画データを元に構築した「アジア・ミス・コミュニケーションコーパス」のデータを用いて談話参加者の中国語によるコミュニケーションスキルの差異を考察し、母語話者と非母語話者の使用文型と語彙頻度の語用面における相違を報告している。砂岡・兪・高(2009)も中国語による国際遠隔会議の録画データを分析し、母語話者と非母語話者のコミュニケーションストラテジーを考察した。また、亀井(2005)ではビデオ会議システムを活用した大阪教育大学教養学科欧米言語文化講座(ドイツ語圏)とエアランゲン・ニュルンベルク大学日本語学科との交流について報告されている。

以上の研究は、専用の機材またはソフトウェアを使用しているが、近年、無料でビデオチャット(通話)が行えるスカイプ等の利用が急速に普及し、パソコンさえあれば、遠方の相手と顔を見ながら容易にコミュニケーションができるようになった。安価にビデオ通話を授業に取り入れるならスカイプの利用は大いに検討の余地がある。

光永他(2011)は徳島大学全学共通教育「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」の一環としてモンゴル人留学生やモンゴルとの交流を行う中で、モンゴルの大学とビデオ通話(スカイプ)を使用してモンゴルで日本語を学ぶ学生と交流する活動について報告している。また、東・加藤(2010)では和歌山とオーストラリアをスカイプで中継しての共同ゼミについて報告している。

以上のように、主に大学におけるビデオ会議・ビデオ通話の授業への活用についてはある程度報告の蓄積がある一方、小学校・中学校・高校における実践報告はなかなか研究論文としては発表されていないようである。おそらく、現場には個々にスカイプを利用した授業を試みている先生方が少なからずいらっしゃると思いが、その成果が研究論文や報告書の形で発表され、議論が重ねられていくことが望まれる。

3. 附属平野中と本学を結んでのスカイプ英語授業

附属平野中学校と留学生の交流授業は 2011 年 11 月 5 日午前 11 時 55 分から午後 12 時 45 分にかけて実施された。対象は同中学校 1 年生である。附属平野中の富藤教諭からは事前に授業の教案をいただいていたので、留学生にも配布し、授業の内容と彼らの役割について説明しておいた。

授業の概要は次の通りである。(1)中学生は数名のグループに分かれ、ロボット製作会社の社員となり、魅力的なロボットを考案する。(2)自らのロボットを売り込むためにプレゼンテーションを準備する。売り込む相手は留学生が扮する外国人社長であり、日本語が分からない社長たちのために英語でプレゼンを行わなくてはならない(実際に協力を依頼した留学生は全員中級以上の日本語を習得している)。(3)授業当日は、中学生は教室でグループ毎にカメラの前に立ち、ロボットの絵やセールスポイントなどを書いたボードを見せなが

ら、画面の向こう(大阪教育大学)にいる外国人社長(留学生)に向けてプレゼンを行う。(4)留学生たちはプレゼンを聞いた後、売り込み先の社長としてロボットについて質問したり、値引きが可能かなどを尋ねた後、ロボットを購入するかどうかマルかバツを書いたカードを示して回答する。

中学生はプレゼンの準備にあたり、原稿の作文例と使用すべき文法項目が指示されたプリントを受け取り、それを参考にしながら準備にあたった。今回使用するよう促された文法項目は助動詞 **can** と進行形(**be doing**)である。

授業に協力した留学生は以下の4名である。この4名は2011年10月から留学を開始した学生たちで、オリエンテーションや授業等で英語母語話者と英語で円滑にコミュニケーションをしているように見受けられた者の中から選んだ。この他に、オーストラリア人交換留学生(女)にも依頼していたが、当日は体調を崩し参加できなかった。

- ・フランス人(交換留学生、女)
- ・タイ人(交換留学生、男)
- ・ドイツ人(交換留学生、男)
- ・ラトビア人(日本語日本文化研修留学生、女)

オーストラリア人学生が欠席したため、結果として今回協力してくれた留学生は全て英語の非母語話者であった。この点に関しては事前に富藤教諭に了承を得て、留学生の人選をする際に無理に英語母語話者を優先せず、非母語話者にも協力を仰いだ。

これは留学生への配慮のためである。大阪教育大学は英語圏から受け入れている留学生はそれほど多くなく、そのほとんどは交換留学生である。交換留学生は10月に渡日する者が多く、10月から11月は日本での生活に適応し、留学生生活を軌道に乗せるために重要な時期である。この時期に、数的に少ない英語母語話者に学業や大学行事以外の活動を依頼するのは難しい場合もある。そのため、今回の交流授業のためには母語話者だけに協力を求めるのではなく、渡日直後から留学生生活を順調に軌道に乗せ、なおかつ英語母語話者と円滑に英語で会話をしていた学生にも協力を要請した。

4. 授業後アンケート：中学校の生徒を対象に

今回、留学生の授業参加の後、附属平野中の富藤教員に依頼して授業を受けた生徒にアンケートを実施した。内容は英語や今回の授業に対する心理的態度や成果などについて自己評価に基づき回答するものである。回答者数は39名であった。以下、結果を表1から表3にまとめる。4.1節以降では、この結果を元に、次の2点について考察を行う。

- (1)留学生との交流は英語力や英語に対する姿勢、感情に影響があるのか
- (2)ビデオ通話を通じた交流は十分に教育的な効果を上げることができるのか

表 1 授業後アンケート結果

No.	質問	選択肢	全体	英語 好き	英語 嫌い
1	あなたの性別を教えてください	a. 女	24	13	11
		b. 男	15	7	8
2	あなたは外国に行ったことがありますか（英語を話す国以外でもいいです）。※注	a. ある	20	13	7
		b. ない	17	6	11
3	あなたは今まで外国人と会ったことがありましたか。	a. 小・中学校の授業で外国の人と会った。	36	18	18
		b. 小・中学校の行事（授業以外）で外国の人と会った。	9	5	4
		c. 学校以外の場所で外国の人と会った。	26	15	11
		d. 外国の人と会ったことがなかった。	0	0	0
4	あなたは今まで外国人と英語でコミュニケーションしたことがありましたか。	a. 小・中学校の授業で外国人の先生と英語で話したことがある。	33	16	17
		b. 小・中学校の行事（授業以外）で外国の人と英語で話したことがある。	2	2	0
		c. 学校以外の場所で外国の人と英語で話したことがある。	17	11	6
		d. 英語で話したことがなかった。	3	2	1
5	あなたは今まで英語が好きでしたか。	a. とても好きだった。	3	3	0
		b. どちらかといえば好きだった。	17	17	0
		c. どちらかと言えば好きではなかった。	12	0	12
		d. 全然好きではなかった。	7	0	7
6	あなたはこのプレゼンテーションが楽しみでしたか。	a. とても楽しみだった。	11	9	2
		b. どちらかといえば楽しみだった。	12	7	5
		c. どちらかといえば楽しみではなかった。	13	4	9
		d. 全然楽しみではなかった。	3	0	3

※注：問 2 は回答しない者が 2 名いた。

表 2 授業後アンケート結果(2)

No.	質問	選択肢	全体	英語 好き	英語 嫌い
7	プレゼンテーションの準備は十分できましたか。	a. 十分できた。	9	7	2
		b. どちらかと言えば十分できたと思う。	11	3	8
		c. どちらかと言えば十分ではなかったと思う。	17	9	8
		d. 準備が全然足りなかった。	2	1	1
8	英語で自分の考えをうまく伝えられましたか。	a. とてもうまく伝えられた。	4	3	1
		b. どちらかと言えばうまく伝えられた。	13	6	7
		c. どちらかと言えばうまく伝えられなかった。	13	8	5
		d. 全然大きく伝えられなかった。	9	3	6
9	留学生（外国人の社長さん）が話す英語はよく理解できましたか。※注	a. とてもよく理解できた。	2	1	1
		b. どちらかと言えば理解できた。	15	11	4
		c. どちらかと言えば理解できなかった。	16	6	10
		d. 全然理解できなかった。	5	2	3
10	英語で話すのは楽しかったですか。	a. とても楽しかった。	11	10	1
		b. どちらかと言えば楽しかった。	15	8	7
		c. どちらかと言えば楽しくなかった。	9	2	7
		d. 全然楽しくなかった。	4	0	4
11	英語で話すのは緊張しましたか。	a. 全然緊張しなかった。	2	2	0
		b. あまり緊張しなかった。	10	6	4
		c. 少し緊張した。	13	5	8
		d. とても緊張した。	14	7	7
12	今回のプレゼンテーション（準備を含む）を通して自分の英語の力が上がったと思いますか。	a. とても上がったと思う。	3	3	0
		b. 少し上がったと思う。	23	12	11
		c. あまり上がらなかったと思う。	10	5	5
		d. 全然上がらなかったと思う。	3	0	3

※注：問 9 に 1 名の回答漏れがあった。

表 3 授業後アンケート結果(3)

No.	質問	選択肢	全体	英語好き	英語嫌い
13	今回のプレゼンテーションがきっかけで、これからはもっと英語でコミュニケーションしたいと思うようになりましたか。	a. とても英語で話してみたくなった。	7	6	1
		b. 少し英語で話してみたくなった。	17	12	5
		c. あまり英語で話したいとは思わない。	12	2	10
		d. 全然英語で話したいとは思わない。	3	0	3
14	今回のプレゼンテーションを通して、以前より英語が好きになりましたか。	a. とても好きになった。	5	5	0
		b. 以前より少し好きになった。	12	8	4
		c. 以前とあまり変わらない。	21	7	14
		d. 以前よりきらいになった。	1	0	1
15	話す相手（留学生）がすぐそばになくて、話しにくいと感じましたか。	a. 全然話しにくくなかった。	15	11	4
		b. あまり話しにくくなかった。	9	4	5
		c. 少し話しにくかった。	14	5	9
		d. とても話しにくかった。	1	0	1
16	留学生の顔はよく見えましたが。	a. よく見えた。	38	20	18
		b. あまりよく見えなかった。	1	0	1
17	留学生の声はよく聞こえましたか。	a. よく聞こえた。	31	18	13
		b. あまりよく聞こえなかった。	8	2	6

4. 1 英語教育への留学生参加の効果

ここでは上に挙げた「(1)留学生との交流は英語力や英語に対する姿勢、感情に影響があるのか」について考察を行うが、その際に、回答した生徒を「英語が好き」か「英語が嫌い」かに分けて対比させてみたい。アンケートの問 5 は「あなたは今まで英語が好きでしたか」である。結果は「a. とても好きだった」3 名、「どちらかといえば好きだった」17 名、「c. どちらかといえば好きではなかった」12 名、「d. 全然好きではなかった」が 7 名である。a, b を合わせて「英語好き」、c, d を合わせて「英語嫌い」とすると、「英語好き」が 20 名、「英語嫌い」が 19 名で、両者の割合はほぼ半分ずつである。以下、「準備段階の姿勢」、「授業中の様子」、「授業後の変化」に分けて、アンケート結果を分析する。

4. 1. 1 準備段階の姿勢

まず、生徒たちの準備段階での姿勢であるが、問 6「あなたはこのプレゼンテーションが楽しみでしたか」に対する回答は、「英語好き」の生徒群では「a. とても楽しみだった」と

「b. どちらかといえば楽しかった」の合計が 16 名であるのに対し、「英語嫌い」のグループは a, b の合計が 7 名と 2 倍以上の差が見られる。一方、「英語嫌い」の「c. どちらかといえば楽しみではなかった」と「d. 全然楽しみではなかった」の合計は 12 名であり（「英語好き」は c が 4 名のみ）、元々英語が好きか嫌いかで留学生との交流に前向きな態度で臨めたかどうかには差が現れている。

ただし、英語が嫌いな生徒たちにもこの活動を楽しみにしていた者がいたことも注目すべきであろう。英語を使う人たちと上手にコミュニケーションしたいというような、対象言語を使用する集団に対する共感・好意に基づく文化的動機付け、あるいは統合的動機付けは長期的・持続的学習意欲につながり、外国語学習者により多くの成果を得させる要因になることはよく知られている(白井 2008)。留学生・外国人への単純な好奇心や、コミュニケーションの持つ純粋な楽しさが英語学習に前向きな態度を生むのかもしれない。

では、実際の準備はどうだったのだろうか。問 7「プレゼンテーションの準備は十分できましたか」に対する回答は、英語好きも英語嫌いも「a. 十分できた」「b. どちらかといえば十分できたと思う」の合計が 10 名ずつである。本アンケートは授業後に実施したため、自らが感じた成果と準備量を対比させての評価かもしれないが、英語の好き嫌いが単純に勉強量に反映されるわけではないことがうかがえる。

4. 1. 2 授業中の様子：心理的側面と達成感

問 12 への回答を見ると、3 分の 2 以上の生徒たちが多かれ少なかれ英語で話すことに緊張を覚えていたのが分かる。しかし一方で、問 11 を見ると、3 分の 2 の学生は多少なりとも今回の授業で、英語で話すことに楽しみを感じていた。英語が好きなグループと嫌いなグループに分けてみると、「英語好き」が 18 名と、ほとんどの生徒が楽しかったと答えているのに対し、「英語嫌い」では「楽しかった」8 名対「楽しくなかった」11 名と、楽しめた生徒の割合は少なくなる。しかし、英語が嫌いな生徒でも、留学生と英語を使って交流する活動には好意的・肯定的な感情を持つ者が少なくないことも分かった。

では、英語によるコミュニケーションの成否を生徒たちはどのように感じていたのだろうか。問 8「英語で自分の考えをうまく伝えられましたか」への全体の回答を見ると、「a. とてもうまく伝えられた」と「b. どちらかと言えばうまく伝えられた」の合計は 17 名、「c. どちらかと言えばうまく伝えられなかった」と「d. 全然うまく伝えられなかった」の合計が 22 名である。「英語好き」では a, b 計 9 名に対し c, d が計 11 名、「英語嫌い」では a, b 計 8 名対 c, d 計 11 名であり、自分の考えを伝えるという面での成否に関しては、好きか嫌いかではほとんど差が無い。

一方、問 9 の「留学生(外国人の社長さん)が話す英語はよく理解できましたか」への回答は、「英語好き」グループと「英語嫌い」グループで若干差異が出る。「a. とてもよく理解できた」「b. どちらかと言えば理解できた」の合計と「c. どちらかと言えば理解できなかった」「全然理解できなかった」の合計を比べると、「英語好き」では a, b 計 12 名対 c, d 計

8名であるのに対し、「英語嫌い」では a, b 計 5 名対 c, d 計 13 名となり、英語嫌いのグループで聞き取りに難しさを覚えた生徒が多かった。

今回の授業では、事前にプレゼンの準備をグループでしており、「話す」という面では原稿を読めば良かった。また、自分たちの話したことへの反応も、最終的にはロボット購入の意思を丸かバツで示されたことにより、自分たちのプレゼンが理解されていたかどうかの確認もしやすかったであろう。このことから英語の好き嫌いにかかわらず、一定数の生徒が意思伝達に成功したと自己評価したのではないだろうか。

一方、リスニングに関しては、留学生がどのような質問をするか完全には予測できない。この、予測不可能なことが、英語が嫌いな生徒には否定的に作用したのかもしれない。留学生には、事前に中学 1 年生が相手であるからできるだけ簡単な文で話すように伝えていたこともあり、プレゼン後の質問にそれほど難しい構文・語彙は使われなかった。また、映像を通して中学生が理解しているかどうかを確認しやすかったので、生徒が理解できていない時にはより簡単な構文・語彙での言い換えも行われた。従って、英語が好きな生徒は相手の発話を理解しようと積極的に聞いたのに対し、英語が嫌いな生徒は相手の話を理解したいという気持ちを持ちにくく、ただ分からなかったという結果に終わりやすかったのかもしれない。

以上、本節の内容を整理する。授業中の心理面では、多くの生徒が緊張する中、「英語好き」の生徒たちはほとんどが英語で話すことを楽しんでいた。「英語嫌い」の生徒たちは、英語のプレゼンを楽しめなかった者も多かったが、楽しかったと回答した者も 4 割程度おり、留学生を相手に英語を使用することで、英語に肯定的な感情を抱かせる効果がある可能性を見いだせる。ただし、具体的な技能に目を向けると、リスニングに関して「英語嫌い」の生徒の方が理解できなかったとする者の割合が多くなった。

今回の授業では富藤教員が留学生の発言を時折通訳し、生徒たちの理解を助けていた。外国人との出会いやコミュニケーションの楽しさが、英語に否定的な心的態度を持つ生徒にも学習に肯定的な態度を持たせる可能性は先にも記した。特に「英語嫌い」の学生たちがリスニングを苦手とするなら、肯定的態度から生じる文化的・統合的動機付けの効果を弱めないためにも、教師が相手の発言の理解を助けることが必要であろう。

4. 1. 3 生徒の意識の変化

ここでは、留学生が参加した授業の後で、生徒たちの意識に何らかの変化があったのかを見てみたい。まず問 12「今回のプレゼンテーション(準備含む)を通して自分の英語力が上がったと思いますか」である。この質問に対し、全体の 3 分の 2 は「上がった」と回答している。英語が好きか嫌いかに分けてみると、「英語好き」のグループでは 75%にあたる 15 名が「a. とても上がったと思う」または「b. 少し上がったと思う」と回答している。一方、「英語嫌い」の生徒群では、b と回答した者が 11 名である。比率は若干下がるが、「英語嫌い」でも 6 割弱の生徒たちが、留学生に英語で話してみるにより自分の英

語力に良い影響があったことを感じたようである。

問 13「今回のプレゼンテーションがきっかけで、これからもっと英語でコミュニケーションしたいと思うようになりましたか」には、「英語好き」の大半(18名)が「英語で話してみたくなった」答えている。元々英語が好きな生徒たちには、このような活動が英語の学習動機を強化する働きがあることが分かる。

一方、「英語嫌い」の生徒群では「話してみたくなった」のは6名であり(「a. とても英語で話してみたくなった」1名、「b. 少し英語で話してみたくなった」5名)、3分の1程度と比率としては大きく下がる。しかし逆に考えれば、留学生との交流により「英語嫌い」の生徒の3割ほどが英語に対する心的態度を少しでも肯定的・積極的に変えたと言える。

問 14「今回のプレゼンテーションを通して、以前より英語が好きになりましたか」に対しても、「英語嫌い」の4名が「b. 以前より少し好きになった」と答えている。1回の留学生の授業参加で、わずかとは言え英語が嫌いな生徒に英語が好きだと思わせることができたとすれば、楽しさを実感できるように配慮しながら繰り返すことにより、より多くの生徒に肯定的・積極的な気持ちで英語学習に取り組ませることができるようになる可能性がある。

4. 2 ビデオ通話のコミュニケーションへの影響

本節では、本稿のもう一つの視点、「(2)ビデオ通話を通じた交流は十分に教育的な効果を上げることができるのか」について、アンケート結果を元に考察する。すでに4.1節で分析した質問への回答から、多くの生徒たちがスカイプによるビデオ通話を通して、留学生との英語コミュニケーションを楽しみ、そこから肯定的な結果を得ていた事実が浮かび上がっている。では、スカイプを初めとするビデオ通話の特徴がコミュニケーションに何らかの負の影響を与えることはないのだろうか。

問 15では「話す相手(留学生)がすぐそばにいないくて、話しにくいと感じましたか」という質問であるが、「英語好き」の4分の3にあたる15名は「a. 全然話しにくくなかった」「b. あまり話しにくくなかった」と回答している。一方、「英語嫌い」ではa,bの合計が9名であり、残りの9名、つまり半数はプレゼンを行う相手が目の前にいない状況で、何らかの話しにくさを感じていたことになる。

問 16は「留学生の顔はよく見えましたか」という問いである。この質問に対しては、全体の38名が「a. よく見えた」と答えている。今回の授業では表情の気づらさを感じる生徒はほとんどおらず、表情の気づらさが話しにくさの原因ではなかったようだ。

問 17では「留学生の声は良く聞こえましたか」と問うたのに対し、4分の3強の31名は「a. よく聞こえた」と答えているが、「b. あまり良く聞こえなかった」として者も6名いた。授業中、おおむね通信状態は安定していたが、一部の生徒の発表中に通信状態または音声品質が悪化した可能性がある。

今回、大学側の機材はWindows 7のノートブックコンピュータにスカイプをインストールし、USB接続のウェブカメラ(Logitech C270)を設置した。このカメラは120万画素の

画像センサーを搭載し、HD 画質(720p)でのビデオ通話が可能とされている。マイクもこのウェブカメラ内蔵のマイクを使用した。数字上は、ビデオ通話を行うのには十分な画素数であり、結果として中学校側では留学生の姿が鮮明に映し出されたようである。



写真 1 大学から授業に参加する留学生



写真 2 画面に映し出されたプレゼンの様子

また、できる限り留学生の視線がカメラへと向くように、カメラの位置は留学生とスクリーンを結ぶ直線上に置くよう工夫した。ビデオ会議システムやスカイプのビデオ通話では、参加者は視線を合わせるためにカメラを見て話すべきである。しかし往々にして話し相手の映るスクリーンを見つめてしまうため、結果として相手のスクリーンには視線の泳いだ顔が映し出されることになる。これを避けるためにカメラの設置位置は重要である。

今回は附属平野中側でも同様の工夫をされていたようで、視線の不一致はあまり見られなかった。このような工夫は、ビデオ通話を使用した授業を少しでも円滑に行うために欠かせないものである。しかし、それにもかかわらず全体の 4 割ほどの生徒は、留学生が目の前にいないことで話しにくさを感じていた。場を共有していないことに加え、カメラを意識してしまうと話し相手の存在を実感しにくくなることもあるだろう。カメラを前にする緊張については、実践回数を重ねることで生徒に慣れさせることも必要かもしれない。

一方、音声の問題は、機材に問題があったのか、インターネット回線の状態やスカイプの通話品質に問題があったのか、判断が難しい。事前のテストで、2,3メートルの距離であればウェブカメラのマイクでも音声を十分に拾うことを確認してはいたが、複数の人間が同時に話したり、単独での発話でも発声量が十分でなかったりすると、ウェブカメラのマイクでは音が拾えなかったかもしれない。

また、インターネット回線の状態がスカイプの通話品質に影響を及ぼしたことも考えられる。東・加藤(2010)は和歌山大学とオーストラリア・ブリスベン市とをスカイプでつなぎ、共同ゼミを行った際の報告をしているが、映像・音声が非常に鮮明であったと評価している。一方、光永・大橋・佐藤・斎藤(2011)はモンゴルとのスカイプ接続では、モンゴル側のインターネット事情から、映像の画質調整などが必要であると記している。筆者は韓国の

大学とスカイプで結んで授業や留学生の渡日前オリエンテーションを行ったことがあるが、その際は附属平野中との交流授業で使用したのとほぼ同じ機材を使用したのにもかかわらず、映像・音声途切れ途切れになることが多かった。また、音声も先方には聞き取りにくかった模様で、授業の進行に支障が出たこともあった。

もし機材の問題であれば、多人数対多人数でスピード感のあるディスカッションを行いたい場合は高性能の会議用マイクを準備したり、明示的に発言者を交代させて進行できる場合にはスピーチ用のマイクを持たせて話させたりするなど、工夫が必要である。また、高性能のマイクを準備しても音声が聞こえにくい場合は、コンピューターへのマイク音声入力を増幅するマイクロフォンアンプ等を介在させる必要もあるかもしれない。筆者の経験のように、同じ機材を使用しても接続先によって映像・音声に何の支障もなく授業を進行できたり、授業が成り立たないほどに映像・音声が乱れたり、スカイプの利用は安定性に欠けるのが現状である。授業で利用する際は、数日前に事前接続テストは必ず実施すべきであるし、スカイプの利用が全く困難な時の代替教案も準備すべきであろう。

スカイプはすでに広く普及したサービスであり、授業への導入は難しくない。本節ではスカイプ(ビデオ通話)を使用することの問題点をいくつか指摘したが、それを把握した上で授業に活用すれば、本校のアンケート結果が示すように、英語を学ぶ生徒に英語が楽しいものだと思わせ、英語学習に積極的・肯定的な気持ちを持たせることができる。

5. おわりに

英語のコミュニケーションというと、すぐに英米との交流を考えるであろう。しかし、亀井(2005)がドイツとの交流での問題点として指摘するように、時差が大きい国・地域との交流は、いくらインターネット技術が発達しようとも、スケジュールの調整が容易ではない。そこで、日本国内に滞在している留学生に、スカイプなどを介して協力してもらうのは一つの解決策として十分に検討に値する。

日本にいたのであれば、学校まで来てもらいたいという意見もあるだろう。しかし、留学生も学生であり、自らの学業・生活のために多忙である。そのような彼らに、少しでも授業に参加してもらいやすくするために、大学等からのスカイプ等ビデオ通話サービスの利用は有効な手段である。スカイプ特有の不安定さや、場を共有しないコミュニケーションがもたらす話しにくさは確かに存在する。しかし、それよりも外国語によるコミュニケーションの楽しさを実感できる機会を増やす一つの選択肢として活用し、留学生との交流を行うことは、生徒たちに英語でのコミュニケーションの楽しさを体験させ、英語学習への積極さを生み出すきっかけになるであろう。

謝辞

本学留学生に学生との交流機会を与えてくださり、本稿執筆のためのアンケート調査にもご協力くださった、大阪教育大学附属平野中学校の富藤賢治教諭、そしてアンケートに

回答してくださった同校 1 学年の皆さんに心から謝意を表します。

注

- 1) 本研究は大阪教育大学若手教員等研究助成経費による助成を受けたものである。
- 2) P2P 技術を応用した音声通話ソフト。パソコンや携帯情報端末にソフトウェアをインストールし、インターネットを通じて音声通話やテレビ電話、文字メッセージのやりとりを行なうことができる。スカイプ(Skype)は元々、著名なファイル交換ソフト「KaZaA」の開発者として知られる Niklas Zennstrom 氏と Janus Friis 氏が 2003 年に設立した同名の企業によって開発・公開された。2011 年 10 月に Microsoft 社が買収、同社の一部門となり、現在も同社が開発・公開している(「スカイプ【Skype】」, 『IT 用語辞典 e-Words』)。

参考文献

<印刷物>

- 東悦子・加藤久美(2010)「スカイプ実況中継による和歌山・オーストラリア通信授業の試み」, 『観光学』4, 55-61, 和歌山大学.
- 亀井一(2005)「ビデオ会議システムを利用した授業にむけて」, 『大阪教育大学情報処理センター年報』, 1-4, 大阪教育大学情報処理センター.
- 白井恭弘(2008)『外国語学習の科学ー第二言語習得論とは何か』岩波書店.
- 砂岡和子・Yu Jingsong(2008)「日中ビデオ会議にみる共同学習：アジアン・ミス・コミュニケーションコーパスの開発」, 『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』108(207), 37-41, 電子情報通信学会.
- 砂岡和子・兪敬松・高媛媛「ビデオ会議での NS と NNS の協調的コミュニケーション方略」, 『情報処理学会研究報告. 情報学基礎研究会報告』2009(2), 127-133, 情報処理学会.
- 光永雅子・大橋眞・佐藤高則・斎藤隆仁(2011)「グローバル化時代に即した環境教育プログラム開発を目的とした体験型異文化交流」, 『大学教育研究ジャーナル』8, 91-100, 徳島大学.
- 尹智鉉(2003)「ビデオ会議システムを介したコミュニケーションの特徴：ストラテジー使用による日本語学習者の言語管理」, 『早稲田大学日本語教育研究』2, 245-260, 早稲田大学.
- 尹智鉉(2004)「ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面における言語管理: 「turn-taking」と処理過程をめぐって」, 『世界の日本語教育(日本語教育論集)』14 号, 35-52, 国際交流基金.

<WEB ページ>

- 「Skype【スカイプ】」, 『IT 用語辞典 e-Words』, <http://e-words.jp/w/Skype.html> (2011 年 3 月 2 日閲覧)

貴重な一年

ユヌソヴァ・ナルギス

日本語・日本文化研修留学生
(平成23年度修了 タジキスタン)

私は、タジキスタンという国から2010年10月2日に日本へやってきて、日本で待望の留学生生活を始めました。日本語を初めて勉強した時、先生が見せてくれたビデオで富士山について教わりました。富士山をビデオで見たあのころ私の心は「日本に行くため絶対に頑張る」という目的で前へ進みました。4年間この目的のためにタジキスタンで頑張りましたが、頑張ってもなかなか試験に合格せず実らずじまいでした。ところが神様の慈悲か、ついにタジキスタンから初めての国費留学生になりました。

大使館からの電話口では、大使館員の笑い声、そして「おめでとう合格しましたよ」と聞かされたとき、心臓が止って道へ出て叫んだり、泣いたり、笑ったりしました。ところが、家に着いてから両親の反対に合い心を痛めました。娘が初めて一人で全然知らない国に行くのを心配してくれるのが分かりましたが、このチャンスを4年間待っていた私は、絶対行くと決めて、やっと夢がかなったのですから。それからはその道に向かいました。

留学生生活を終えてタジキスタンに帰ったのは、去年の5月でした。あれから7か月あまり経ちましたが、昨日のような気がします。今も信じられませんが、去年の11月2日、日本の空港に着いた時、運転手の手に大きい文字で“Yunusova Nargis”と書いた紙を見て、夢ではないと思いました。あの日から私の貴重な一年が始まりました。

初めて見た笑顔の運転手、そして国際センターの先生方は優しくしてくれました。タジキスタンは93%が山ですから、初めて日本の大学の方に向かった時、山が見えてきて「また山か」とびっくりしました。そして、10～15分ぐらい歩くのも大変でした。しかし、1年間山登りが楽しく、またこの山を登りたいです。

私の専門は日本語通訳ですが、当初は日本人と話す機会があまりありませんでした。初めは私にとって、異国の留学生と話すことも出来なくて、日本人には怖くてあまり話しかけませんでした。留学生と話す時も、聞くときも分からない言葉が沢山あって、どうやって答えたらいいのか、どうやって言いたい言葉を言うのか、分かりませんでした。そして、授業もかなり難しくて、他の留学生のレベルを見るときも不安でした。しかし、指導教員やチューターのおかげで少しずつ上達することが出来ました。日本語が解らなかったとき辛くて泣いたこともありましたが、長谷川先生や古家ミキさん(チューター)から沢山のことを学び、子供みたいに手を引いて歩かせてくれて、一步一步前に進むことが出来ました。しばらくすると、日本語が理解できるような状況になってきて、食堂で昼食を食べる時や、授業が終わった時にも他の留学生や日本人と会話を交わして、少しずつ日本語を話せるよ

うになりました。そして、留学生も日本人の学生と一緒に授業で勉強することが出来ることになって、自分から話しかけたりして、コミュニケーションが出来て、お互いの思想や習慣などが本当に勉強になりました。暇な時は一緒に遊んだり、買い物をしたりパーティー行ったりして、自分の知識をもっと広げることが出来ました。それから、日本文化の国際交流会や地元のイベントなど、日本文化に関したことを見学することも出来ました。奈良、京都、北海道の文化研修も日本でのいい思い出になり、世界を回った気になりました。私はタジキスタンの学生として初めて、日本語で難しい本を読み、理解出来、レポートも日本語で書きました。見学の後のレポートが大変でしたが、いい勉強になりました。見学の時解らなかった事をグローバル香芝の方々の助けを借りて大変役に立ちました。グローバル香芝の方々は私にものを教える時はとても大変だったと思いますが、私は日本について色々な新しい事を学習して、知識の能力がさらに強くなりました。



そして、私にとって一番大切な人だったことは一緒に住んでいた留学生でタイから来た **Prapapan・Pardeepitak (Ploy)** でした。指導教員やチューターから、彼女も大変お世話になりました。伝えあうのに多分言葉が足りなかったと思いますが、笑う時も、悲しい時も、悔しい時も、泣いた時も、そばにいて、24 時間ではなくて 25 時間私と一緒にいてくれたおかげで、今の私がいます。

最後に、1 年間日本に留学した時、いろんな人が優しくしてくれて、いろいろとお世話になったことを心から感謝しております。タジキスタンという遠い国から来た小さい子に、細かいことでも助けてくれた国際センターの先生たち、指導教員やチューターの教えてくれたこと、グローバル香芝の方々にも大変お世話になりました。日本のおかげでおじいさんやおばあさんも出来、皆さんと一緒に活動したおかげで、私の心の中では貴重な 1 年間でした。ありがとうございました。私はいつも「昨日、日本に留学した。今日終了です。でも絶対頑張るから明日また戻る」ことを心の中に強く思っています。よって日本でまた皆さんに会えるように頑張ります。明日もまたいい出会いを!!!



(長谷川先生と留学生)



(私とミキ古家—(チューター))

日本留学の1年半

Batgerel Batdorj

(教員研修留学生 社会科教育講座)

2010年10月に日本に教員研修留学生として到着しました。日本に来る前、モンゴルで日本の投資を持つ日本式学校で6年間働いたので、日本についての情報、日本人と日本の大学の事業とのかかわりが結構ありました。ということで日本での留学生活はまったく知らない世界ではないと思っていましたが、実際はどうかと少し心配していました。日本の大学ではどういうふうに研修を行うのか？日本語力が足りないので、先生の話がよくわからないとどうしよう。半分の期待と半分の心配で留学生活を始めました。2010年10月から半年、大阪大学で日本語を勉強し、2011年4月から大阪教育大学で教員研修を行いました。大阪教育大学に初めて来たとき大学が山の上にあり、エスカレーターで上るのを見てすごくびっくりしました。大学の授業は主に日本語の授業と日本の教育に関する科目、また日本の歴史文化に関する授業でありました。留学生宿舎に住んでいたので学校まで3分しかかからず、本当に便利でした。もう半年間日本で勉強して、だんだん適応できたので、半分の余裕と半分の自信をもって始まった春学期。心から親切に教えてくれた日本の大学の先生たち。大学の生活では、授業だけでなく、さまざまな活動に参加しました。もっとも印象に残るのは毎年11月に主催された「交際交流フェスティバル」でした。世界のさまざまな国から来日した留学生たちが自国の文化・料理・ゲームなどを日本人に紹介し、よい交流ができたと思います。私の参加したモンゴルの遊牧民のゲルと馬頭琴の紹介は日本人には本当に面白かったと思います。また、大学の文化研修旅行で淡路島と京都に行ったことで、阪神大震災や日本の歴史文化など日本の歴史におけるさまざまなことを理解しました。

この一年半にはもっとも感動したのは日本人の人間関係、礼儀正しくて優しい性格という特徴でした。先生方を始めボランティアのかたがた、または生活上であって過ごしたホストファミリー・市民のかたがたからその人間関係を学んできました。

日本という国は人間関係的・社会的・経済的に強い国だと思いますが、その強い国を作るのは簡単なことではなかったでしょう。モンゴルと比べると資源が少なく・狭い国土で自然災害を抵抗しながら生活するのが日本人です。私の生活に大きな経験になったのは東日本大震災でした。毎年、私の通勤していた「新モンゴル」学校の卒業生たちが日本に来て日本の大学に入試を受け、その後「仙台合宿」という活動をやっています。その受験生たちと会うため、2011年3月9日大阪を出て夜行バスで仙台へ行きました。その生徒たちは主に私の担当した卒業生だったので、私たちの間柄は本当に良いです。3月11日地震が起きたとき、私たちは仙台の動物園で見学していました。地震がほとんど起きないモンゴルの人たちにとってそれは信じられないほど大きな地震でした。合宿を指導しているスーリ先生とみんなで隣の小学校にできた避難所に行って2日間を過ごした。そのとき、日本人について感動したもう一つの事は、どんな苦しいときも整理・秩序、礼儀正しい人間関係を忘れないで一緒に頑張る姿でした。商品がもう売り切れている店の前にきちんと並んで順番を持つ人たち、何度もの余震のときも、あせらないで年上の人と子供に世話す

る若い人たち、自分たちのことは気にせず、外国人の私たちに救援の食べ物を最初にあげようとした自衛隊の方々が今も思い出されます。

大阪で過ごした 1 年半の留学生活は、学習だけでなく、日本人と留学生の友たちを通じて国際交流ができました。それは、人間として意義のある生活する新たな窓を開けた時となりました。賑やかな大阪の留学生活の事をいつでも忘れません。

大教留学生生活—チェンジ&チャレンジ

劉 克 端

大学院教育学研究科 総合基礎科学専攻 数理情報コース
(平成 23 年度修了 中国)

2004 年 3 月に来日し、日本語専門学校 2 年間を通ってから大阪教育大学の情報科学専攻に入学しました。大学卒業後同大学大学院に進学し、今年の 3 月に卒業見込みです。大学の時から今までソフトコンピューティング技術を活用した株式売買意思決定支援システムの構築について研究しております。大阪教育大学での留学生生活を振り返ると、良い思い出が語り尽せません。一言で言えば、大教に入って本当によかったです。なぜなら、大教は母みたいに私の成長を暖かく見守ってくださって、安心して自分のやりたいことがチャレンジすることができるからです。

大学に入学して間もなく専門の授業についていけなかったので、授業を受けたくない気持ちになりました。戸惑ったときに国際センターの先生に相談することしました。自分の話を真面目に聞き、自分の問題点を分析して丁寧にアドバイスしてくれました。例えば、授業についていけない原因を一緒に分析しました。私は今まで先生に言われた通りに勉強してきました。大学の授業は自分を中心にして、学習しなければならないということを教えていただきました。その時から、自分がチェンジしないといけないと考えるようになりました。もちろん、一人でなかなかできませんので、国際センターの先生と通じて学習また生活の面倒を見てくる日本人のチューターを探してくれました。それから、自分の勉強し方を変えて、気持ちを整えて頑張るようになりました。

勉強はうまく行っても、留学生生活が充実しないと長く続かないと思います。大教の留学生生活は文句なく最高です。留学生のためのイベントや日本文化研修旅行などの年間行事が盛り沢山です。日本文化研修旅行の例を挙げて、北は北海道、南は沖縄などの日本全国を回りました。学校ではなかなか触れない日本文化を実感できることは本当にいい経験になりました。それだけではなく、自ら計画するイベントもできます。例えば、大学の寮に住んでいたとき、そばの野菜畑作りしました。自分の手で植えた野菜の生長を見ると、本当に嬉しくてやりがいを感じます。自給自足できないけど、留学生活の中の貴重な経験だと思っています。図 1 は留学生寮に住んでいた時に作った野菜畑です。



図1 留学生寮の横にある野菜畑作り

大学でチャレンジしたいことは誰でもあります。大学での勉強、ゼミ、研究、留学、学生支援、ボランティアなどがあります。私は日本に留学してから、日本の教育についてすごく興味を持つようになりました。イジメや不登校など教育現場の問題は先生の立場になって、どうやって対処、解決すればいいのかを体験しようと考えました。そのために、高等学校教諭一種と専修免許（情報）を取得することをチャレンジしました。教職科目や教育実習などがなかなか大変でしたが、日本の教育現場を自分の目で確かめて、耳で聞いて、肌で感じて、日本の学生達と触れ合って本当に有意義な時間を過ごしました。その中、大阪教育大学附属天王寺高校で行った2週間の教育実習はやっぱり一番良い思い出になりました。先生としての立場や社会人としての責任感などを実感しながら、日本の高校生たちと触れ合った日々は忘れられません。実習生達も助け合って、共に自分のベストを尽くしてきました。図2は教育実習が終えてからのお疲れ会です。



図2 教育実習の記録と疲れ会

このように、大阪教育大学にて、いろいろな経験を積んで、専門的なスキルを身につけてから社会に出ることはとても心が強くなります。もちろん、このような充実的な留学生生活をさせていただいた大阪教育大学の先生や国際センターの職員の方々に感謝の気持ちがいっぱいです。本当にありがとうございました。

大学生活を振り返って

文 有彬

教養学科 自然研究専攻 生命科学コース
(平成 23 年度卒業 韓国)

私は 2007 年 10 月に来日し、大阪の日本語学校を経て、2008 年 4 月に大阪教育大学教養学科の自然研究専攻生命科学コースに入学しました。

最初は、日本の生活や文化に慣れることができるか本当に心配だった部分も色々ありました。また、日本語を標準語で勉強したため、大阪弁に慣れるところまで不安だったり、面白いこともあったりしました。しかし今は留学して自分に本当によかったと思っています。何よりも日本語に自信がついた分、様々な思い出を作れることもでき、そして日本の文化を理解することもできました。ただ授業だけではなく日本の人たちと一緒に過ごすことにより、多様でありながら、大切な思い出をたくさん作ることができて嬉しく思っております。

多くの大学の中で、この大学を選んだ理由は教育大学という特性上での、基礎に基づいた知識を積み上げることができると考えたためでした。それに、大学の生活が終わっていく今、実際にそうすることができたのでとても楽しい 4 年間を送ることができ、とても嬉しく思っています。入学式に参加した日を振り替えてみると、あまり時間が経っていない気もしますが、後 1 ヶ月で卒業するという事を考えると、この大阪教育大学での生活もあっという間の 4 年間だったなと寂しく考えています。

また、大阪教育大学は留学生のための授業も充実で、文化の多様性を教えてもらえる体験も多かったのも、とても良かったです。そして、何よりも先生方々や学生たちとの交流が活発で、大切な思い出をたくさん作ることができました。一緒に勉強したり、飲んだり、旅行に行ったり……。今でもあの頃を思い出したら、胸がいっぱいになってしまいます。

4 年という時間でしたが私には本当に意義深い時間でした。楽しい思い出を作ってくれた人たちは私は忘れることはできないと思います。もちろん国際センターの教員の方々や職員たちが学習や生活などの面倒を見てくださったことは、卒業しても絶対忘れません。いつも先生方は、授業だけではなく将来日本での就職についてもいろいろアドバイスをしてくれたり、悩んだときには、相談室等もあるのでとても安心です。本当にありがとうございました。

今年 4 月からはまた自分の夢に一步踏み出すために大学院の進学を決めました。今後修士課程を修了したら、製薬会社や化粧品会社で開発職を務めたいと考えているので、大学院に入っても自分の将来のためにも勉強を頑張りつつ、友達との関係も大切しながら、留学生活を送りたいと思っています。

日本の生活に慣れてきたといっても、毎日新しい発見があります。そこが留学生活の魅力だろうと私は思います。これからも、留学生活を楽しみながら、毎日を送っていきたいと思います。みなさん、外国での留学が怖いですか。勇気を出して挑戦してみてください。きっとみなさん

も楽しい思い出がたくさん作れると思います。私は今でも日本での4年間の大学の生活を思い出すと幸せな気持ちになります。私のような幸せを感じてみませんか。

大教大 ありがとう！

グ ル レ
格日楽

大学院 学校教育専攻
(平成 23 年度修了 中国)

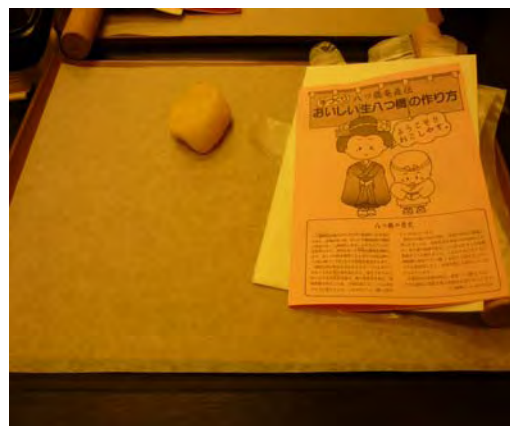
大阪教育大学には、研究生 1 年、大学院生 3 年、合わせて 4 年間お世話になりました。卒業がやってきたと思うと、「ナダソソ」という歌を聴いて、思い出を繰り返す時期になった感じがします。日本で、色々な人にお世話になりました。大阪教育大学では、私の指導教員の米川英樹先生と教育学研究室の皆さん、木立英行先生、国際係、柏原ロータリークラブの方々に大変お世話になりました。学問と人生の道に光を賜って下さった人々に出会いました。心から感謝しております。柏原ロータリークラブの榊原先生、小山先生、小山先生の奥さんに感謝しております。研究生の時は、指導教員の米川先生おかげで、日本の幼稚園、小学校、中学校、高校を訪問することができて、勉強に励む力になりました。大学院の勉強では、学校での勉強以外に学会などに参加させていただきました。



この写真は、東京・早稲田大学の写真と、米川先生と一緒に教育社会学学会に参加したゼミの先輩たちと私の姿です。学会に参加することによって、東京の早稲田大学を訪問し、さまざま、研究者たちの発表を伺うことができました。教育社会学学会では、色々な研究者たちにお会いすることができ、その後の懇親会では、学問の意見交流や、憧れの先生方々、研究者たちとお話できて素敵でした。

大阪教育大学では、勉強以外の色々な活動に参加させていただきました。留学生研修旅行、国際交流フェスティバル、見学などの沢山のイベントがありました。私の留学生活は本当に楽しかったです。

留学生研修旅行では、日本の様々な地域を訪問し、文化や歴史を学びました。大阪から遠くのところというと、北海道のアイヌ民族の文化、沖縄の琉球国の文化を楽しませていただきました。大阪の近くでは、京都、奈良、淡路島、神戸に見学させていただきました。



この写真は、京都の金閣寺と清水寺、嵐山への見学旅行の時の写真です。美味しい八つ橋の歴史や作り方も勉強しました。



この写真は、奈良への見学の写真です。奈良遷都 1300 年祭が開催されている平城京跡を訪問し、奈良時代の歴史を学び、留学生のみんなと仲良くなることができました。



この写真は、神戸の異人館と六甲山牧場への写真です。みんなが笑顔に恵まれた日でありました。多国の異人館を見学し、建物から中の飾りから、異国の風俗を比較して楽しみました。日本の牧場と内モンゴルの牧地区を比べてみることができ、羊の写真いっぱい取りました。



これは、北海道への研修旅行の写真です。北海道の歴史を学び、北海道で羊の肉を食べました。美味しかった、楽しかった。内モンゴルの羊の肉と一緒に味でした。



これは、沖縄研修旅行の写真です。海洋館を見学し、沖縄の昔の踊り、沖縄の海の広さと、日本の海拡大さにも感動しました。



また、学校の学園祭（国際交流フェスティバル）に、モンゴル民族お家、ゲルを建て、モンゴルの茶を作り、自民族の文化をみんなに紹介させていただきました。



この写真は、大阪教育大学国際交流フェスティバルに、国際系の援助と友人たち、後輩たちのおかげで、モンゴル民族のお家、ゲルを建てました。モンゴルのお茶も作りました。大変でしたが、みんなさんが喜んでくれて嬉しかったです。

お世話してくれる方々が沢山いて、大変有難いことでした。大阪教育大学では、親切な方々に出会えることができ本当に良かったです。心より感謝しております。大阪教育大学に入学ことができ、みなさんに出会って、私の留学生活がもっと楽しくなりました。

大阪教育大学での生活は、学びや体験、楽しみで溢れた日々でありました。いい出会いの思い出でした。さよなら、大教大、さよなら、先生方々、さよなら、みなさん。大変お世話になりました、ありがとうございました。私は、明日もいい出会いを目指して頑張ります。最後に、今後も沢山の人が大阪教育大学でいい出会いをみつけ、いい思い出で過ごすことを願います。大阪教育大学の発展と未来を祝福しております。

My Study Life At Osaka Kyoiku University

Name: Claudette Christina Rose Wilson

Profession: Elementary School Teacher (Special School)

Major: Special Needs Education

Associate Professor: Professor Yukio Isaka



Coming to Japan

In 2007 I had visited Japan to attend a Workshop on Social Welfare in Education. I had visited many Special Schools, Institutes & Work places for people with disabilities in Osaka and Tokyo. After the experience I had wished & prayed to return to Japan for further studies. The opportunity arose when the Japanese Government offered a Scholarship for a Teacher Training Program in Japan. I applied and had to sit for an English test and interview. I was of course surprised when they informed me that I was successful.

I arrived in Japan on the 4th of October 2010, and lived at the JASSO International Students Dormitory in Minami Senri in Suita City and attended Osaka University taking Japanese Language Intensive Course for 5 months.

Moving to Osaka Kyoiku University

The first time I visited the School was during the International Festival in November 2010. I was surprised at the fact that I had to travel for 2 hours to get here and the fact that the University was located up on a mountain. It was amazing to the long escalator from the entrance of the University. I finally moved to Kashiwara City on the 25th of March 2011 and was first accommodated at the Guest House here at OKU.



I moved into the International Dormitory on the 1st of April. I felt really content with my room and the facilities at the dorm. The rent was much cheaper and internet was free! That made me happy! And I got to meet and make new friends.



course share our experiences and cultures with each other. There were no problems attending classes because I would just take a few minutes walking to the university. And I could spend a lot of time at the university and not worry about having to travel back home because I lived so close. The International Staff have been very helpful in terms of making my stay at the dorm an enjoyable one! I enjoyed walking up & down the mountain, using the escalator and of course taking a walk or jogging around the campus. And the best part was when I got to see the Wild Boars (いのしし). The campus surrounding was very safe in the day or at night.

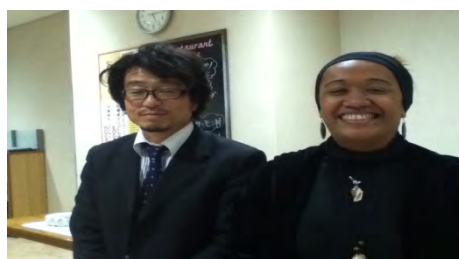
- Japanese Language Class
- Japanese Education System
- Japanese Culture

- Deaf Education
- Hearing Impairment
- Hearing Test
- Individual Educational Program

Classes

I joined Professor Isaka's Seminar Group – Special Needs Education MA1 Course.

I am so grateful to Professor Isaka for facilitating classes and interpreting for me. I was lucky to also have the help of my tutors who were always willing to help me in translations and interpretations. As part of my Special Needs Education Course I was able to visit some Special Schools in Osaka and Kyoto. Through my Course I have been able to learn more about the Japanese Education System and also witness the use of Japanese Sign Language. I had Course mates who were hearing impaired and It was always enjoyable trying to communicate with them. My Professor and some of my hearing course mates were very fluent in Japanese Sign Language. I learnt the very basic and I enjoyed sharing Fiji Sign language with my Course mates.



I really enjoyed the Education Classes because it was conducted in English. I am really grateful to my Japanese Language Teachers for being patient and understanding. They have really made learning the Japanese Language and culture more interesting and fun. I have made a lot of friends through the classes and the assignments and homework have really helped me to improve my Japanese.

University Activities

I am grateful to the Staff of International Center for their kind assistance especially in making sure that we are well informed or are able to participate in most cultural events in and outside of the university. The field trips have been really informative and enjoyable. I have really learnt a lot about the Japanese Culture and History especially visiting Historical Places.



Facilities at OKU

The unique location of OKU has allowed me to appreciate the view and nature more. Facilities here at the OKU have been made accessible and easy to use. The Computers, Photocopiers, Vending Machines & ATM machine and Sports facilities. The provision of these facilities has made learning more enjoyable. During my Course I have had the opportunity to see the various support machines that would help the hearing impaired. Even the lecture rooms were well equipped with much needed teaching aids for the Professors. The library Staff had been of great assistance when I needed their help. The cafeteria served delicious food and the COOP shop was very convenient. It was easy to find my way around the University. And I am grateful to the OKU staff for their kind assistance!

Club

I joined the Karate Club and I would like to thank the Karate Club members for their kind assistance and for allowing me to join them in training. I only participated for a few months because I had to concentrate on my studies and I was also injured during one of the training sessions. I am grateful that I managed to participate and learn a few self defense techniques and keep fit. I have also made new friends. Thank you Karate Club!



Conclusion

I have no regrets and have enjoyed every single day in Japan. I have learnt the Language and witnessed the various Japanese Cultures and Norms and I have learnt to adapt to the Japanese way of life. Punctuality and the proper disposal of rubbish are important things that I would like to share with my friends and families in Fiji. And of course all the various activities I have been able to participate in, the different places I have visited and the many friends I have met. I really enjoyed riding the trains and finding my way around Japan.

I have made a lot of friends, spent time with my Host family and also even had the opportunity

to meet some Fijians living here in Japan. I have visited and spent time with families of Fijians living here who are married to Japanese. They have become my family too. I will definitely recommend to my friends or families who wish to come to Japan to do so and for those who wish to come for studies...to choose Osaka Kyoiku University!! The Professors are Staff are very kind and helpful and accommodating and of course there are a lot of students to meet and make friends. I am glad that I have been able to enjoy Japan especially visiting places in Osaka, Kyoto and Tokyo. My stay in Japan especially my time here in Osaka Kyoiku University has been really an enjoyable and memorable one...and I am glad that I have taken a lot of pictures to share and also treasure for a life time. To the Professors, staff and friends here in OKU and Japan thank you so much for allowing me to be part of your life and for making my life in Japan a memorable one!



ACKNOWLEDGEMENT

I would like to thank the following people for their support and assistance during my term of study here in Japan especially here at Osaka Kyoiku University.

- 1) The Japanese Government – for the provision of the Japanese Government Scholarship
- 2) My Associate Professor – 井坂先生 for his continuous guidance, and tireless support to make my learning process enjoyable and memorable.
- 3) 長谷川先生 for her continuous support and guidance especially through my Japanese language Classes.
- 4) Osaka Kyoiku International Office Staff – for facilitating events that I was able to attend in order to learn more about the Japanese Culture and for making sure that my stay at the Osaka International Students Dormitory was enjoyable.
- 5) Ministry of Education Fiji - for approving my Study leave and for the provision of relevant information about Education in Fiji.
- 6) My Tutors – Mr. Kosuke Iketani & Ms. Aki Moriki for always availing themselves to provide assistance with my studies.
- 7) My MA1 Special Education Course Mates – for their continuous support and assistance during our Seminars. Thank you for your friendship!
- 8) My friends and families in Fiji and the Osaka Fijian Community – thank you for your support and prayers.
- 9) To all my friends here in Japan – thank you for your company & time and for all the fun that we have had together. I will miss you all.
- 10) The Staff of OKU – thank you for your kind assistance! And for making my studies more enjoyable! I will miss OKU!

夢のような一年間

楊 玉 菁

交換留学生

(平成23年度修了 台湾)

日本の留学する前、私はちょっと不安でした。しかし、自分の夢のために、勇気を持って行きました。その一年間は夢のように早く過ぎました。今考えたら、それは幸せな暮らしの時間は速いということです。いろいろ助けてくれた先生と友達がいて、私は本当に幸せでした。従来の不安も無くなりました。代わりに、いっぱい貴重な思い出をもらいました。ですから、助けてくれた皆様に感謝を表したいです。

まず、授業では、日本語と日本文化が一番役に立ちました。日本語の長谷川先生、間先生、村井先生など、先生達のおかげで、私の日本語は良くなって来ました。もっと興味を持っていますから、勉強を続けたいです。城地先生と中山先生には、いろいろな日本の歴史と文化を教えていただきました。日本のことについて、深く理解できたようで、日本のことがもっと好きになりました。先生、一年間教えてくれて、本当にありがとうございました。

私は一番感謝したい先生は、長谷川先生と城地先生です。長谷川先生はいつも学生たちのことを聞いて、応援して、助けてくれます。私も先生にたくさんことを相談して、助けてもらいました。長谷川先生はみんなのお母さんみたいで、太陽のように暖かい感じです。もし、おられなかったら、大変困りますね。私が痴漢に遭った事件、寮のけんか、論文のことで困ったとき、いつも、先生は優しく助けてくれました。永遠に忘れられないです。

城地先生は私の指導教授で、論文のために、先生にいろいろ指導していただきました。本当に勉強になりました。これからも、先生の指導に従って、修論を頑張ります。

次に感謝したい方は、国際センターの先生達です。学校の勉強や寮の生活や文化研修などいろいろな活動を計画して、応援して、助けてくれました。寮の暮らしでは、いつも助けてくれた先生は垣見先生です。自転車の鍵がなくなったとき、水道の蛇口がこわれて、水が出ない、マットが破れたとき・・・いつでも、垣見先生の助けて、留学生活が暮らしやすくなりました。ありがとうございました。

私は大学の寮で暮らしたのに、家族がいますよ。それは日本語支援の山下ママ（山下千恵子さん）、チューターの桃子（岸桃子さん）と香芝ホスト・ファミリーの辻岡さん一家です。皆様は、私を自分の家族のようにお世話してくれました。とても楽しかった時間が過ぎて、本当に感動しました。

山下ママは美術家です。アメリカで住んでいたもので、英語も上手です。留学生皆なの母みたいで、いつも留学生達に情熱的でした。チューターの桃子さんは私の妹みたいで、一番近い存在です。山下ママと桃子さんと私は沢山のことを話しました。美術、旅行、人生、

歴史、勉強、楽しいこと、悩み、頑張ったこと、何でも話せます。二人は、私に日本語を教えてくれて、一緒に遊んで、美味しい物を食べて、空港まで送ってくれて、泣いてくれた人です。私の心の中で、絶対変わらない、ずっと支えてくれる大切な家族です。これからも、よろしくお願いしますね。

最後は、辻岡一家の優しいパパ、綺麗なママとかわいい奈々ちゃん（小学校3年生）とレナちゃん（3才）です。この一年間、よく一緒に遊びました。パパは関西人らしい、すごく面白い方です。辻岡ママと山下ママの料理は、本物の日本のおふくろ味で、大好きです。食べると、幸せを感じます。レナちゃんはとてもかわいいのに、写真には変な顔ばかり写っています。奈々ちゃんは、私と遊ぶことが大好きです。毎回会うたびに、とても幸せでした。パパとママは、3歳のレナちゃんが私のことを忘れないように、毎日私のビデオを見せていたそうです。今年のお正月には、実際に私の顔を見に、二日間に台湾に来ました。本当に私のことを大事にしてくれて、感謝しています。

書いていて、多くの思い出があるのに、すべてを書けませんでした。皆様のおかげで、この一年間は楽しかったです。人生で一番輝く、幸せな部分になりました。私は皆様に感謝の気持ちを伝えたいです。お世話になりました。どうもありがとうございました。皆様が応援してるので、私は台湾で頑張っています。絶対に、また、逢えますから、その日を待っています。

台湾の楊玉菁より

ドイツ留学で得たもの

福井 佑那

(平成 23 年度卒業 教養学科文化研究専攻 欧米言語文化コース)

私は一昨年の 9 月～去年 8 月まで 11 ヶ月間ドイツのエアランゲンニュルンベルク大学に留学していました。慣れない海外生活、そして初めての一人暮らし。今思い返しても初めは不安なことだらけで、トラブルの連続でした。インターネットが繋がらなかったり、保険に問題があったり、店の前にとめた自転車がなくなったりといったことが日常茶飯事でした。

また、語学の面でもかなり苦労しました。日本である程度は学んでいたはずのドイツ語も向こうに行けばさっぱりでした。今まで文法中心の勉強を主にしてきたせいもあってか、ドイツ語が分からない、話せない。ドイツ語上達のためにはパーティに行かなければ、と自分を追い込み、ストレスから血尿になったり、体調を壊したりと、最初の一ヶ月は大変でした。でもそんな時に本当に私の支えになってくれたのが、現地地で出来た日本人、ドイツ人、留学生の友達であったり、日本にいる家族や友達でした。



(10 月末チェコにて)

沢山の人達の支えの中で、二ヶ月後の 11 月頃には私も立ち直り、自分のペースでもう一度頑張ろうと思いました。

そしてドイツに来て初めてドイツ語の本を買い、毎日 30 分辞書を片手に読書しました。ドイツ人の友達にタンデムパートナーになってくれるよう頼み、出来るだけ毎日沢山ドイツ語を話し、聞きました。パーティにも行き、文法を気にせずとにかく話そうとしました。そのおかげか、半

年後にはドイツ語もほとんど理解出来るようになり、毎日が楽しい、とを感じるようになりました。

そして、冬にはホストファミリーに参加しました。－20度という極寒の中、北ドイツの家族の素朴な暮らしは私にとって新しいものでした。その小さな町は日本の私が住んでいる大阪とは全く違い、電車もあまりなく、町の明かりも少ない。そしてコンビニや自動販売機ももちろんなく、映画館などの施設もないような田舎でした。しかしそこには、近所同士のつながり、大自然、家族とのコミュニケーション、道行く知らない人同士が互いに挨拶を交わすような、温かい光景が沢山ありました。ホストファミリーでの経験は、大変興味深い、貴重な経験になりました。



(北ドイツ ホストファミリーと)

私が一年間の海外生活を経て学んだことは沢山あります。時には受動的ではなくて能動的になること。常に頑張っていなくても良い、でも時には頑張ることも必要だということ。そして、かけがえのない家族、友人の大切さです。

留学生活はもちろん辛いことも沢山ありましたが、今では全てが良い思い出です。そして留学でのこの一年間は私を一回りも二回りも成長させてくれました。

私はこれからもこの時の貴重な経験を忘れずに、そして何より沢山の人への感謝の気持ちをいつも忘れずにいたいです。

Good time in the US

Yusuke Nishiyama

Major: Junior high school, Science education

I was in North Carolina, in the US, as an exchange student for a year. I had a lot of valuable experiences which I definitely could not have in Japan. I could make many friends from all over the world, which made me happy and develop a lot. My friends are so different from Japanese, of course, so I could learn wonderful things I did not know.

My roommates were so cool. I stayed in the dormitory with international friends, which had American students also. My first roommate was a freshman and very crazy, which means he always cracked me up. That was my first time meeting an American man so when I met him, I was very nervous. However, his friendly smile and funny stories made me relax. Basically, I think Americans are friendly and good at communicating. I learned what attitude I should take toward people who are from different countries and have different cultures when I meet them for the first time. I owe my good start in the US to him. I really appreciate him. My second roommate had an amazing life style which I could not understand. It was hard to be with him but I did my best to understand his different life style because I do not think that the Japanese life style is the only fundamentally correct one in the world. But, while I was staying with him, there was a turning point at which I felt his eating habits, sleeping schedule, and everything about him was just fun. I learned that I can get along with someone like my roommate after spending a lot of time together, even if I feel like we would not be good friends at first. Definitely, people can reach a turning point at which they can hit it off and be good friends.

I made wonderful trips to everywhere in the US with international students. They are more active and they enjoy going out and hanging out with friends more than Japanese. They were good at planning funny trips so I always went with them. It was the most valuable time ever. Actually, there was a lot of time to talk to friends on the trips because we went everywhere together, slept together, and had dinner together. I could talk about family, culture, youth, dreams and so on. Sometimes, we debated about things by expressing opinions all night. I thought that was the most important way of communicating in an international world because I learned their detailed feelings and how they think about what is happening in the world. Especially, European people think deeply about world problems, as if the problems are their problems and they have to change them. I felt like they have a more positive attitude toward world problems than Japanese.

I think Japan should absorb party culture because it has some advantages. I often went to

lots of parties with international students. Parties can make people outgoing and make them meet new friends so they can exchange a lot of information. Basically, people from party cultures are very funny and always make people laugh. They make others feel comfortable because they warmly welcome their friends. People at parties also hear about problems and tough things that bothered their friends. By hearing that kind of thing, they can help reduce each other's stress. In my opinion, people from, for example, Europe have spent more time being with friends, family, coworkers and people like that. That's why they are naturally friendly and talk easily. Japanese like me should increase the time they spend being and talking with people, which is fundamentally difficult for Japanese because of our culture. Anyway, I spent a lot of time at parties and made many friends, and hung out with them a lot. They were so warm that they helped solve all of my problems. I am confident that I helped them, made them laugh and enjoy themselves. I was happy that they needed me, a little Japanese guy.

It seems like my friends did not have any of the prejudices that almost all of us have, or they just looked like people who have fewer biases than Japanese. Everybody who went to America thought American people are very warm and friendly. In fact, everybody has good points and bad points but truly, they are more open-minded and they have a more positive attitude toward different people from different cultures. My roommates, international friends I met in the US, and Western party culture made me reduce my prejudices, which was the most valuable thing. I really appreciate my friends.

台湾海外研修での貴重な出会いと経験

硯 阿 哉 子

(大学院教育学研究科 音楽教育専攻 音楽科教育学コース)

1. 台湾海外研修に向けて

「ぜひいっしょに台湾に行って授業したり勉強したりしませんか。」

大学院生活にも少し慣れてきた5月、天王寺キャンパスで声をかけてもらったことが台湾海外研修の始まりだった。私は公立小学校の教師である。実際に子どもと関わり、教育を進めてきた現場経験の中で、私自身が教育についてもっと専門的に学び、現場で求められる実践力と指導力を高めなければと思い、仕事を休職して柏原キャンパスの大学院で研鑽を積んでいる。様々な分野の教育を学ぶことが現場で生かせる実践力につながると考え、天王寺キャンパスの大学院の授業もいくつか受講し、英語教育の授業に出ていた矢先のことだった。「まさか海外に行けるチャンスが巡って来るなんて」と嬉しさ半分、「今まで海外旅行も一度しか行ったことがなく、英語も苦手だから大丈夫だろうか」と不安もあった。しかし、台湾の学校で、台湾の教育に直にふれることができ、しかも自分たちが考えた授業を台湾の学校で実践できるのが大きな魅力だった。実際に外国の教育現場で授業をするのは、大学院生である今しかできない貴重な経験である。このチャンスを生かし、新たなことにチャレンジしてみようと台湾に行くことを決意した。

私の台湾研修での目的は、大きく2つ。一つは、台湾の学校現場を目で見て、話を直接聞くなど、他の国の教育にふれ、幅広い視野をもつことによって日本の教育について改めて見つめ直すこと、もう一つは、日本で大切にしている教育活動をふまえた授業を行い、私自身教師としての授業力の向上させることである。



2. 台湾に出発するまでの取り組み

(1) 台湾研修プロジェクトチーム発足！！

私も含め、大学院生と学部生合わせて計11名が参加し、台湾研修プロジェクトを立ち上げた。全体の連絡調整や指示をする渉外チーフと授業を取りまとめる授業チーフの2人をリーダーとして、旅行、会計、記録、台湾事情など、メンバー全員が責任を持って役割を果たし、一からみんなで作っていった。また、どんな授業を行いたいのか意見を出し合い、台湾の学校とも交渉しながら、算数、英語、理科、日本文化の4つの授業チームと内容が決まっていた。5月から11月まで実に約半年間。話し合いを何度も重ねて進めるうち、いつしか仲間としての絆も深まり一体感が生まれていた。

(2) 日本文化授業チームの授業づくり

私は、音楽教育を専門的に学んでいることもあり、海外で授業を行うなら日本の伝統音楽を取り上げたいという強い思いがあった。日本文化のよさを、同じアジアの国、台湾の子どもたちに伝えたい。日本の伝統音楽をベースにして、感じたことや気づいたことを遊びや音楽を通し

て交流しながら、子どもたち自身が日本の伝統音楽を体感できる授業を目指し、日本の代表的な楽器「箏」と昔から生活の中で親しまれている「わらべうた」を教材とした。2人で授業を考える過程は全てが試行錯誤の連続で、一つの授業を練り上げていくことの大切さを改めて実感するとともに、普段使い慣れている日本語ではなく、すべて英語でコミュニケーションすることの難しさ、やりがいも身に滲みて感じた。模擬授業を重ね、実際の日本の小学校でも授業をさせてもらう機会を経て、少しずつ自分たちが前に立って自信をもって授業することができるようになった。特に、台湾からの留学生との交流で、台湾の小学校の様子をきいたり、授業についてのアドバイスをもらえたことはとても参考になった。



3. 台湾で過ごした充実の9日間

(1) 台湾における学校教育の特色

国立台中教育大学附属小学校、台中市立光復国民小学校、私立薇閣小学校の3つの小学校を訪問させてもらった。それぞれ、附属、公立、私立の学校であったが、外国語教育に力を入れている学校や、校外学習など独自のプログラムを推進している学校、台湾の音楽を大切にしながら音楽教育に力を入れている学校など、それぞれの学校独自の特色を生かした取り組みが魅力的だった。日々の授業では、パソコンやカード、実際に子どもたちが操作しながら考えられる具体物などの教材を用いて、子どもたちの意欲を持続させ、考え方が視覚的にわかるような工夫が随所にみられた。目の前の子どもたちに応じた教材を開発し、高い専門性を発揮する教師の力量が伝わってきた。教室は常にパソコンなどの情報機器が使えること、学習の様子がわかる掲示物がきれいに貼られていることなど、整った学習環境づくりが子どもたちの学びを支えている印象をうけた。休み時間には、伝統的な遊び「中国ゴマ」を熱心に取り組み、日本語であいさつする子どもたちと出会った。学校教育の中で自国の文化や歴史を大切にしながら、他の国の文化を尊重した教育を行っていると感じた。



(2) 台湾で行った日本文化の授業実践

私たち日本文化チームは、私立薇閣小学校の6年生で授業実践を行った。お互いに言語の壁があっても、音や遊びを通して子どもたちが関心をもって活動に取り組む姿をみて、日本で大切にしている、子どもたち主体の学び合う授業に手ごたえを感じることができた。ただ、日本の生活の中で親しまれているわらべうたや、日本人の感性に心地よく感じる日本の音階は、台湾の子どもたちにとっては馴染みがなく躊躇している場面がみられ、その国の文化の違いや生活の違いが子どもたちの学びに大きく影響しているのだと感じた。

(3) 台湾の文化に肌でふれて

台北、台中の街並み、熱気のある夜市、台湾の伝統料理、歴史や文化がそのまま感じられる観

光地。台湾の生活は、同じアジアの国で親しみをもてる部分と、台湾ならではの歴史や文化を垣間見ることができた。台湾の人たちは、日本人である私たちに親切に接してくれ、何だかあたたかいほっとした気持ちになった。



4. 台湾海外研修を終えて

(1) 台湾の学校教育を通して見えてきた日本の学校教育

日本に帰ってきて、教育の考え方や見方が変わったように思う。台湾での経験をもとに、もっと視野を広げて教育について考えたいと思うようになり、新たな見方ができるようになった。さまざまな国の教育をみて比較しながら、幅広い視野で日本の教育について考えていく必要があると思う。日本でも、学校教育を行う環境づくりや力量のある教師を育てるための体制づくりに力を注ぎ、教育を充実させるとともに、子どもたちが主体となって自ら考えていける力の育成を目指して、自分たちの文化や伝統を大切にしたい日本の教育独自の特色を追究していかなければならないと強く感じた。そのために、教師は自らの力量を高めるために努力を続けていかなければならない。私は今回の授業実践を経て、短く、わかりやすく、明確に焦点化された言葉の働きかけが重要であると感じた。瞬時に子どもの反応や発言を察知して、ひろげたり、つなげたりしながら臨機応変に対応できる感性と技能を磨くことが課題である。この課題を意識して今後も努力を重ね、現場に復帰して生かし、日本の教育に貢献していきたい。



(2) かけがえのない貴重な出会いと経験

今、台湾研修を終えて感じることは、当日までのプロセスがあったからこそ学びも大きかったということである。この海外教育実習の意義は、常に積極的に学ぶ姿勢を持ち続け、主体的に動き、自分たちでつくりあげていくことである。メンバーの全員が教育について学びたいという共通の目的をもち、個々に強い思いと高い意欲をもって臨んでいたのも、それぞれの心に得るもの



があり充実した貴重な経験になったと思う。また、今回の台湾研修では多くの貴重な出会いがあり、人とのつながりの大切さを改めて実感した。いっしょに参加したメンバーとの出会い、大学の先生方との出会い。一人ではできないことも、みんなに支えてもらったから、最後までやり遂げることができた。台湾での学校の先生や子どもたちとのかけがえのない出会い。

日本から訪問した私たちを、あたたかい歓迎で快く出迎えてくれ、優しく、笑顔で接してくれた。この台湾研修で出会いお世話になったすべての人たちに心から感謝の気持ちでいっぱいである。ここでの貴重な出会いと経験は私の一生の宝物である。多くの人たちと出会い、つながることが、自分の学びをどんどん広げていく。これからも、私自身が人とのつながりを大切に、人に何かを伝えられるステキな人であり続けたい。そして、どんなときでも、自ら人とつながり、前向きに学ぶ意欲を持ち続け、自分を磨いていきたい。自ら働きかけ、働きかけられることで得られる経験の一つ一つが、教師としての自分をも成長させていくのだと信じている。

Big Step in the U.S.

～アメリカ交換留学体験記～

松 江 志 穂 子

(平成 23 年度卒業 教養学科文化研究専攻 欧米言語文化コース)

<交換留学までの決意>

二十歳になれば成人する。振袖を来て成人式に出かける。飲酒や喫煙が出来る。選挙権も与えられる。これは日本人が共有する「成人の儀式とルール」である。大阪教育大学に入学し、5 ヶ月で二十歳を迎えた私にとって「成人」は誠にあっけなくことを終え、綺麗に着飾った幼い自分だけが写真に残った。大学入学前に1年浪人をして周囲より1回り多く年を食っていた私は、誰にも増して不安と焦りを感じていた。これから3年と7ヶ月の月日を学生でありながら大人として過ごす、また逆に3年と7ヶ月後には社会人になるという複雑な気持ちである。このこともあってか、入学当初の私は「大学生の間に何か人として成長できることを」、「何か人と違うことを」、「今までに経験のないような挑戦を」、と大いに意気込んでいた。学科柄（欧米言語文化コース）留学という選択肢がより近かったこともあるが、「交換留学」、つまり現地の大学に直接入ってネイティブ同様の生活を送るという選択は、私の心をストレートに捕えた。そして、チャレンジ精神に溢れていた当時の私は迷わず渡航の決意を固めたのであった。こういった経緯を踏まえると、私にとって交換留学は自分で自分を成長させるための儀式、「自己流成人式」とでも言えるだろうか。もちろん決意から渡航までの期間、TOEFL の勉強は言うまでもなく、受理後も VISA 取得や大学の書類手続き、履修登録や教授とのメールのやりとりなど、「入口」から困難に感じることも多くあった。ただ、そんな時こそ、こんなにもやりがいと達成感のある選択をして本当に良かった、と本来の目的を顧みて自分を励ました。このような思いを胸に、大学生活3年目の夏、22年間暮らし続けた町と家族を離れアメリカへと旅立った。

<ECU について>

2010年8月から2011年5月までの9か月間、アメリカ合衆国ノースカロライナ州のイーストカロライナ大学（East Carolina University / 以下 ECU）にて交換留学をした。ノースカロライナと言えば、映画「君に読む物語」や人類初の動力飛行を遂げた「ライト兄弟」などが有名であり、ECUがあるグリーンビル市は典型的な大学街だったので、周辺の雰囲気や時間はゆっくりと流れていた。ECUは学士、修士、博士課程を併設した総合大学であり、メインキャンパスとヘルキャンパス（メディカルスクールなど医療関係の分校）にて2万8千人程を有する大規模大学である。その前身を教育大学としてスタートさせた本校では教育学部をはじめ、音楽・芸術・科学技術・医学の分野において特に力を入れている。また大規模な予備役将校訓練部隊（Reserve Officers Training Corps / ROTC）のプログラムを設けており毎年多くの軍人を育成している。そのため、陸軍・海軍の制服を着た学生がキャンパスのあちこちで見受けられ、日本の学校環

境しか知らない私にとっては何とも違和感を覚える光景であった。しかし、実際軍隊の学生というのはとても身近な存在で、私も現在進行系で連絡を取り合うほど仲の良い友人を得ることが出来た。その他、気候に関して、本来なら大阪の気候と同じくらい、もしくは少し穏やかで温かいのが特徴であるが、2010年~2011年のECUは異例の天候に見舞われた。大雪で学校が閉鎖されたり、トルネードで避難警告が度々発令されたりなど、自然災害による影響が多くあった。

＜大学での授業＞

「最初はなかなか授業についていけず苦労するが、英語が上達するにつれ徐々に慣れてくる」。このような話を留学経験者からよく耳にするものだ。私も渡航前は多くの人の体験記を読み、漠然と言語レベルが初めの大きな壁になるとインプットされていた。

確かに言語面での障壁は「読む・聞く・話す」といった場面でたくさん経験した。例えば、リーディングでは、毎日とてつもない量の「リーディング課題（本読み）」が出され、図書館にいる時間がほとんどという時期があった。また、リスニングでは、日本の授業で聞いていたような非常に整った英語はどこにもなく、十人十色の独特なアクセントを聞き取るのに苦労したものだ。スピーキングは比較的得意であったが、現地生活でしゃべることだけに集中できる環境はなく、何かしながら同時並行で意見をまとめ発言しなければならず、最初は脳の回転が追いついていなかった。しかし、このような言語面の問題は毎日容量オーバーの英語に身を置いていると、若さゆえ！？自然に入ってくるものである。また、アメリカは大学に入ってから勉強させるという風潮があり、しっかりした予習・復習カリキュラムや学生を動機づけるような教授陣のクリアな授業展開など「授業についていく」という意味ではむしろ日本より吸収しやすい環境があった。

それよりも、私が苦労したことはディスカッションやグループワークでの自己主張である。基本的に授業はその日のトピックに沿って、教授と学生、また学生同士の対話で展開されていくため、自分の意見を述べたり誰かの意見に反論したりと、多くの交流を持つことが期待される。また私の場合、どの授業においても唯一の日本人だったので、誰にも増して意見を求められ注目されることが多くあった。そのため、最初の頃は物理的には授業についていけていても、何となく居心地が悪かったり消化不良な感覚を覚えたりした。教授や学生などの発言はかなり聞き取れるようになったし、授業内容の理解も毎度念入りの予習により自然と入ってくるようになってきた。しかし、共に授業を創っていくクラスの一員として、また日本人留学生として、自分があまりにも自己主張できないことに対するコンプレックスが拭えなかったのである。そうすると、授業といのは非常に難しく、また奥が深くなっていくものだ。国籍は違えど、同年代の学生がどのような視点で物事を考えているのか、またそもそも考えているのかなど、自己成長のためのヒントを得たいと強く思うようになった。思い立った私は、毎日利用する食堂で食べることに議論することが大好きな友達を捕まえて何時間も話し込んだり（後にかなり太ることになるが…）、テキストで分からない所があったらネイティブの友達に質問し、ついでに意見を求めたりした。また、日本人として日本についての認識を深めるため、日本語の授業に参加したり、日本語専攻の学生たちと交流をして、日本人では気付かないような対日文化の視点を考える機会を増やしてみた。

こうした自己啓発活動により、誰かと意見をぶつけ合い何か新しい視点を得ること、日本人と

して当たり前のように日本のことを説明できることがどんなに楽しいか実感できるようになってきた。実際、「漢字」に関しての疑問は非常に多く、「漢字は覚えるだけでも大変そうだし、そんな複雑な文字を使うと子どもが何かを学ぶ過程で障壁になるのでは？」といった率直な意見が聞かれた。何度も聞かれ考える内に「確かに覚えるのは大変だけど、漢字にはそれらを構成する一つ一つの部位に意味があり、一端覚えればアルファベットよりビジュアル的にすごく意味が通る」といった答えを自然と返せるようになっていた。そんな時はおのずと自分がいきいきしているのが分かった。

このような経験を踏まえこれから留学を考えている後輩へ、英語の勉強も大切だが交換留学では英語は手段となることを忘れないで欲しい。語学学校での留学とは違い、言語習得が第一の目的ではないので、伝えたい情報、伝えたい思い、伝えたい日本の姿を持っていなければ英語が上達しても使いどころを持て余すことになる。もちろん、ネイティブの人たちの英語が分かるようになる感覚はかけがえのない経験となるだろうが、それだけに満足せず、ぜひ自己を表現するために英語をしゃべり続けることをやめないで欲しい。

＜授業紹介＞

JICA 奨学金レポートの授業紹介をそのまま引用しようと思っていますが、どれをどのくらい入れるべきか判断がつきませんでした。ページ数の関係もあると思いますので、少しアドバイス頂けると有難いです。

＜国際交流、参加プログラム＞

（１）「World Through Our Eyes（異文化授業のアルバイト）」

ECU の国際係が主に留学生に提供している「World Through Our Eyes / K-12」というプログラムに前期・後期を通して参加していた（有給のアルバイト）。このプログラムは、ECU の学生が現地の K-12（幼稚園最終学年 or 小学校から高校）に派遣され、授業時間の一コマを使って自国の文化や歴史をプレゼンテーションし、グリーンビル市の子どもたちにより国際的な異文化理解力をつけてもらおうというものであった。私は小学校での仕事が多かったため、日本文化を説明する際使用する英単語の選出や 45 分間子どもたちを退屈させない工夫など、気を配らなければならないことが多くあった。しかし、回数を重ねるごとに自然と感覚をつかんでいき、日本のことを存分に発信できる機会として大いに楽しむことができた。

2011 年 3 月に発生した東北大地震の後には「日本について知りたい」「今何が起きているのか」というような関心がこちらの人たちの中でも増大したようで、それに伴い日本の授業のリクエストも急増した。地震を経験したことがない子どもたちにどのように地震の恐さや今回のような津波被害、そして日本が抱える原発問題を伝えようか思考錯誤を繰り返し理解してもらうよう努めた。日本から遠く離れた土地で直接的な支援は出来ないものの、こういう形でも日本に貢献できるならと以前よりも一層熱の入った授業となった。

（２）「Gospel Singers（ゴスペル）」

前期の後半（11 月）からずっと温めていたゴスペルの発表が後期の中ごろ（2 月）にあり、大

学の大きなコンサートホールでゴスペルシンガーとして舞台に立つという経験をした。このイベントは「DCDC カンパニー」というプロダンサーの団体と ECU や教会関係の人で結成したゴスペル聖歌隊とのコラボレーションプロジェクトでかなり大がかりなものであったが、毎週土曜には ECU の声楽専攻の教授の指導のもと練習があり、音楽専攻でもない（合唱経験は 6 年程あり）素人の私でも十分上達できる内容であった。また、ゴスペルということで団員のメンバーのほとんどはアフリカン・アメリカンの人であったが、練習でのおしゃべりやゴスペル系教会の Worship（礼拝サービス）に同行させてもらう等の交流を通して、彼らのチャーミングな温かさと、大らかで情熱的な文化に触れることができた。パフォーマンス後は海外ならではの、本物のスタンディングオベーションを生で体験することができ非常に感動的であった。ECU に留学するチャンスを得たからには何か音楽・アートに関わる大きなことをしたいという強い思いを抱いていたので、このゴスペルを通して一つ大きな夢が叶った。

（３）「ボランティア活動」

1 週間程の春休みを利用して ECU のボランティアグループに参加し、NC 州のカータレット郡という海岸地で環境ボランティアをおこなった。かきの貝殻をいくつにも分けられた島の区域に運び込み海中生物の繁殖を促す手助けをしたり、900 エーカー程の広大な海岸地（Bear Island）に降り立ち、NC 州に生息する鳥を守るための保護地区を設営する活動をした。自身がお世話になった土地に将来的に恩返しができたらと精力的に仕事をした。さらに、ボランティアで訪れた NC 州水族館では、お礼にと水族館の裏側（つまり職員が研究や飼育をおこなっている所）のツアーをしてくれたり、サメの餌やりをやらせてくれたりと自分が貢献した以上のものが返ってきたように思われる。

＜最後に＞

私の両親は戦後間もない時期に生まれ育った世代であり、アメリカに対してあまり良いイメージを持っておらず、その反米意識が私が成長していく過程でもかなりの影響力をもっていた。そのため、渡航前はアメリカでの 9 ヶ月間の留學生活に対して大きな不安を抱えることとなったが、一方でそのようにイメージの中だけで作り上げてきたアメリカという世界をこの目で実際に見て真実を確かめたいという気持ちが強くあった。実際アメリカの大学で日本人がほとんどいない状況で生活してみると、今まで知りえなかった多くの側面が見えてきて、自身にとってポジティブな側面もネガティブな側面も両方合わせて、他のどこの国でもなくアメリカに留学できて本当に良かったと思える境地がおとずれた。

日々様々な民族背景を持った人々との出会いを通して、私自身のアイデンティティや価値観がより豊かなものになったこと。自分の意思決定や興味・関心の実行を「空気を読む」ことなどにとらわれず自由に表現できる環境。また信仰深い多くのクリスチャン（キリスト教徒）の友達との出会いによって人生の意味や人々の見本となるよう生きることなど自己意識の啓発が促進された。アメリカに来て良かったと思うことである。

一方、批判的に周囲を見渡すと、一目瞭然に見て取れる人種差別の現実、他人の利益を考えず

利己主義に走る自由放任性、行き過ぎた宗教活動の実態など安易によしと出来ないものも多くあった。しかし、これらアメリカのポジティブな面とネガティブな面を共に経験することによって、私の中でのアメリカ像は変革をとげさらに探究心を湧かせてくれるものとなった。

最後に、「交換留学」という特別な枠組みの中で留学できたことは私の大学生活の中で大きな財産となった。金銭的な面、サポート体制においても言及すべき利点が多くあるが、それよりも、こんなにも何かを学べる環境があり刺激に満ち溢れた生活が、9 ヶ月という短い期間に凝縮して送ることができるのは交換留学でしか体験できないことであろう。実際アメリカでの私は毎日吸収ポンプのようになって、どんなものからでも何か新しい発見や自分探しのきっかけになるようなものを見つけてやろうと意気込んでいた。また、そのような心意気のおかげで、もう二度と出来ないような経験をたくさん得ることができた。そして、異国の地でより表出化しやすい「本来の自分」と向き合うことで、日本では何気なく見過ごしていた一瞬一瞬を成功・失敗に関わらずかけがえのない財産として大切にするようにもなった。こうしたモチベーションの変化は決して留学中においてだけ価値を有するものではないので、帰国後日本でスタートさせた新生活においても十分に有効活用し今後も大きな成長を遂げていきたい。

「攻め」の姿勢を「守る」

金 谷 佳 明

(平成 23 年度卒業 教養学科文化研究専攻 欧米言語文化コース)

僕は 2010 年 6 月から 2011 年 5 月までの間、University of North Carolina at Wilmington へ交換留学生として派遣されました。最初の 1 ヶ月間はサマースクール期間で、ESL Program の生徒として UNCW に滞在しました。8 月から 5 月までは交換留学生として現地の正規学生と同じ授業を履修しました。ここでは、僕が留学するにあたってこれだけは絶対に「ぶれ」ずに 1 年間過ごそうと決めていた事を基に、これから留学をする後輩たちにとってアドバイスになるような事が書ければ良いと思います。

僕が留学の芯としていたのは、「経験」です。これは、アメリカで「経験」できる事はすべてやって帰って来ようという意味です。今まで交換留学生として派遣されてこられたたくさんの先輩方が必ず口にする言葉があります。それは「後悔」です。「後悔」といっても様々ありますが、話に出てくるのは「すれば良かった」もしくは「しなければ良かった」の 2 種類の後悔でした。僕は、「すれば良かった」という後悔だけは絶対にしたくないと考えていましたし、どちらにせよ後悔はするのだから「しなければ良かった」の後悔で帰って来ようと思いました。また、この漠然とした事だけを持って留学へ行った訳ではありませんでした。学業面、生活面、運動面の 3 側面で具体的な目標も立てていました。学業面では、「戦争」と「教育」の 2 分野においてそれぞれ、アメリカ国内での太平洋戦争の位置付け、アメリカの教育現場における ICT 機器活用の実態に関する授業を取るということ。生活面では、アメリカの大学生のキャンパスライフを体験するという事。運動面では、大学の陸上部に入り、競技をすること。これらのことは明確な目標として持って行きました。

これらの目標は、留学中に必ずといってあるだろうカルチャーショックや言葉の壁等々の問題をいくつもいくつも経験しながら達成することができました。しかし、僕がここで伝えたい事は、どうゆう問題があり、しんどくて、それでも頑張っ、その結果達成できましたという経験談ではありません。僕が留学中に気付いた一番大きな事を紹介したいと思います。それは、「攻め」の姿勢を「守る」ようになるという事です。こうなってしまうと、本来の「攻め」の姿勢とは意味が大きく違ってきます。僕の場合、たくさんの事を「経験」しようと「攻め」の姿勢でいこうと考えていました。例えば、授業後には必ず教授に質問をしに行ったり、毎週パーティーに参加したりというような事が、僕にとっては「攻め」の姿勢でした。しかしながら、「毎日、毎週、毎回する」ことが無理に無理を重ねる事で、「毎日、毎週、毎回しなければならぬ」に変化してしまうのです。この状態が、「攻め」の姿勢を「守る」状態でした。本当に授業中に分からない事がある訳ではない時でも、分かっている部分を分からないといって質問しに行ったり、行きたくないと思っ、パーティーに毎週出で行ったりというように、「攻め」

の姿勢でいる事が最大の目標になってしまうようになりました。さらに、これを「守る」ために無理を重ねた結果、崩れ落ちるようにすべての事に対して「守り」の姿勢を「守る」ようになってしまいました。なぜ無理して意味の無い事をしているんだろう？したくないことを無理にする必要があるんだろうか？等々、どんどん自分で引きこもってしまいました。質問があるのに教授の所へ全く行かなくなる。パーティーに散々誘われても返事すらしない。寝たふり、忙しいふりをする。ここで初めて、本当の意味で自分が「攻め」の姿勢でいたかったのではなく、「攻め」の姿勢を「守って」いただけだったんだと気付きました。これに気付いた後からは、驚くほど留学生活が充実し、楽しくなっていました。

この経験から、僕が伝えたい事は、「無理」をしないで欲しいということではなく、その逆です。これから留学に行く人には、現地でできるだけ多くの「無理」をして欲しいと強く思います。実際僕も無理をしなければ、この事には気付く事ができなかったからです。始めから自分はそういうタイプじゃないと少しの「無理」すらしなかったら、日本で1年を過ごしていても同じだったでしょう。こういう意味で身を粉にする思いで「無理」をして欲しいと思います。僕の留学生活は、99%がしんどい事でした。しかしながら、そのしんどい事がなければ、決して残りの1%が一生忘れられない程楽しいと感じる事も無かったでしょう。日本にいる友達には、「楽しんでるね」と言われ続けていました。当時は、もちろん楽しい時しか写真なんて撮らないに決まっているのでそう思うんだ。分かってないなと感じていました。しかし、帰国後に振り返ってみると、友達に言われていたように、1%の楽しさがすべてだったように感じます。

最後に、簡単にまとめたいと思います。これから留学へ行く人には、「ぶれ」ない信念と明確な目標を持って行き、「無理」をできるだけして欲しいと伝えたいです。その結果、「攻め」の姿勢を「守る」ようになり、「守り」の姿勢を「守る」ようになってしまったとしても、それに気づくことができれば必ず自分の「攻め」の姿勢を発見し、留学が充実するはずです。今の僕にとって、今から留学へ行ける人たちが羨ましくて仕方ありません。彼らにはこれからたくさん経験できる可能性に満ち溢れています。自分の想像を遥かに超えるたくさんのものや人との出会い、達成感や挫折感など様々な事が待っています。自分の事ではないのに、彼らの可能性を考えるとワクワクします。是非それぞれが「経験」し感じた事を帰国後に共有して欲しいと思います。

平成 23 年度 国際教育部門 活動報告

1. 日本語・日本事情教育

平成 23 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。
平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生したことにより、研究留学生 1 名、交換留学生 9 名が帰国したため、前期は初中級レベルの 3 つの日本語科目が開講されなかった。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井卷子
	日本語作文Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	若生正和
2回生	日本語演習Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	中山あおい

教養基礎科目・専門科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	東アジア言語文化論	2（前）	水・Ⅰ	若生正和
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・Ⅲ	城地茂
3回生	日本語教育	2（後）	木・Ⅳ	長谷川ユリ

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	日本語中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井卷子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
	日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	若生正和
	日本文化史	2×2（前・後）	金・Ⅲ	城地茂
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ	間晶子
初中級	日本語初中級会話aⅡ	2（後）	月・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語初中級会話bⅡ	2（後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語漢字Ⅱ	2（後）	金・Ⅱ	若生正和
	大阪の文化	2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
	日本の教養	2（前）	火・Ⅳ	大阪教育大教員
	日本の文化と教育	2（後）	火・Ⅳ	大阪教育大教員
	日本文化研究	2（前・後）	集中	指導教員

教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
教研生用日本語 日本の教育	月・Ⅱ、火・Ⅱ、火・Ⅲ 水・Ⅱ（前）	長谷川ユリ、間晶子、井ノ口智佳、 中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	36
研究生、大学院生	3
教研生	2
日研生	2
交換留学生	14
計	57

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	37
研究生	3
教研生	2
日研生	7
交換留学生	32
計	81

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	37
韓国	10
台湾	4
アジア・中央アジア	5
オセアニア	1
計	57

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	39
韓国	13
台湾	8
アジア・中央アジア	10
欧・米・オセアニア	11
計	81

2. 修了レポート発表会

平成 23 年度の「修了レポート発表会」は 8 月 2 日と 2 月 3 日に開催され、教員研修留学生、日本語日本文化研修留学生、交換留学生が勉学、研究の成果を発表した。指導教員をはじめ、日本語科目の担当教員、チューター等の日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2011/8/2	日研生	2
	13:00～16:45	交換留学生	12
後期	2012/2/3	教研生	2
	14:00～16:00	交換留学生	5

3. 英語による授業

英語による授業は、交換留学生及び教員研修留学生を主な対象者として、日本の社会や文化、言語、教育等に関して、様々な分野の教員が英語で授業を行うオムニバス形式の授業である。前期は「Arts and Sciences in Japan (日本の教養)」、後期は「Japanese Culture and Education (日本の文化と教育)」という科目名であるが、3月11日の東日本大震災の直後帰国した学生がいたために、前期は不開講であった。後期の受講者は10名(交換留学生6名、教員研修留学生2名)であった。また、講義のテーマに関心のある留学生や日本人学生が参加することもあり、日本人学生との交流も行われた。

日付	後期担当者及び講義タイトル
10月4日	中山 あおい (国際センター) オリエンテーション
10月11日	馬 暁華 (欧米言語文化講座) United States and East Asia in a Global Era
10月18日	富田 福代 (教職教育研究開発センター) Initial Teacher Education System and Teachers in Japan
10月25日	谷口 一美 (欧米言語文化講座) How Communication works
11月8日	米川 英樹 (学校教育講座) Teacher Education in Japan
11月15日	横井 邦彦 (自然研究講座) An Introduction to Analytical Chemistry
11月22日	中山 あおい (国際センター) Intercultural Education in Japan
11月29日	Bruce Malcolm (英語教育講座) Spirituality in Japan
12月6日	小松 孝至 (実践学校教育講座) A psychological Inquiry into 'Gitai-go' in the Japanese Language
12月20日	入口 豊 (保健体育教育講座) Japanese and Sports
1月10日	発表
1月17日	発表

4. 交換留学（受入と派遣）

受入	中国	6	32 名
	韓国	7	
	台湾	7	
	タイ	3	
	アメリカ	4	
	フランス	3	
	ドイツ	1	
	オーストラリア	1	
派遣	アメリカ	4	10 名
	フランス	2	
	ドイツ	2	
	フィンランド	2	

交換留学生の受入れは、平成 22 年度の 24 名から平成 23 年度の 32 名と、大幅に増えている。これは、学生交流協定を締結している協定校が過去 5 年間に約 1.5 倍の 11 カ国・地域の 25 機関に増加したこと、母国に比べて生活費が格段に高い日本へ私費でも留学を希望する学生が多くなっていることと関係がある。これに比べて、日本人学生の派遣は、過去 5 年間、毎年 10 名～12 名と変化はあまりない。中国、韓国、タイなどアジアの国々への留学は以前から少ないが、今年度はアジア諸国への留学が皆無という残念な結果となった。学生がアジア各国にも目を向けるような方策を考える必要がある。

国際センターでは、日本人学生が留学する機会を増やすため、様々な取り組みを行っている。5 月 18 日に交換留学説明会を行ったほか、教養学科欧米言語文化講座との共催により、11 月 16 日に TOEFL 説明会も行った。国際センター教員によるオフィスアワーでは、交換留学に興味を持つ日本人学生に個別にアドバイスをを行っているが、平成 23 年度の交換留学に関する相談件数は 77 件と、平成 22 年度の 53 件に比べ約 1.5 倍に増加し、留学希望者が増えていることが明らかになった（「9. オフィスアワーの相談件数」を参照）。しかし、留学したいと思っても経済的な事情や教育実習とのかね合いなどから断念する学生も多く、今後もきめ細かい指導が求められる。

学内選抜を経て今年度の留学が決まった日本人学生のためには、2 月 14 日と 7 月 27 日にオリエンテーションを実施し、留学までの流れ、提出書類や申請手続き、海外での安全のための注意事項、海外留学保険や在留届などについて詳しく説明した。また、渡航先別に個別指導も行った。

5. 日研生、教研生の受入

日本語日本文化 研修留学生	タイ	3	7 名
	インドネシア	2	
	キルギス	1	
	ラトビア	1	
教員研修留学生	モンゴル	1	2 名
	フィジー	1	

日本語日本文化研修留学生（日研生）7 名のうち、大使館推薦が 6 名、大学推薦が 1 名である。日研生のためのプログラムを充実させるために、今年度から新規科目「大阪の文化」を開講した。この科目は、学外見学や学外から招いた講師による講演を含むオムニバス形式の授業を行い、大阪の地域性を生かしながら日本について学ぶという内容である。

教員研修留学生（教研生）は、学校見学や修了レポートの作成に取り組みつつ、現職教員としての知見や経験を生かし、地域における異文化学習講座の講師も担当してもらった。また、今年度初めての試みとして、日本人学生の団体である「留学生支援組織」が 12 月 7 日に異文化学習ワークショップを開催し、教研生 2 名が講師となり、母国の教育や文化について説明した。

6. 語学研修・文化研修

大阪教育大学では、平成 23 年度にアメリカ、オーストラリア、タイ、韓国、台湾、フィンランドで語学研修・文化研修を実施し、合計 59 名が参加した。語学研修・文化研修の参加者数は年によって変動が激しいが、今年度は過去 5 年間の中で最も人数が多かった。ここでは、国際センターが中心となって企画・実施しているアメリカとオーストラリアの語学研修について報告する。

(1) アメリカ語学研修

研修先	プログラム内容	研修期間	参加者数
University of North Carolina Wilmington	語学研修・小学校観察実習	2011/8/22～2011/9/23	12 名

アメリカ語学研修の最大の特徴は、現地で行う小学校での観察実習である。今年度も、約 3 週間半の語学研修のあと、UNCW 教育学部の Dr. Walker のご尽力により、4 人ずつのグループに分かれ、Forest Hills Global Elementary School, College Park Elementary

School, Winter Park Elementary School の 3 校で 3 日間の観察実習を行った。最終日には、子どもたちに折り紙や祭りなどの日本文化を紹介する時間をいただくことができた。UNCW の海外研修で大阪に来たことがある元大学院生が教員となり、本学の学生の実習担当をしてくださるなど、2 大学間の交流実績に支えられた研修であることを実感した。



小学校での実習の様子



修了式にて

(2) オーストラリア語学研修

研修先	プログラム内容	研修期間	参加者数
Griffith University	語学研修・ホームステイ	2012/2/7～2012/3/18	19 名

5 週間の語学研修の間、学生たちはホームステイしながら現地で生活する。大学へのバスでの通学、ホストファミリーとのコミュニケーションなど、日本でのオリエンテーションでいくら説明していても、始めは慣れずにとまどうことも多い。しかし、次第に慣れていき、大いに成長することに意義がある。今年度からは、グリフィス大学の日本語専攻の学生たちとの交流プログラムも始まった。同年代の学生と触れあうことにより、海外研修が充実することは間違いないだろう。



到着後の研修にて



ホストファミリーと

7. 海外教育研修の受入・協力

国際教育部門では、海外の協定校が実施している海外教育研修に対する協力を行っている。平成 23 年度は、アメリカの UNCW の研修への協力と、韓国ソウル教育大学の「グローバルインターンシップ」プログラムの受入れを行った。

(1) UNCW海外教育研修プログラム

アメリカの協定校である University of North Carolina Wilmington (UNCW)は、教育専攻の学部生・大学院生を対象とした海外教育研修プログラムを実施している。このプログラムの目的は、約 2 週間の日本滞在中、広島、京都、奈良、金沢等を訪問し、日本文化について見聞を広めるとともに、大阪や奈良での学校訪問を通じて日本の教育について学ぶことである。参加者の中には現職教員も数多く含まれ、それ以外の学生は、卒業後ほとんどが小・中・高の教員となる。

平成 23 年度は、6 月 20 日から 23 日までの 4 日間、研修グループの学校訪問、観察実習に際し、スケジュールの調整、通訳や案内をセンター教員や本学教職員、交換留学・語学研修経験者等が担当した。参加学生数、訪問先等は以下の通りである。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数(引率教員)
UNCW(アメリカ)	International Studies Program	2011/6/20～2011/6/23	4 名（1 名）

日程	訪問先	参加者数(引率教員)
6 月 20 日（月）	大阪教育大学附属幼稚園、小・中・高	4 名（1 名）
6 月 21 日（火）	奈良県三郷町立三郷北小学校	2 名（1 名）
	大阪市立花乃井中学校	2 名
6 月 22 日（水）	門真市立上野口小学校	2 名
	大阪市立花乃井中学校	2 名（1 名）
6 月 23 日（木）	奈良県三郷町立三郷北小学校	2 名（1 名）
	大阪市立花乃井中学校	2 名



(3) ソウル教育大学グローバルインターンシップ

本年度は、昨年に続きソウル教育大学から「グローバルインターンシップ」の実習生を10名受け入れた。本プログラムは、日本学生支援機構の留学生交流支援制度に採択され、研修参加者には奨学金が支給されている。今年度は全部で4週間のプログラムで、前半の2週間は大阪教育大学で講義を聴講し、日本人学生とも交流した。また、学外見学も2回実施し、日本社会や文化に対する理解を深めた。後半の2週間は、3グループに分かれて東大阪市内の小学校に通い、子どもたちと触れあいながら、韓国文化の紹介などの実習授業も体験した。最終日には、大阪教育大学で修了式を行った。日本語が専門ではないにも関わらず、日本の小学校で2週間もの長期間にわたって研修を行うことができる彼らの底力には感心させられる。

派遣元大学（国）	プログラム名	研修期間	参加者数
ソウル教育大学校 （韓国）	グローバルインターンシップ	2012/1/16～2012/2/12	10名

日程	研修の内容	参加者数
2012/1/16 ～2012/1/27	大阪教育大学の授業、学外見学など	10名
2012/1/30 ～2012/2/9	東大阪市立荒川小学校	3名
	東大阪市立太平寺小学校	4名
	東大阪市立長瀬北小学校	3名



法隆寺にて



東大阪市立荒川小学校にて

8. 国際センターシンポジウム

平成 23 年 12 月 21 日に第 2 回国際センターシンポジウム「留学で広がる可能性～大阪教育大学から世界へ飛び立つ～」が 4 部構成で開催された。午前中のセミナーⅠ「留学の意義、セミナーⅡ「留学のもたらすもの」では、国際センター教員や在学生の留学体験談を交えながら、留学がどのように仕事に結びつくのか、カルチャーショックの先に得られるものなどが具体的に話し合われた。

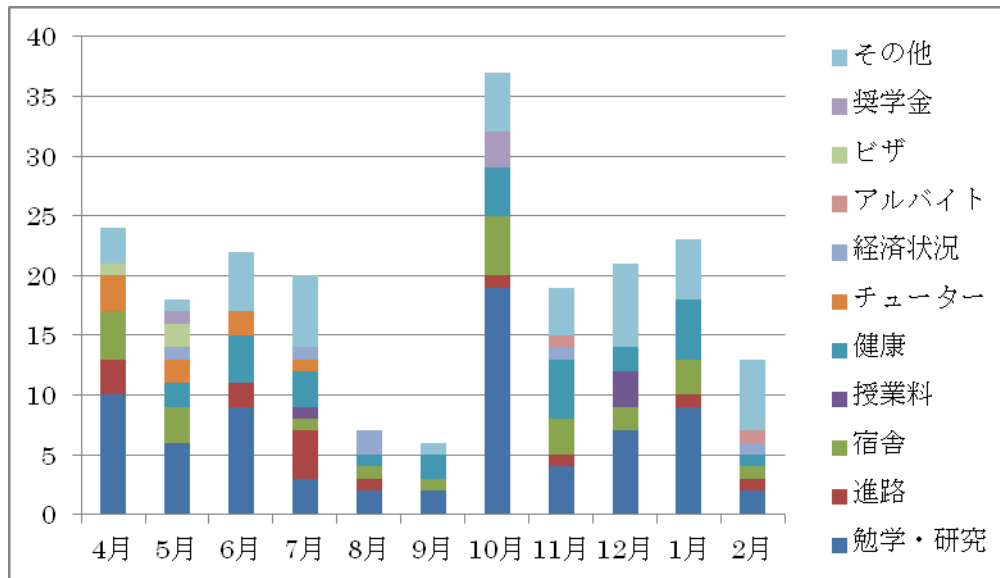
午後のシンポジウムⅠ「留学や海外実習プログラムの教育的成果」では、本学の協定校 University of North Carolina Wilmington の Dr. Brad Walker、広島大学大学院の朝倉淳教授に、それぞれの大学で実施している海外研修プログラムについて、研修に参加した学生が国際的な視野を身につけ、成長を遂げていく様子を具体的にお話し頂いた。さらに、学卒業生でアメリカの大学でアカデミックカウンセラーとして働いた経験がある潮崎泰子氏が自身の留学体験やアメリカの大学の学生に対するサポートシステムについて紹介した。

シンポジウムⅡ「グローバル時代に求められる社会人基礎力とは」においては、パナソニックのコーポレートコミュニケーション本部社会文化グループの小川理子氏をお招きし、次世代の育成事業や学校への出前授業などの社会貢献の取り組みについてお話し頂いた。また、本学の卒業生、東條さおり氏（豊中市立第十三中学校）、堀井美里佳氏（名古屋市立舟方小学校）、本学の在学生、杉山雄大さん（教員養成課程総合認識系）が、教育現場での実践や留学・海外実習について発表し、海外での経験が確かな社会人基礎力を培い、さらに教師として次世代の子どもたちの育成に貢献していることが示唆された。

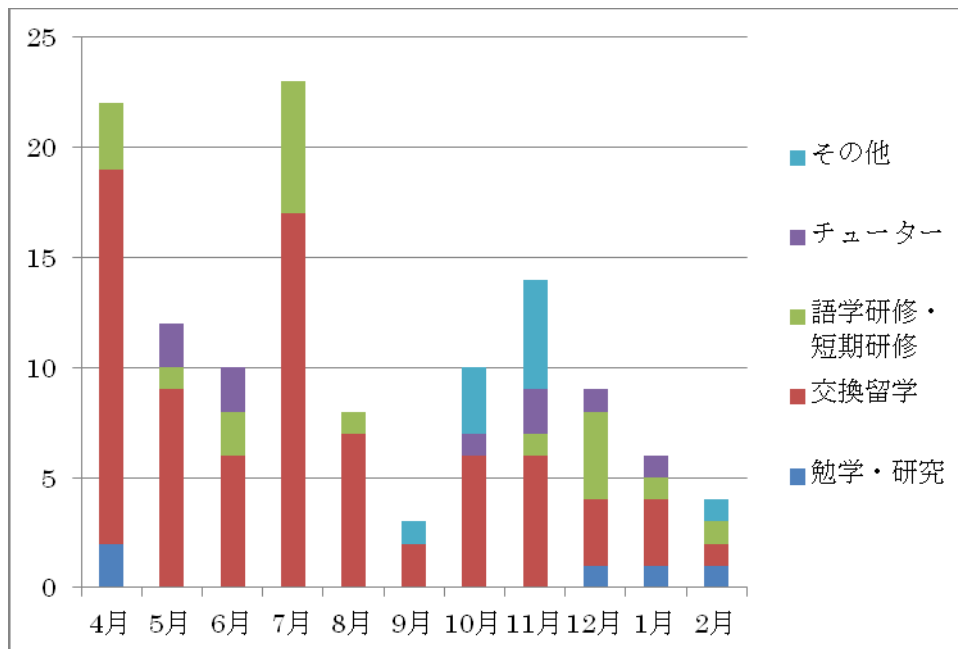


9. オフィスアワー相談件数（平成23年4月～平成24年2月）

(1) 留学生



(2) 日本人学生



平成 23 年度 国際事業部門活動報告

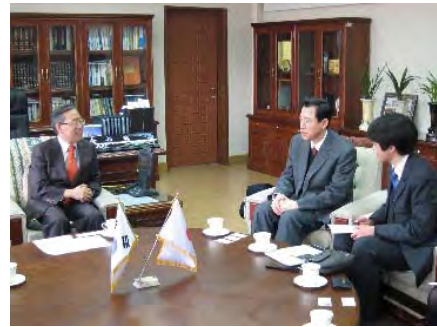
1. 協定校締結

(1) 釜山教育大学校（大韓民国）との交流協定を締結

韓国の釜山教育大学校との間に、「教育及び学術交流に関する協定書」並びに、「学生交流に関する覚書」を締結し、両文書は 6 月 15 日の署名をもって発効した。同校が位置する釜山広域市は韓国第 2 の都市であり、歴史的にも日韓交流の中心地として知られている。東アジア教員養成大学コンソーシアムの主要な参加校でもある釜山教育大学校との交流推進は、隣国の教員養成理解の深化のみならず、本学の学生・教職員の異文化理解の進展にも大きく寄与するものと期待されている。

韓国の教育大学校は、主に初等学校の教員養成を行う高等教育機関として位置づけられており、釜山教育大学校も韓国に 11 校存在する教育大学の一つである。同校は 1946 年、釜山師範学校（初等教員養成）として開校した。1955 年、釜山師範大学が設置され、釜山師範大学と釜山師範学校は 1961 年 4 月に統合され、（新制）釜山師範大学となる。1963 年 3 月には、釜山教育大学に改編、さらに 1993 年 3 月、釜山教育大学は釜山教育大学校となる。1996 年には教育大学院が設置されている。

大学教員数は 74 名で、学生数は学部約 2200 名、教育大学院約 400 名で、学部は倫理・国語・社会・数学・科学・実科・音楽・美術・体育・英語・コンピューターの各教育科と教育学科、幼児教育科の 13 学科の構成となっている。また、教育大学院が設置されており、夜間制で 15 専攻、季節制に 11 専攻と充実している。



釜山教育大学校

(2) インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校との交流協定を締結

インドネシアのインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校 Institut Seni Indonesia (ISI) Yogyakarta と「教育及び学術交流に関する協定」を締結した。調印式は、9月21日に本学の長尾彰夫学長が同校を訪問し行われた。

インドネシアには国立総合芸術大学 ISI の3校の一つで、ジョグジャカルタ校はそのなかで3学部（上演芸術・造形芸術・記録メディア芸術）を有する最大のキャンパスである。独立後間もなく設立された、旧制の美術専門学校、西洋音楽専門学校、舞踊専門学校が統合再編されて、1984年にインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校となったもので、インドネシアの代表的芸術系高等教育機関である。大学院も逐次設立、現在は全学部博士課程が置かれるようになっている。同校には、本学出身の教員もあり、教員数は現在約250名、学生数は学部・大学院を合わせて約3000名となっている。

ジョグジャカルタ特別州は、ジャワ島の古都で、古くから東南アジアの人材と物資が集まり、現在は同国の文化の中心となっている。インドネシアの伝統芸術を守りながらも新たな表現や技法にも積極的に挑戦している同校との交流推進は、東南アジアの文化的伝統への理解を深めるとともに、芸術教育の多面的な可能性を開いていくものと期待される。



インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校

2.国際会議等の参加

(1) 第6回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

(平成23年6月11-12日、ソウル開催)

東アジア教員養成国際シンポジウムは、教員養成分野における諸問題について、国際的な共同研究や共同討論を通じた課題解決をめざし、2006年度から、日・中・韓の三国において実施されてきた。

今年度は、韓国・ソウル教育大学で、本学からは栗林国際担当理事・向井国際センター長・若生正和准教授が参加した。

第6回を迎えた本シンポジウムでは「東アジアの伝統文化と現代教師教育」を主題とし、韓国・中国・日本・台湾・ベトナムの5つの国・地域から約150人の大学関係者が集まり、母国の教員養成の現状や課題について議論し、活発な意見交換が行われた。

次回は、東京学芸大学で開催される予定である。



ソウル教育大学で開かれた第6回東アジア教員養成国際シンポジウム

(2) 東アジア高等教育質保証国際シンポジウムに参加

(平成 23 年 9 月 29 日-30 日、三田共用会議所で開催)

このシンポジウムは文部科学省主催で、中国教育部 (MOE)、韓国教育科学技術部 (MEST)、日本の大学評価・学位授与機構 (NIAD-UE)、中国教育部高等教育評価センター (HEEC)、中国教育部学位・大学院生教育発展センター (CDGDC)、韓国大学教育協議会 (KCUE) の協力のもとで開催された。

まず、基調講演として 2 本、M.R. Kalaya TINGSABADH 氏 (東アジア学術交流会議顧問、Vice President, Chulalongkorn University) による “Student Exchange and Quality Assurance in Thailand and the other ASEAN countries” そして、安西祐一郎氏 (日中韓大学間交流・連携推進会議共同議長、中央教育審議会大学分科会長) によって “A Perspective on Quality Assurance of Higher Education in East Asia-Mobility, Diversity, Ongoing Efforts and Reforms” が行われた後、3 つの分科会が開かれた。分科会 A 「単位相互認定、成績評価を伴う大学間交流プログラムのあり方」、分科会 B 「グローバル人材の育成に向けた大学と産業界の連携教育プログラム」、そして分科会 C 「東アジアにおける質保証枠組みの在り方」である。

分科会 A に参加したが、堀田泰司氏 (広島大学) によるプレゼンテーション「アジア高等教育における『透過性』のある教育システムの重要性：東アジア 13 カ国の単位制度、成績評価基準等の調査結果に基づく一般的傾向と今後の方策について」が特に本学の今後の大学間学生交流、特に、ダブルディグリー制度を検討する上で参考になった。堀田氏は、EU 内ですでに「ボローニャ・プロセス」として実行されている制度を例にとり、アジアでの導入に向けての展望と課題について、整理した上で、明快に提示していたからである。

最後に「議長声明」としてシンポジウムで成された合意が発表された。

(3) 平成 23 年度大学評価フォーラムに参加

グローバル時代における新しい質保証—国際機関の取り組みからみえる「機能」とは—
(平成 23 年 10 月 26 日、東京大学安田講堂で開催)

このフォーラムは大学評価・学位授与機構主催で、加速するグローバル化時代の中で高等教育機関に求められる機能や役割についてあらためてその問題点や課題を整理し、今後の取り組みにつなげようとする議論が行われた。

講演として 3 本、まず川口昭彦氏 (大学評価・学位授与機構特任教授) の「これからの質保証システム—検証結果から垣間みえるもの」、続いてゴヴィンダン・パライル Gouvindan Parayil 氏 (国際連合副学長) の「国際連合大学の質保証」、そして最後にデュルク・バンダム Dirk Van Damme 氏 (OECD 教育局教育研究革新センター所長) による「高等教育における質保証のグローバル化」を傾聴した。

その後、休憩をはさんで河野通方氏 (大学評価・学位授与機構研究開発部評価研究主幹) をモデレーターとして、ゴヴィンダン・パライル氏、デュルク・バンダム氏、そして木村孟氏 (文部科学省顧問) をパネリストとしてパネル・ディスカッションが実施された。

このフォーラムでのポイントは、高等教育機関には、グローバル化の時代に必要な多様な人材を養成する機能が期待されていること、そのためには各機関が自立して個性を競い、「脱スタンダード化」することが求められているということであった。

(4) 第9回国際教育協力日本フォーラムに参加

ー自立的教育開発に向けた国際協力ー

(平成24年2月7日、文部科学省東館3階講堂で開催)

第9回国際教育協力フォーラム（主催：文部科学省、外務省、広島大学、筑波大学）に参加した。今回のフォーラムのキーワードは「教育援助の有効性」であった。

まず、基調講演として、援助する側からビルガー・フレデリクセン氏（元世界銀行アフリカ地域人間開発局長）が「変動する世界情勢における教育援助の有効性再考」を、続いて被援助国を代表してルース・ムバンガ氏（ザンビア教育省教師教育局長）が「教育援助の有効性ー途上国からの視点」が行われた。

基調講演への質疑応答の後、パネルセッションではドロシー・ナンポタ氏（マラウィ大学教育研究訓練センター長）をモデレーターとして、パネリストには3名、萱島信子氏（JICA 人間開発部部長）、山田肖子氏（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）、そしてウィ・ホック・チェア氏（東南アジア教育大臣機構理数科教育センター研究開発部調査官）が登壇した。

フォーラムの要約としては、これまで様々な機関が行ってきた途上国における教育援助のあり方を援助する側、援助される側の双方の視点からレビューを行い、問題点を明確にし、より有効性のある援助へ向けての課題を整理するということである。統計を用いた客観的な資料と実際の経験上の印象の両方が紹介されており、今後の本学の途上国援助のあり方を考える上で貴重な機会となった。

(5) 東アジアの大学における教員養成のプログラム設計と質的保証制度の現状と展望に関する国際共同研究コンファレンスに参加

(平成24年2月14日、ガーデンシティ品川 SHINAGAWA GOOS で開催)

東アジア教員養成大学コンソーシアム参加校による共同研究として、東アジアの大学における教員養成のプログラム設計と質的保証制度の現状と展望に関する国際共同研究が行われており、第7回東アジア教員養成国際シンポジウムの大きな柱と期待されている。

今回のコンファレンスでは、まず、田中喜美教授（東京学芸大学理事・副学長）の「各国・地域における教員養成のプログラム設計と質保証制度の報告」と題する基調報告が行われた。これに沿って、各国・地域の代表が自国の報告を行った。今回の参加は、中国は東北師範大学、北京師範大学、華東師範大学、南京師範大学の4校、韓国からは公州大学の1校、台湾からは国立台湾師範大学の1校、日本からは北海道教育大学、愛知教育大学、大阪教育大学、福岡教育大学とホスト校である東京学芸大学の5校であった。

午後には、3つのグループにメンバーを再配置する調整が行われ、(1)一般教員教育グループでは東京学芸大学の岩田康之准教授が、(2)学校指導者教育グループでは本学の大脇康弘教授が、(3)大学教員教育グループでは東京学芸大学の田中喜美教授が選出された。

また、このプロジェクトでは、若手研究者の国際間交流にも力点が置かれ、大学院生によるポスターセッションも開かれ、活発な議論が行われた。

3.国際教員研修

(1) サブサハラ英語圏の理科研修プログラムを実施

「平成23年度英語圏サブサハラアフリカ理科授業評価改善」事業の一環として JICA（独立行政法人国際協力機構）と本学による共同実施の研修プログラムが、9月8日（木）から9月30日（金）までの日程で実施された。

今回は2年目であり、7ヶ国（エチオピア、ガーナ、ケニア、マラウイ、ナイジェリア、ウガンダ、ザンビア）と規模も拡大し、国家教育機関の専門官、指導官、指導主任だけではなく、教員養成系大学の教員など13人が参加した。

開講式では、長尾彰夫学長が歓迎の挨拶を行い、国際センターの向井康比己センター長が本研修のコースリーダーとして大学案内やスタッフ紹介などを行った。そして、科学教育センターの任田康夫センター長が研修プログラムの概要について説明した。一行は、1ヶ月にわたる研修で、本学教員とのディスカッションや講義を受け、本学附属小中学校を以外にも、大阪府内の公立小学校などに出向き、理科授業を見学し、その場で指導教員らと意見交換、給食体験なども行った。



開講式（本学図書館）



修了式（JICA 大阪）

こうしたプログラムで生徒中心の授業を体得し、後半には、自ら授業案を作り、個別指導を受けて、実際に模擬授業を行い、評価会なども実施し、実りある研修を終えた。引き続き、次年度も継続実施の予定である。



模擬授業の準備



模擬授業の実践

(2) 留学生交流支援プログラム（台湾ショートビジット）を実施

日本学生支援機構の平成 23（2011）年度・留学生交流支援制度（ショーステイ、ショートビジット）プログラムにより、平成 23 年 11 月 22 日より 30 日まで台湾で海外教育実習を行った。

訪問したのは、協定校の附属実験校である国立台中教育大学附属小学校の他、台中市立光復国民小学校、私立薇閣小学校（台北）の 3 つの小学校である。それぞれ、附属、公立、私立の学校であったが、外国語教育に力を入れている学校や、校外学習など独自のプログラムを推進している学校、台湾の音楽を大切にしながら音楽教育に力を入れている学校など、それぞれの学校独自の特色を生かした取り組みが魅力的だった。

これらの学校で、大学院生と学部生合わせて計 11 名は 4 つのグループに分かれて授業実践を行った。英語で授業をするため、相互に言語の壁があっても、音や遊びを通して子どもたちが関心をもって活動に取り組む姿をみて、子どもたち主体の学び合う授業を実践した。



国立台中教育大学附属小学校での授業実践



音楽教育に尽力する台中市立光復国民小学校



校外授業でカタパルト作製（私立薇閣小学校） 高級外車での下校風景（私立薇閣小学校）

4.戦略的重点経費（重点的教育研究創造推進事業）

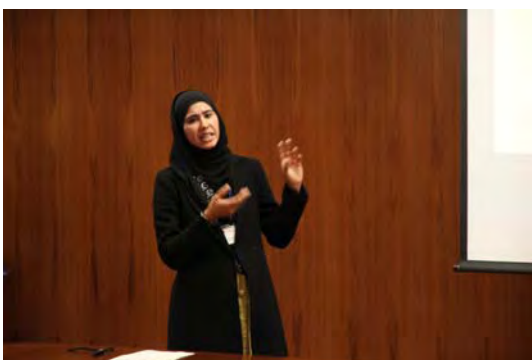
（１）「アフガニスタン教員養成支援事業－教育を通じた国際貢献」

（平成 23 年 11 月 14 日-12 月 10 日）

平成 19、20、22 年度の理科教員短期研修に続いて、平成 23 年 11 月 14 日から 12 月 10 日までの約 4 週間、交流協定大学であるカブール教育大学（アフガニスタン）からファヒマ・イブラヒムキル Fahima Ibrahimkhil 講師を招聘した。今回はじめて特別支援教育分野での研修となり、特別支援教育講座と国際センターが連携し、指導教員の井坂行男教授を中心に、金森祐治教授と山本利和教授の協力のもとで短期研修を行った。

研修プログラムは以下の通りである。

- （１） 個別指導、授業・ゼミ参加：個別指導では、Ibrahimkhil 講師は英語が堪能なので、英語で書かれた専門分野（視覚障がい）の教科書を講読するとともに、井坂研究室のゼミにも積極的に参加した。
- （２） 学校訪問：附属特別支援学校、大阪市立視覚特別支援学校、八尾市立安中小学校ほかを訪問し、授業見学の後、教員、生徒と交流した。
- （３） 研修成果報告会：テーマ「この研修で学んだこと、カブール教育大学でそれをどうフィードバックするのか」というアクション・プラン（英語）の発表を行い、出席していた関連教員やゼミ生たちと活発な質疑応答が展開された。
- （４） その他：日本の社会・文化に親しむためのエクスカーションを週末に行った。



成果発表会での Ibrahimkhil 講師

平成23年度 国際センター行事

公州大学校（韓国）との交流協定を締結

平成23年3月8日（火）

本学は、公州大学校との教育及び学術交流に関する協定書、並びに、学生交流に関する覚書を締結しました。調印式は行わず、3月8日の署名をもって発効しました。

公州大学校のメインキャンパスは、韓国中部の忠清南道公州市に位置し、1948年、2年制の道立公州師範大学として設立されました。1954年に4年制の国立公州師範大学に改編し、1991年には国立公州大学校となりました。その後、周辺の単科大学を統合していき、現在は6学部（師範大学・人文社会科学大学・自然科学大学・工科大学・産業科学大学・衛生保健大学：大学は日本の「学部」に相当）7大学院（一般大学院・教育大学院・教育情報大学院・経営行政大学院・産業科学大学院・特殊教育大学院・映像芸術大学院）から構成される総合大学となっています。学生数は学部計19,084名、大学院計2,721名にのぼり、教員数は522名、職員数269名を数えます。

公州大学校は韓国でも有力な国立総合大学の一つであるとともに、中等教育教員養成機関としても有数の大学です。また東アジア教員養成国際コンソーシアムでも韓国の幹事校となっており、東アジアを中心とした大学交流に非常に積極的な大学であり、学生たちの国際交流に対し高い意識を持っています。

同校が位置する公州市と近隣の扶余には、かつて、日本と深い交流のあった百済の都が置かれていました。武寧王陵や公山城など、百済時代の史跡が残っており、それらを通して韓国の歴史・文化のみならず、当時の日本と朝鮮半島との交流についても理解を深めることができると期待しています。



新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 23 年 4 月 5 日（火）

平成 23 年 9 月 30 日（金）

平成 23 年度前期（4 月），後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを，教養学科棟 1 階の会議室で開催しました。これは，新入生に対して留学生活や大学生生活全般にわたって案内を行うもので，今年の新入生は，右表のとおり 78 名でした。

向井国際センター長の歓迎あいさつにはじまり，日本語の授業や図書館の利用方法，資格外活動，国民健康保険，奨学金に関する事等について説明を行いました。

夕方からは，指導教員や先輩留学生，日本人学生を交えた歓迎会が開催され，新入生の自己紹介，教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気の中新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	16	—
大学院生	15	—
教 研 生	2	—
日 研 生	—	7
研究留学生	—	—
特別聴講学生	2	30
研 究 生	4	6
計	39	39



米国総領事館総務部長を招き，特別講演会「がんばれ日本」を開催

平成 23 年 5 月 24 日（火）

大阪－神戸米国総領事館総務部長のマシュー C. メドーズ氏（Matthew C. Meadows）による特別講演会「がんばれ日本」（国際センター，情報科学講座共催）が 5 月 24 日（火），柏原キャンパスで開かれました。

講演のテーマは，（1）Importance of international education（国際理解教育の重要性）（2）US-Japan economic and security relationships（日米の経済・安全保障関係）（3）US foreign policy in Asia（合衆国のアジア外交政策）。震災と津波による大災害に遭っている日本を応援しようというもので，留学生や外国語専攻の日本人学生など約 80 人が参加しました。

外交官であるマシュー氏は世界各国を周り，日本に赴任して，日本の風景の素晴らしさ，

関西の温かさに感動したと述べました。

講演では、幕末から明治維新にかけて活躍したジョン万次郎と彼を助けたアメリカのホイットフィールド船長との親交、パナソニックをはじめとする国際的な経済交流、大リーグのイチローやゴルフの石川遼などのスポーツ交流、米軍による被災者救援活動「Operation Tomodachi（オペレーション・ともだち）」などにふれ、日米の交流の歴史と、揺るぎのない友好関係について強調しました。そのうえで、オバマ大統領の日本へ向けた救援スピーチ「日本と共に立つ」を紹介。「がんばれ日本」とエールを送られました。

続く質疑応答では、国際理解教育の柱でもある日本とアメリカの学生による留学の現状や課題などについて情報を交換しました。



春の新入生歓迎行事（日帰りバスツアー） 京都

平成 23 年 5 月 28 日（土）

平成 23 年 5 月 28 日（土），留学生・日本人学生計 45 名が「春季日本文化研修（京都）」に参加しました。午前 9 時に大阪教育大学柏原キャンパスを出発し，一路バスで京都に向かいました。10 円玉片手に平等院を見学し，鳳翔館で数々の貴重な展示物を目にした後，平等院表参道を散策しました。

午後からは，宇治市源氏物語ミュージアムを見学し，源氏物語の世界観を堪能した後，古代友禅苑へ行き友禅染体験を行いました。慣れない手つきで恐る恐る筆を走らせていた留学生達ですが，その後できあがった「世界でひとつだけ」のマイ風呂敷を手にして大はしゃぎでした。



留学生による無料語学教室（Language Table）

平成 23 年 6 月～ 7 月

平成 23 年 11 月～ 12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として、平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 5 年目を迎えました。平成 23 年度も第 11 回・12 回と開催することができました。第 11 回は東日本大震災後の学期ということもあって例年より小数での開講となりましたが、それでも年間計 72 名の受講生が留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならではの現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気が進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。本プログラムは平成 24 年度も継続して開講予定しています。

第 6 回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

平成 23 年 6 月 11 日（土）～12 日（日）

6 月に韓国・ソウル教育大学で第 6 回東アジア教員養成国際シンポジウムが開催され、本学からは栗林国際担当理事・向井国際センター長・若生正和准教授が参加しました。

第 6 回を迎えた本シンポジウムでは「東アジアの伝統文化と現代教師教育」を主題とし、韓国・中国・日本・台湾・ベトナムの 5 つの国・地域から約 150 人の大学関係者が東ア集まり、母国の教員養成の現状や課題について議論し、活発な意見交換が行われました。



釜山教育大学（大韓民国）との交流協定を締結

平成 23 年 6 月 15 日（水）

本学は、韓国の釜山教育大学校との間に、教育及び学術交流に関する協定書、並びに、学生交流に関する覚書を締結しました。両文書は 6 月 15 日の署名をもって発効しています。

韓国の教育大学は主に初等学校教師の養成を行う高等教育機関として位置づけられており、釜山教育大学校も韓国に 11 校存在する教育大学の一つです。同校は 1946 年、釜山師範大学（初等教員養成）として開校し、1963 年に釜山教育大学の名称で改編されました。その後、1993 年に現在の釜山教育大学校へと改称され、1996 年には教育大学院が設置されています。

教員数は 74 名で、学生数は学部が約 2200 名、教育大学院が約 400 名です。学部は倫理・国語・社会・数学・科学・実科・音楽・美術・体育・英語・コンピューターの各教育科と教育学科、幼児教育科の 13 学科で構成されています。また、教育大学院が設置されており、夜間制に 15 専攻、季節制に 11 専攻があります。

同校が位置する釜山広域市は韓国第 2 の都市であり、歴史的にも倭館が置かれるなど、古くから日韓交流の中心地として知られてきました。東アジア教員養成大学コンソーシアムの主要な参加校でもある釜山教育大学校との交流推進は、隣国の教員養成理解の深化のみならず、本学の学生・教職員の異文化理解の進展にも大きく寄与するものと期待されます。



留学生向け就職支援ガイダンスを開催

平成 23 年 6 月 24 日（金）

昨年に引き続き 6 月 1 日（水）、柏原キャンパスで留学生向け就職支援ガイダンスを開催しました。「留学生 30 万人計画」の骨子をなす入口から出口まで一環した支援策の一つとして、就職支援を積極的に推進することが打ち出されており、留学生が選んだ日本で遜色なく就職活動ができるよう、また、少しでも就職活動への不安解消につながるよう開催したものです。

当日、前半は日経就職ナビを運営している株式会社ディスコから中川氏を講師として招き、日本で就職活動する際に必要な知識、計画の立て方、留学生特有の問題点等について講演していただきました。

後半は、日本企業で活躍している本学卒業生リーチェンハン氏を招き、就職活動体験談を話していただきました。

参加した 10 名の留学生からは「母国の就職活動と全然違った。」「3 回生から動きださなければならないことがわかった。」などの感想が寄せられました。

国際センターでは、今後もキャリア支援センターと協力し、このような取り組みを継続して開催していく予定です。



中川氏によるガイダンス



卒業生のリー氏が体験談等を語る

留学生を対象に「大阪の文化」を開講

平成 23 年 7 月 6 日（水）

今年度から、留学生を対象に「大阪の文化」という新科目が開講されました。本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の文化や歴史、言語について、講義とフィールドワークを通して学んでいくオムニバス形式の授業です。

4 月から仁徳天皇陵や適塾、大阪城を訪れることで、大阪の歴史をより体験的に理解を深め、7 月 6 日（水）には、大阪市在住の観世流能楽師（シテ方）の山中雅志氏をお招きし、「大阪と能」についてお話していただきました。八尾市の高安や大阪周辺を舞台にした能や

高安流の能など、いつも電車の窓から見ている身近な場所が能と深く結びついていることがわかり、新たな発見となったようです。また、本物の面を着けて視界の狭さを体感したり、謡や扇子を持つての仕舞いの稽古に、留学生は積極的に参加し、楽しい授業になりました。

講演の準備にご尽力いただいた、高安ルーツの能実行委員会の細合道子氏からは「次世代の若者たちに残していくべき大切なことを紹介するための、貴重な講義の時間をいただきありがとうございます」と感想が寄せられました。



柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 23 年 7 月 6 日（水）

平成 23 年 11 月 9 日（水）

柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座、「異文化の暮らしを学習しよう」では、本学の留学生が講師を担当しています。平成 23 年度は 7 月 6 日（水）と 11 月 9 日（水）の 2 回開催され、7 月にはタジキスタン出身の日本語日本文化研修留学生ナルギス・ユヌソヴァさんが、母国のタジキスタンの歴史、食文化、宗教、伝統行事などについて話しました。日本ではあまり馴染みのない中央アジアの内陸国、国土の 93% が山地に覆われ、その半分が 3,000 メートル以上という美しい自然に恵まれたタジキスタンですが、様々な民族に支配されてきた複雑な歴史や、独立後の内戦の様子など、写真を使って分かりやすく説明しました。

また 11 月にはモンゴル出身の教員研修留学生、バトゲレル・バトドルジ（通称ドルジ）さんが母国について紹介しました。ドルジさんは、母国では中学・高校の社会科の現職教員です。日本国内でもメディア等を通じて少しずつ知られるようになってきたモンゴルですが、一般の人々の暮らしについてはまだ知られていないことが数多くあります。ドルジさんは、モンゴル相撲、馬頭琴、民族の祭典である「ナーダム」、独特な発声の「ホーミー」、「オルティンドー」という民謡等の伝統文化や、遊牧民族の暮らしと首都ウランバートルでの生活の違いなど、一つずつ丁寧に説明しました。聴講された市民の皆様から

は「知っているようで知らなかったことがたくさんあった」「モンゴルのことが新たにわかり、とてもよかった」等、様々なご感想を頂戴しました。

毎回の講座を楽しみにしておられる方も多いということで、地域に根ざした国際交流の取り組みとして、今後も継続したいと考えています。



留学フェアに参加

台湾 平成 23 年 7 月 23 日（土）～24 日（日）

韓国 平成 23 年 9 月 17 日（土）～18 日（日）

インドネシア 平成 23 年 10 月 8 日（土）～9 日（日）

マレーシア 平成 23 年 12 月 10 日（土）～11 日（日）

今年度も 7 月～12 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。本フェアは日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、今年度は台湾、韓国、インドネシア、マレーシアの 4 カ国に参加し、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学を P R しました。

《本学ブース訪問者数》

台湾（高雄・台北） 7 月 23-24 日開催 … 108 名

韓国（ソウル・釜山） 9 月 17-18 日開催 … 107 名

インドネシア（スラバヤ・ジャカルタ） 10 月 08-09 日開催 … 187 名

マレーシア（クアラルンプール）

12月10-11日開催 … 39名

4カ国7会場を通して計441名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。



短期派遣留学生に係る授業料免除制度を実施

平成23年7月28日（木）

本学では、『第2期中期目標期間における財務に関する戦略的方針（アクションプラン：Ver1.1）』に掲げられた“その他、学生のモチベーションを上げる戦略的免除”に基づき「短期派遣留学生に係る授業料免除制度」を実施します。

本制度は、本学の国際化を推進するために、学生の海外留学を奨励し、経済的な負担を軽減するために行うもので、本学協定校への短期派遣留学生（交換留学生）に対して、派遣年度の後期授業料を免除します。ただし、免除対象者は、独立行政法人日本学生支援機構が実施している留学生交流支援制度（短期派遣）奨学金を受給されない者に限り、学内選考による順位付けに基づき、予算の範囲内で決定します。

近年、経済的な理由で留学を断念する学生が多く、本制度を活用して、少しでも多くの学生を海外へ留学させ、グローバル人材を育成したいと考えています。

オープンキャンパスを実施

平成 23 年 7 月 31 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 53 人、留学等に関心のある日本人受験者 22 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、大学院総合基礎科学専攻の劉 克端さんと大学院学校教育専攻の何 木蘭さんが本学の良さや試験対策について語ってくれました。

並行して開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの相談会では、熱心な受験者の質問に対して、国際センタースタッフが丁寧に応えていました。

平成 23 年度前期留学生修了証書授与式を举行

平成 23 年 8 月 5 日（金）

平成 23 年度前期留学生修了証書授与式が、8 月 5 日（金）、事務局棟 4 階大会議室で執り行われ、日本語・日本文化研修留学生 2 名・特別聴講学生 12 名に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井国際センター長が祝辞を述べた後、日本語・日本文化研修留学生バックディピタック プラパーパンさん（タイ）、特別聴講学生の崔 承鎬さん（韓国）が修了生を代表してあいさつしました。

その後、大学会館 1 階第一食堂に会場を移し、地域の国際交流団体および教員とともに交流会を行いました。交流会では、本学 YOSAKOI ソーランサークル凜凜が力強い舞を披露し、次に修了生の南京恩さん（韓国）と梁正振さん（韓国）も所属するいちやりばちょーで一エイサー隊による沖縄エイサーが披露され、会場は大いに盛り上がりました。

最後に、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



日本文化を楽しむ会 プロ野球観戦ー

平成 23 年 8 月 11 日（木）

留学生・日本人学生 27 名，引率 4 名が今年も日本文化体験として，オリックス対楽天の
プロ野球戦を京セラドーム大阪で観戦しました。野球観戦の前に、本学野球部の森一真さ
んより日本の野球のルールやチームプレイについて事前講義をしてもらい、野球が身近で
ない学生たちも熱心に聞き入っていました。試合は地元大阪ということで，オリックス応
援席から観戦しました。テレビで見るのとは違い，実際の球場の雰囲気や選手のプレー，
ファンの応援は迫力があり，留学生たちも夢中になって歓声をあげて応援していました。
また，日本人学生から野球のルールについて教えてもらったり、出身国の野球について説
明したりと会話もはずみ、楽しい交流の機会となりました。



国立台中教育大学（台湾）楊学長が来学

平成 23 年 8 月 30 日（火）

本学の協定校である国立台中教育大学から楊思偉学長，許天維教育経営学部部長，胡豊栄国際研究部長が 8 月 30 日（火），本学柏原キャンパスを訪問されました。本学が加盟している大学コンソーシアム大阪が台湾財団法人高等教育国際合作基金会と協力協定を結んでおり，その活動の一環で開催された「日台高等教育国際シンポジウム－大学のグローバル化－」に楊学長が発表者として出席され，翌日に本学を訪問されました。

当日は，長尾学長，栗林副学長と学生交流や国立大学の法人化，教員免許状更新制度等について懇談しました。学長就任前からの友人である楊学長と長尾学長は「双方の大学交流を深め，我々と同じような友人関係をもつ学生たちを輩出したい」と話しました。

終始穏やかな雰囲気での談笑された後，附属図書館や国際センター等の学内施設を見学しました。



サブサハラ英語圏の理科研修プログラムを実施

平成 23 年 9 月 8 日（木）～30 日（金）

「平成 23 年度英語圏サブサハラアフリカ理科授業評価改善」事業の一環として JICA（独立行政法人国際協力機構）と本学による共同実施の研修プログラムが，9 月 8 日（木）から 9 月 30 日（金）までの日程で実施されました。

アフリカの開発途上国のうち，英語圏である国々の教育向上に寄与することをめざして，JICA からの要請を受け，昨年度から始まった事業です。今回は 7 ヶ国（エチオピア，ガーナ，ケニア，マラウイ，ナイジェリア，ウガンダ，ザンビア）から国家教育機関の専門官，指導官，指導主任 など 13 人が参加されました。

開講式では，長尾彰夫学長が歓迎の挨拶を行い，国際センターの向井康比己センター長が本研修のコースリーダーとして大学案内やスタッフ紹介などを行い，科学教育センターの任田康夫センター長が研修プログラムの概要について説明しました。一行は，1 ヶ月にわたる研修で，本学教員とのディスカッションや講義を受け，本学附属小中学校を始め，大阪府内の公立小学校などに出向き，理科授業を見学し，その場で指導教員らと意見交換，

給食体験なども行いました。

プログラムの後半には、授業案の個別指導や模擬授業、評価会なども実施し、修了式では、参加者から感謝の言葉が述べられました。



インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校との交流協定を締結

平成 23 年 9 月 21 日（水）

本学は、インドネシアのインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校 **Institut Seni Indonesia (ISI) Yogyakarta** と教育及び学術交流に関する協定を締結しました。調印式は、9 月 21 日に本学の長尾彰夫学長が同校を訪問して執り行われました。

インドネシアには国立総合芸術大学として 3 校の **ISI** があり、ジョグジャカルタ校はそのなかで最大規模の 3 学部(上演芸術・造形芸術・記録メディア芸術)を有する、同国を代表する芸術系高等教育機関です。独立後間もなく設立された、旧制の美術専門学校、西洋音楽専門学校、舞踊専門学校が統合再編されて、1984 年にインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校となりました。大学院も順次整備され、現在は全学部博士課程が置かれています。本学出身の教員もあり、教員数は現在約 250 名、学生数は約 3000 名です。

同校が位置するジョグジャカルタ特別州は今もなお王家が存続し、王が知事職にあるジャワ島の古都で、古くからインドネシアの諸島のみならず東南アジア島嶼部各地から人と物の集まる中心地でした。現在は同国有数の大学町で、国内外から多くの若い人たちが集まっています。インドネシアの伝統芸術を維持するとともに新しい表現や技法にも積極的に挑戦している同校との交流推進は、東南アジアの文化的伝統への理解を深めるとともに、芸術教育の多面的な可能性を開いていくものと期待されます。



秋の新入生歓迎行事（日帰りバスツアー）淡路島

タイ RU 短期受入

平成 23 年 10 月 22 日（土）

秋季日本文化研修として淡路島へ行きました。本研修は平成 23 年度後期の新入留学生歓迎行事を兼ねたものです。新入留学生 34 人を含む 83 名（留学生および留学生チューター、引率教職員を含む）でのにぎやかな旅となりました。

午前は淡路夢舞台を訪れ、日本が誇る建築家・安藤忠雄氏設計の植物園を見学しました。午後からは吹き戻しの里で吹き戻し作りを体験し、その後北淡震災記念公園で阪神淡路大震災について学習しました。新入生は在校生と積極的に交流を図り、大教大の新しい一員としてスタートをきりました。

また、本研修には、本学の協定校であるタイ国地域総合大学（タイ RU）からの短期受入留学生 8 名も参加しました。



明石海峡大橋をバックに記念写真



淡路夢舞台にて



吹き戻し作り体験



地震体験

「第6回かしわら国際交流フェスティバル」を柏原キャンパスで開催

平成23年11月3日（木）

大阪教育大学と柏原市との共催による「第6回かしわら国際交流フェスティバルーつながろう、柏原から世界へ！ー」を11月3日（木・祝）に柏原キャンパスで開催しました。前回に引き続き神霜祭と同時開催となり、本学留学生、学生、一般市民を合わせ650人が参加し、大勢の人で盛り上がりました。

今年度は、歌・踊りを披露するステージ、各国料理の提供、各国の文化紹介をするふれあいテーブルと3つのイベントを同時進行で実施しました。

メインステージでは、本学吹奏楽部によるオープニング演奏に始まり、長尾彰夫学長による挨拶の後、本学留学生の振り付けによる中国古典舞踊、伝統的なタイのネイルダンス、日本人にも馴染みあるフランス楽曲披露、美しい音色をもつキルギスの伝統楽器「コムズ」の演奏などが披露されました。

世界の食卓・フードゾーンでは、本学留学生が水餃子（中国）、タンユエン（中国）、ホットック（韓国）、トム・カーガイ（タイ）、タピオカミルクティー（台湾）といった5種類の料理を提供しました。

ふれあいテーブルでは、ドイツ・インドネシア・フランス・キルギスからの留学生がそれぞれ写真や地図を使って留学生自ら母国の文化や暮らしについて紹介しました。また、モンゴル・内モンゴル出身の留学生たちによるモンゴルのゲル（移動式住居）体験では、実際にゲルの中に入って遊牧民の暮らしに触れたり、伝統的な民族衣装を着て写真を撮ったりと参加者に楽しんでもいただきました。

昨年度に引き続き一般市民の方からも出演者を募集し、4つのパフォーマンスの応募がありました。地元柏原市の児童の皆さんで構成されている「シラダンス・スペース」による創作モダンバレエの披露、同じく柏原市の団体「フラ オ ナニフラリマ」によるフラダンス披露、インド出身のダナンジャイさんによる民族歌謡の披露、モンゴル出身のブヤンネメフ・テルメンさんによる伝統楽器「馬頭琴」の演奏等、会場はインターナショナルな雰囲気になりました。

短い休憩をはさんで、本学のよさこいソーランサークル「凜凜」による、よさこいソーラン踊りの披露から午後の部が始まりました。続いて留学生支援団体「国際ソロプチミスト大阪-柏原」による艶やかな着物着付け披露、韓国人留学生達による韓流ダンスパフォーマンスの披露では会場中一体となって盛り上がりました。最後は本学のサークル「いちやりばちょーで一エイサー隊」による沖縄エイサー踊りが披露され力強いパフォーマンスでフェスティバルを締めくくりました。

かしわら国際交流フェスティバルは、大阪教育大学と柏原市のさらなる国際化を推進するため、本学留学生と市民との交流を図り、異文化理解、国際理解に寄与することを目的としており、来年度は5月に開催する予定です。



「アフガニスタン教員養成支援事業－教育を通じた国際貢献」による短期研修を実施

平成 23 年 11 月 14 日（月）

本学では、今年度も国際貢献の一環として、交流協定締結校の一つであるアフガニスタン・イスラム共和国のカブール教育大学の講師 1 名の研修を行いました。

今回の研修は、3 月に採用されたばかりの Fahima Ibrahimkhil(ファヒマ イブラヒムカヒル)講師(視覚障がい教育)を対象に、平成 23 年 11 月 14 日から 12 月 10 日までの約 1 ヶ月間にわたって、国際センターと特別支援教育講座の連携のもとに実施しました。

カブール教育大学特別支援教育学科では、これまでの 7 名のスタッフに加えて、3 月には 4 名の講師が新たに採用され、視覚障がいコース・聴覚障がいコースに加えて、知的障がいコースが新設されました。

研修プログラムでは、視覚障がい教育に関する講義や大学院特別支援教育専攻学生ゼミの参加、本学で学ぶ障がい学生との交流、大阪府市内の視覚障がい者を教育する特別支援学校や視覚障がい児童生徒が学んでいる通常学校の見学、附属池田小学校で行われた JICA 研修（アフリカ地域教師教育）の見学を行いました。

また、12 月 7 日にはファヒマ講師が今回の研修で学んだことを帰国後、どのように活かしていくのかをまとめたアクションプランの報告会を実施しました。



JICA 研修員受入事業「アフリカ 地域教師教育（基礎教育分野）（仏語圏）」を実施

平成 23 年 11 月 21 日（月）

2011 年 11 月 16 日から 12 月 16 日にかけて JICA(独立行政法人国際協力機構)研修受入事業の平成 23 年度集団研修「アフリカ地域 教師教育（基礎教育分野）（A）（仏語圏）」を実施しました。

この事業は、国際貢献の一環として実施しているもので、仏語圏アフリカの教師教育改善のための方策を検討し、初等教育の質向上を図るため、仏語圏アフリカ（ベナン、ブルキナファソ、マリ、セネガル、カメルーン、ルワンダ、ブルンジ、コモロ、ジブチ、ニジューール）から行政組織所属の教員もしくは地方レベルの教員行政官等 15 人が研修員として来日しました。

本研修では、日本の初等教育の現状を理解するため、講義、授業見学のほか、小学校、教育委員会、教育センターなどを視察しました。特に広島平和記念資料館では被爆体験講話を受講し、平和教育についても深く考える機会となりました。研修員は、この研修の成果を踏まえ、作成した自国でのアクションプランを発表しました。

閉講式では、研修員の代表が、研修の感想や今後の意気込みを語り、本学や JICA に対し謝辞を述べました。



留学生に奨学金を授与

平成 23 年 12 月 7 日（水）

大阪教育大学留学生後援会奨学金等贈呈式を 12 月 7 日（水）、柏原キャンパスで行い、私費外国人留学生に奨学金が授与されました。

留学生代表として挨拶した学部 1 回生の朱蝶(シュチョウ)さん（中国）からは、「これは多くの人たちの善意によって集められた貴重なお金ですので、無駄にしないように本来の目的のために使いたいと思っています。留学は物価が高い経済大国に住んでいる私たち留学生にとっては簡単なことではなく、勉強以外のこと、授業料、生活費のことを考えなければなりません。家族の負担を軽くするためにアルバイトをしながら通学することになります。体の疲れは耐えられても勉強の時間は少なくなってしまうです。今回の奨学金を頂いて生活面での困難を解決すると同時にアルバイトの時間を減らし、多くの時間を勉強に使うことができました。深く感謝いたします。」とお礼の言葉が述べられました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 4 人、留学生後援会 7 人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 4 人の計 15 人に奨学金を授与しました。

留学生後援会では、今後もこの制度の拡充を目指し支援の和を広げて行くことにしています。

奨学金等提供団体

- ◆ 国際ソロブチミスト大阪－柏原
- ◆ 柏原ライオンズクラブ
- ◆ 大阪柏原ロータリークラブ
- ◆ 大阪教育大学職員 OB・元留学生
- ◆ 大阪教育大学生協
- ◆ 大阪教育大学留学生後援会





シンポジウム「留学で広がる可能性―大阪教育大学から世界へ飛び立つ―」を開催

平成 23 年 12 月 21 日（水）

第 2 回国際センターシンポジウム「留学で広がる可能―大阪教育大学から世界へ飛び立つ―」を 12 月 21 日(水), 柏原キャンパスで開催しました。シンポジウムは 4 部構成で行われ, このうち, 午前中のセミナーⅠ「留学の意義」, セミナーⅡ「留学のもたらすもの」では, 国際センター教員や在学生の留学体験談を交えながら, 留学がどのように仕事に結びつくか, カルチャーショックの先に得られるものなどが具体的に話し合われました。

午後のシンポジウムⅠ「留学や海外実習プログラムの教育的成果」では, 本学の協定校 University of North Carolina Wilmington の Dr. Brad Walker, 広島大学大学院の朝倉淳教授が, それぞれの大学で実施している海外研修プログラムについて, 研修に参加した学生が国際的な視野を身につけ, 成長を遂げていく様子を具体的に語りました。さらに, 本学卒業生で, アメリカの大学でアカデミックカウンセラーとして働いた経験がある潮崎泰子氏が, 自身の留学体験やアメリカの大学の学生に対するサポートシステムについて紹介しました。

シンポジウムⅡ「グローバル時代に求められる社会人基礎力とは」では, パナソニックのコーポレートコミュニケーション本部社会文化グループの小川理子氏が, 次世代の育成事業や学校への出前授業などの社会貢献の取り組みについて講演しました。また, 本学卒業生の東條さおり氏（豊中市立第十三中学校）と堀井美里佳氏（名古屋市立舟方小学校）, 本学在学生の杉山雄大さん（教員養成課程総合認識系）が, 教育現場での実践や留学・海外実習について発表し, 海外での経験が確かな社会人基礎力を培い, さらに教師として次世代の子どもたちの育成に貢献していることを報告しました。

最後に, 向井康比己センター長（国際センター）が「留学や海外体験を通して人は様々な面で成長し, 将来の可能性が広がることを理解して頂けたと思います。多くの皆さんが世界に飛び立っていくことを祈念しています」と締めくくりました。参加者からは, 「留学がもたらす経験は貴重であると再確認した。この経験が日本を支える力となる」「留学

への志が強くなった」などの感想が寄せられました。国際センターでは、今後もこのような取り組みを継続して行う予定です。



タイ・ラジャパット大学を水害慰問及びタイ国帰国留学生の会に出席

平成 24 年 1 月 7 日（土）～8 日（日）

長尾彰夫学長ら本学関係者は 1 月 7 日に、昨年タイ王国で発生した大規模水害によって被害を受けた本学協定校であるプラナコンスィーアユタヤ・ラジャパット大学（在アユタヤ）及びスアンスナントー・ラジャパット大学（在バンコク）を慰問し、被災学生及び大学に対して義捐金を渡しました。

本学を含む関西の教員養成系学部を持つ 4 大学（大阪教育大学・京都教育大学・滋賀大学・兵庫教育大学）と 40 ラジャパット大学とのコンソーシアム形式による交流協定を 1995 年に締結しており、本学の最も古い交流協定校です。

本学からは長尾彰夫学長の他、向井康比己国際センター長、吉田憲市学術連携課国際係長、京都教育大学からは安東茂樹理事、佐々木真理准教授が訪問し、本学からは義捐金 42 万円を手渡しました。この義捐金は、本学教職員有志による寄付の他に、柏原ライオンズクラブ、大学生協、大阪教育大学留学生後援会からの寄付も含まれています。

長尾学長は「東日本大震災では海外からの支援が日本人の心の支えになった。わずかな金額だが、これまでの友情の証として受け取ってもらいたい。互いに支えあう気持ちを大切に、今後とも交流を促進し、友情を深めたい」と挨拶し、被災学生及び大学関係者を励ました。



2011 年 10 月の水害時の様子

プラナコンスィーアユタヤ・ラジャパット大学



プラナコンスィーアユタヤ・ラジャパット大学にて



同窓会（バンコク）



チェンマイラジャパット大学での同窓会

ソウル教育大学 国際インターンシップ受入

平成 24 年 1 月 16 日（月）～2 月 12 日（日）

2012 年 1 月 16 日（月）から 2 月 12 日（日）まで、海外協定校のソウル教育大学（韓国）から学生 10 名を受け入れ、グローバルインターンシップを行いました。本プログラムはソウル教育大学より依頼を受け、昨年から実施しているもので、本年度で 2 回目となります。

本プログラムの目的は、韓国側としては国際的視野と優れた技量を身につけた教員を養成することであり、また大阪教育大学としては、本学の学生たちに韓国の学生たちとの交流を通じ、優秀なグローバル人材を輩出する韓国の大学や初等学校教員養成への理解を深めてもらうことにあります。

4 週間の期間中、インターンシップ生は、前半 2 週間は柏原キャンパスで教員養成課程と国際センターの授業を中心に聴講し、後半の 2 週間は東大阪市内の荒川小学校、太平寺小学校、長瀬北小学校で観察中心の教育実習を行いました。大学でも小学校でもインターンシップ生たちは熱心に学び、本学学生や小学校の児童・先生方と活発に交流していました。とりわけ、韓国・朝鮮半島にルーツを持つ子どもたちが多い東大阪市の小学校では、ただ学ばせていただくだけでなく、児童たちも韓国の学生たちに大いに関心を持ち、良い影響も受けているとご意見をいただきました。

なお、本プログラムは日本学生支援機構の平成 23 年度留学生交流支援制度（ショートステイ）プログラム（「日本の小学校における韓国教員養成大学学生インターンシッププログラム」）として採択され、インターンシップ生に奨学金が支給されました。



日本文化を楽しむ会着物体験 グローバル香芝主催

平成 24 年 2 月 4 日（土）

グローバル香芝様主催による日本文化体験が今年度も開始されました。先輩留学生から本行事について既に聞いている留学生もあり、期待に胸躍らせる女子学生 18 名・男子学生 5 名が、寒空のもと「日本文化を楽しむ会」に出かけました。

まず振袖と羽織袴に身を包み、後ろ姿を鏡に映して豪華な帯結びに大はしゃぎでした。その後着物姿のまま茶道体験にご案内いただき、伝統的な和菓子とお抹茶を堪能した後は、広間でお琴の手解きを受けながら、友人たちと賑やかに写真を撮りあいました。

賑やかなお昼時間を過ごし、午後からの日本文化は俳句でした。想いを 17 文字にしたためののは、日本語を母語にする者にとっても容易ではありません。が、現在日本語学習中の留学生たちは、題材の草花や外の景色に目をやりながら、和気藹々と俳句づくりを楽しんでいる様子でした。



留学生日本文化体験研修 九州

平成 24 年 2 月 15 日（水）～17 日（金）

今年度の日本文化体験研修の研修先は九州になりました。本研修は、日本の文化・歴史・自然等を実体験させ、深く理解させるとともに、関西圏とは異なる地域を訪問することにより、日本文化等の多様性と地域特性を学ばせることを目的に実施しています。

訪問地である別府、熊本城、長崎平和公園、出島等についての事前講義を受講し、九州についての予備知識を習得した留学生は万全の態勢で研修に臨みました。

初日は、新大阪駅から新幹線のぞみで博多まで行き、そこからバスで湯布院に立ち寄り、朝霧で有名な金鱗湖周辺を散策しました。また、別府温泉の旅館に宿泊し、露天風呂も体験しました。

二日目は、やまなみハイウェイを走り抜け、阿蘇山を眺めた後、日本三大名城の一つである熊本城を訪れ、大きな天守閣と美しい弧を描く石垣を見学しました。その後、熊本港からフェリーで島原港まで移動し、雲仙の温泉旅館に宿泊し、二日目も温泉を堪能しました。

三日目は、長崎の出島を見学し、日本の鎖国政策時代について学習し、続いて、長崎平和公園では、平和記念像が垂直に高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っていることを学びました。大浦天主堂やグラバー園も訪問した後、一行は再び新幹線に乗り込み、無事に帰阪しました。

駆け足の 3 日間でしたが、九州の文化・歴史・自然に触れ、様々なことを学ぶことができた研修内容でした。1 年間の短期留学生や 3 月末に本学を卒業する学生にとっては、一生の思い出となる研修旅行となったことでしょう。



平成 23 年度後期留学生修了証書授与式を挙行

平成 24 年 2 月 22 日（水）

平成 23 年度後期留学生修了証書授与式が、2 月 22 日（水）、事務局棟 4 階大会議室で執り行われ、教員研修留学生 2 名・特別聴講学生 4 名に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井国際センター長が祝辞を述べた後、教員研修留学生のバトゲレル バトドルジさん（モンゴル）、特別聴講学生の李 禮本（イ イエボン）さん（韓国）が修了生を代表してあいさつしました。

その後、大学会館 1 階 Dining TERRA に会場を移し、地域の国際交流団体および教員と交流会を行いました。交流会では、留学生トクトスーノワ ローザ アマントゥーロヴナさん（キルギス）がキルギス伝統楽器コムズを演奏し、次にいちやりばちょーで一エイサー隊による沖縄エイサーが披露され、会場は大いに盛り上がりました。

最後に、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



平成 23 年度国際センター運営委員会名簿

平成 23 年 10 月 1 日現在

区 分	氏 名	所 属	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	赤 木 登 代	国際センター	
	城 地 茂	国際センター	
	中 山 あおい	国際センター	(宿舎運営)
	長谷川 ユ リ	国際センター	
	若 生 正 和	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ＊	加 藤 可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小 林 和 美	社会科教育講座	
	水 野 治 久	学校教育講座	
	石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	(宿舎運営)
	住 谷 裕 文	欧米言語文化講座（仏）	
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座（英）	
学 長 指 名 委 員 ＊	安 部 文 司	欧米言語文化講座（英）	
	東 善 和	学術連携課長	

＊任期：平成 22 年 7 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

平成 23 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏 名	所 属	備 考
中 山 あおい	国際センター	委員長
若 生 正 和	国際センター	
加 藤 可奈衛	美術教育講座	
石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 22 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

国際交流委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 専任教員	赤 木 登 代	国際事業部門
国際センター 専任教員	中 山 あおい	国際教育部門
国際センター 専任教員	若 生 正 和	国際教育部門
国際センター兼任教員	松 本 マスミ	
国際センター兼任教員	水 野 治 久	
教員養成課程	吉 田 晴 世	
教員養成課程	米 川 英 樹	
教養学科	鈴 木 剛	
教養学科	中 野 知 洋	
夜間学部	斐 光 雄	
学部学術連携課長	東 善 和	学長指名

平成 23 年度留学生推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座
国際センター（国際教育）	長谷川 ユ リ	国際センター
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座

平成 23 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏 名	所 属
英 語	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤 木 登 代	国際センター
韓 国 語	若 生 正 和	国際センター

平成 23 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名		備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座	
国際センター（国際教育）	中 山 あおい	国際センター	
	吉 田 晴 代	学校教育講座	
	鈴 木 剛	教 養 学 科	

国際交流委員会ダブル・ディグリー検討専門委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 兼任教員	石 橋 紀 俊	
教員養成課程	三 村 寛 一	
教養学科	松 本 マスミ	
第二部	大 脇 康 弘	
委員長指名	白 井 利 明	教務委員会
委員長指名	石 本 誠 之	学務部長
委員長指名	堺 弘 次	学術部長
委員長指名	柏 本 昌 彦	教務課長

編集後記

科研費の調査で、台湾の交換留学生の意識調査を行いました。もちろん、授業や日本人との色々な活動が交換留学生の留学目的にとってよかったのですが、特に目を引いたのは、他国からの留学生同士が日本語を使って行う交流がよかったという意見でした。忖度するに、日本人との会話では、緊張したり、あるいは語彙が複雑、さらには速度が速すぎて自己を表現することができないというストレスになるのではないかと思います。また、留学生だからといって簡単な単語をあえて選んだり、わざとゆっくり話すというのも幼児に対する話しかけとは違うので、これも留学生の目的に合わないのでしょう。同じ国（同じ言語圏）からの留学生同士では、やはり母国語を使うことになってしまい、日本語を使うという目的に合いません。その点、違う国からの留学生同士だと、話す速度も適当で、使う単語も同じ授業を受けているので似通った表現になり、コミュニケーションが、日本人の話す日本語より取り易いという訳です。それによって、日本語に対する自信がつき、学習の励みになったという事でしょう。留学生は、異郷で勉学に励むわけですから、様々な障害があります。それを克服するためには、留学生同士の交流の場も設けるように努めなければならないようです。留学生寮を整備したり、留学生の文化研修を催したりと、経済的には大変なことが多いのですが、全学を挙げての支援をお願いしたいものです。

そういえば、今年のセンター試験で、蘇軾の故事が出題されていました。外国語ではなくて、国語にです。漢文なので国語に出題されて当然なのですが、いわば中国語の古典を読むわけですが、日本人にとって、現代中国語より易しいわけです。他国の留学生を古代の中国人と置き換えてみると、もしかしたら似たような現象なのかとも思って、試験監督をしていました。しかし、そんなことより「東坡肉」という中華料理を思い出して、早く食事の時間にならないかと不純な気持ちだったのも事実ですが。

末筆になりましたが、本誌に投稿していただいた先生方、留学生および学生の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

次号原稿募集

本年報は、留学生教育や国際交流についての多様な考え方や意見を幅広く取り上げていくために企画したものです。次の要領で投稿を募集いたします。お問い合わせは国際センターまで。

枚 数：論 文 10 枚程度（ワード、40 字×34 行）

その他 2 枚～7 枚

（原稿の入ったディスク等と印字した原稿を頂ければ幸いです。）

2012 年 4 月 27 日 印刷

2012 年 4 月 27 日 発行

大阪教育大学国際センター年報 第 17 号

Bulletin of Osaka Kyoiku University

International Center No.17

編集兼発行者

大阪教育大学国際センター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話 (072)978-3299, 3300

印刷所

カ ツ ヤ マ 印 刷

〒543-0044 大阪市天王寺区国分町 5-1

電話 (06)6771-1000